

チベット語訳『妙法蓮華註』 「方便品」和訳（2）

望 月 海 慧

1 はじめに

本稿は、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続くものであり、第2章の「方便品」の後半部分の和訳を提示する。⁽¹⁾既出の和訳を提示すると次の通りである。

①「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013, pp. 1-22. ②「チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳（1）」『身延山大学仏教学部紀要』18, 2017, pp. 1-39. ③「チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳（2）」『身延山大学仏教学部紀要』19, 2018, 印刷中. ④「チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳（1）」『身延論叢』23, 2018, pp. 1-40. ⑤「チベット語訳『妙法蓮華註』「信解品」和訳」『大崎学報』173, 2017, pp. 37-80. ⑥「チベット語訳『妙法蓮華註』「菓草喩品」和訳」『身延山大学東洋文化研究所報』19, 2015, pp. 77-103. ⑦「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』14, 2014, pp. 1-18. ⑧「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳」『身延論叢』20, 2015, pp. 1-54. ⑨「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014, pp. 35-58. ⑩「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林, 2014, pp. 41-51. ⑪「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013, pp. 1-15. ⑫「チベット語訳

『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳『日蓮仏教研究』6, 2014, pp. 7-2. これらの和訳により、残りは「譬喩品」のみである。

2 『妙法蓮華註』「方便品」の構成（後半部分）

今回の和訳箇所は、「方便品」の中盤から後半で、増上慢の声聞が退座した後世尊の説法にあたる部分である。まず、世尊は、舍利弗に対して、衆生に仏知見を開き、入れ、示し、悟らせ、その道に入れるという一大事因縁のために出現したことを伝える。その一大事は、また、菩薩の教化であり、一乗により衆生のために法を説くのであり、先に三乗を説いたことは方便であることが宣言されている。そして、その方便として三乗を説いた理由が解説されている。その内容を、チベット語訳の区分に基づいて示すと、次のとおりである。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| [46] 受け入れない衆生の排除 | [47] 聞いていないことを聞くこと |
| [48] 如来の説法への信解 | [49] 解説すべきもの |
| [50] 解説すべき意味 | [51] 何に依るべきか |
| [52] 説かれるべき法 | [53] 如来の知見 |
| [54] 一乗を始めること | [55] 法にとどまること |
| [56] 三時の仏の法式 | [57] 過去の衆生利益の結果 |
| [58] 未来の諸仏の法式 | [59] 未来の衆生教化の結果 |
| [60] 現在の仏の法式 | [61] 現在の衆生による結果の獲得 |
| [62] 衆生に対する法の解説 | [63] 法式に依ること |
| [64] 第二と第三の乗がないこと | [65] 真実の特徴 |
| [66] 仏が五濁に生まれた理由 | [67] 二乗の聖者の特徴 |
| [68] 増上慢の特徴 | [69] 真実の聖者の特徴 |
| [70] どのように法の器になるのか | [71] 善巧方便でないものに依る者 |
| [72] 善巧方便に依る者 | [73] 三乗の後に一乗を説く理由 |
| [74] 増上慢に関すること | [75] 大きな不善根 |

- | | |
|-------------------|--------------------|
| [76] 種々なる原因 | [77] 疑いのない言葉と因縁と譬喩 |
| [78] 十二部経 | [79] 根のままに理解し難いこと |
| [80] とどめさせること | [81] 一般を説いたもの |
| [82] 発心の力 | [83] 仏子の5功德 |
| [84] 未来時の成仏 | [85] 信を起こす請願 |
| [86] 不二 | [87] 一大事 |
| [88] 開示悟入 | [89] 理解させることの平等性 |
| [90] 功德の殊勝 | [91] 外の特徴による莊嚴 |
| [92] 理解させること | [93] 入れること |
| [94] 62見 | [95] 不同であること |
| [96] 法にとどまること | [97] 過去の仏法 |
| [98] 方便のみを説いたこと | [99] 真実を説いたこと |
| [100] 方便を説いた理由 | [101] 仏が現在いること |
| [102] 慈愛 | [103] 塔を宝珠で飾ること |
| [104] 塔を造ること | [105] 娯楽による造塔 |
| [106] 仏像を造ること | [107] 宝珠で飾ること |
| [108] 仏像を描くこと | [109] 遊戯により像を描くこと |
| [110] 造像のまとめ | [111] 4物による供養 |
| [112] 音楽による供養 | [113] 歌と歌曲による供養 |
| [114] 花の供養 | [115] 身業による供養 |
| [116] 仏の名前を述べること | [117] 聞法による一切智の獲得 |
| [118] 末法の方便が同じこと | [119] 真実の成就 |
| [120] 末法の法を解説した理由 | [121] 一乗に尽きること |
| [122] 三性の起源 | [123] 現在の意味 |
| [124] 方便と真実 | [125] 先に方便を説いた理由 |
| [126] 実際に把握すること | [127] 生じる場所を妨げること |

- | | |
|--------------------|---------------------|
| [128] 解脱を求める邪行 | [129] 結果を得てからの意図 |
| [130] 解脱に適さないこと | [131] 説法の勧請 |
| [132] 大乘の衆生を損うこと | [133] 三乗による衆生利益 |
| [134] 福分をもつ者の教化 | [135] 自分が悟った時 |
| [136] 童子の心をもつ者 | [137] 方便のみで導くこと |
| [138] 随行を説くこと | [139] 三乗の変化 |
| [140] 三宝の生起 | [141] 現在と過去の成就 |
| [142] 根が熟した者 | [143] 意味をなす意図 |
| [144] 真実の解説 | [145] 把握できること |
| [146] 法のまとめ | [147] 聞いていないことを聞くこと |
| [148] 獲得し難い喩例 | [149] 信を起こすことの請願 |
| [150] 諸仏の秘密の賞讃 | [151] 疑惑を取り除くこと |
| [152] 我慢により地獄に行くこと | [153] どのように説かれるのか |
| [154] 歓喜の心をもつ者の成仏 | |

最初に、[47] と [48] は漢文の 【54】 【55】 【56】 となるが、[47] の經典の見出し語が「世尊に再び聞く」というシャーリプトラの語で始まっているので、[47] が 【53】 に相応し、世尊の言葉で始まる [48] が 【55】 に相応しているようにも見えるが、[47] の解説文は 【55】 に相応している。それ故に、見出し語は漢文と異なるものの、内容的には、[47] が漢文の 【53】 と 【54】 を1つにまとめたものとする方が解り易いのかもしれない。

[52] は漢文の 【60】 【61】 【62】 に相応するものの、【61】 以下の注釈内容の見出しのみを述べた 【60】 と結びを述べた 【62】 は省略されている。【61】 は、長大な解説を開、示、悟、入の4つにまとめて抄訳するものの、チベット語訳ではその解説の前後関係に混乱がある。このことは、【60】 と 【62】 の經文の見出し語が同じであることが原因であろうが、經文の四仏知見に相応する句は、チベット語訳では、サンスクリットと同じように、入を「仏知見に入らしめる」

と「仏知見の道に入らしめる」の2項目となり、5 仏知見になっていることもその要因にあるのかもしれない。⁽²⁾ また、チベット語訳が説くアビダルマの解釈は漢文に確認することはできない。さらに、続く [53] においても、四仏知見の混乱が継続し、チベット語訳は漢文における経論の引用からなる長文の解説をほとんど翻訳していない。

次に、混乱が見られるのが、後半の偈頌部分である。まず、[74] において偈頌の総数を、漢文に従って121とする。ただし、この数字は鳩摩羅什訳に基づくものであり、チベット語訳の『法華経』では偈の数は108であることから、細分化された支分の解説においては混乱が生じることになる。まず、[75] は漢文の【85】【86】【86】を1つにまとめたものであるが、【85】の最初の経文は、チベット語訳では前の [74] において解説される偈の一部であり、漢文の偈との不整合による混乱が見られる。続く [76] では、111偈が6つに分けられているが、漢文では6偈、7偈半、1偈半、18偈半、70偈半、7偈とされるのに対し、チベット語訳は6種に区別すると言うものの6偈、7偈半、8偈半、71偈、7偈の5つしか述べられない。相違する8偈半と71偈は後半の支分においては18偈半と70偈半と修正されていることから、1偈半と18偈の間に文字の欠落があった可能性もあるが、チベット語訳者が偈頌の総数を意識していなかった可能性もある。

[78] の12部経に対する解説では、前半の経論に基づく解説箇所はチベット語に訳されているものの、後半の『法華経』の諸品に配当した箇所の翻訳はなされていない。これは、鳩摩羅什訳との章のタイトル、数、場所の異同が間接的原因となっているのであろう。

[93] では、【105】【106】【107】【108】が1つにまとめられているが、【105】は17偈を4分割した第3項の1偈であり、その第4項の10偈を8偈と2偈に分け、その前者を1偈と6偈と1偈に分けた最初のものが【106】であり、6偈を1偈と5偈に分けた前者が【107】で、後者を4偈と1偈に分け、その4偈を1

偈半と2偈半に分けた前者が【108】に相当する。そなわち、漢文の4項目はそれぞれが構造上異なるレベルにあるものであり、チベット語訳者は漢文の科文の構造を無視していることになる。この混乱は、続く[94]の【109】と【110】を1つにまとめたものと、[95]の【111】【112】を1つにまとめたものにも影響を及ぼしている。

[115]では、【131】と【132】を1つにまとめているが、これは【133】の結びを省略したものである。ただし、[114]の花の供養と[115]の身体の供養が、[111]の区分においては、漢文の順序を変えて、身体の供養が先に訳されており、それが誘因となった可能性もある。

[126]においては、30偈が2偈と28偈に分けられているが、漢文では30偈半が2偈と28偈半となっている。この混乱が、続く[127]においても見られ、ここでは28偈が20偈半と7偈に分けられているものの、前者は漢文と同じように3偈半、3偈、11偈半、3偈半の21偈半となっている。ここでの偈の分け方の相違が原因となり、漢文の【144】と【145】が[127]に、【146】と【147】が[128]にまとめられている。ただし、[127]は最初の3偈半を1偈と2偈半に分けた前者と、後者を1偈半と1偈に分けた前者を1つにまとめたものであり、[128]は最後の1偈と、上位の3偈を3つに分けた最初の半偈を1つにまとめたものであり、漢文の科文の構造がここでも無視されている。

[139]が相応する【158】では、釈尊が5比丘に説法をした物語が詳細に述べられているが、チベット語訳はその翻訳を欠いている。続く[140]が相応する【159】は三転十二行相を経論の引用に基づいて解説したものであるが、チベット語訳はその翻訳も欠いている。これらは、詳細な解説文の翻訳を省略したものである。

3 チベット語訳テキストの和訳

[46] 経に、「それから世尊は」と言うものから「その意味を解説した」と言

うまでには、⁽³⁾受け入れられない衆会が排除され、器となった正しい衆会のみに法を解説することが意図されている。⁽⁴⁾

[47] 経に、「世尊に再び聞く」と言うものから「稀にある時に生じる」と言うまでには、⁽⁵⁾これ以後は、まだ聞いていないことを聞くべきことと、この解説すべき法は知り難いことを説いたものと、如来が説かれた方便などに依ることと、一乗にとどまるべきことと、2種の保持することを述べたことが示され、これによりまだ聞いていないことを聞くべきことと、聞き難いことと、その譬喩が説かれている。「転輪王が生まれた時に海が減少することでこのウドンバラの花が生じるように、仏世尊が世間に生じたことで輪廻の相続が抑制され、大乘の意味が明らかにされるであろう」と言う意味である。⁽⁶⁾

[48] 経に、「シャーリプトラよ、そのように」と言うものから「私は他のことを述べない」と言うまでには、⁽⁷⁾如来の説かれたものに対して信解をなすべきことが説かれている。⁽⁸⁾

[49] 経に、「シャーリプトラよ、如来の意図したものは理解し難い」とは、⁽⁹⁾解説すべきものが説かれている。⁽¹⁰⁾

[50] 経に、「それは何故か」と言うものから「如来は知っている」と言うまでには、⁽¹¹⁾解説すべき意味が述べられており、考察されるものと考察の行境を超えることが真如の真実義で、言葉の一切の言説を超えている際に、世尊が善巧方便をとまなうことで文字と言葉の門から三乗の意味が解説されている。⁽¹²⁾

[51] 経に、「それは何故にか、と言え」と言うものから「世間に生じて」と言うまでには、⁽¹³⁾何に依るべきかの意味を示しており、それも、所作であるその一大事を先に述べ、後に解説され、これは最初である。何に依るべきかは、世尊だけが知っている法で、知り難い意味である。その意味は、衆生たちに利益をなすためにそれぞれの根に合わせて法が説かれている。⁽¹⁴⁾

[52] 経に、「その如くならば、シャーリプトラよ」と言うものから「知見の道に入る」と言うまでには、⁽¹⁵⁾これ以後は説かれるべき法が詳細に解説され、「大

義の一大事」とは、如来の知見で、それも区別することと、説くことと、理解させることと、入ることのこの4つを説いている。この4種により如来の知見を考察している。その知恵の所作と自性の両方を「知見」と言い、勝義と世俗の両方の行境に入ることである。そのうち、区別することは無上の意味で、説くことは同じ意味で、理解させることは知らないことを知る意味で、入ることは不退転の地に入って知恵の無量の業を説くことである。無上菩提と涅槃の両者は他のものより聖なるものなので、「無上」と名付けられる。説かれる同じ意味は、三乗のすべてを法身が同じように満たしているので「平等」と名付けられる。理解させることは、二乗の者たちは真実の本質を知らず、一乗の意味にとどまらないので、如来は知らないことを知らせるためにこれを説いており、入らしめるとは、三相のいずれかを説いたものに入ること、獲得すべき方便が説かれている。如来が世間に生じて法を説いても、漸頓と大小の異なる相によっても、一切衆生にこの知恵を見せ、入れることとは別なものを説くのではない⁽¹⁶⁾。知恵を見ることと入ることを見ることは、明らかに理解することで、識は五識をもつことで、アビダルマにも、智を見ないことと、見を知らないことと、智も知り、見も見ること、3種である。智を見ないことは有漏智で、不生の知恵である。見を知らないことは八忍と世間の真実を見ることである。智も知り、見も見ること、残りの別の知恵である。耳で聞くようにとは、知ることと合わせられる。眼で明らかに⁽¹⁷⁾見ることが見と合わせられる。また、「大義」とは、如来の自性を説いており、無明の障碍により妨げられる衆生に真実の自性を述べるのが区別である。その同じものを区別して、解説することが説かれている。また、「一切智を離れて別の意味は存在しない」と説かれており、一切智は、法と人に我はないことを知ることである。知恵は一切種智で、その2つを超えた他の法は存在しないので、無上である。それについて区別することと説くことと理解させることのこの3つにより無上の結果が説かれ、入ることにより成就の原因が説かれている。⁽¹⁸⁾

[53] 經に、「シャーリプトラ」と言うものから「知見の道に入る」と言うまでには、如来の知見により衆生たちに説いて、二乗の者たちは無上の福分がないだけで、彼らの心はその結果に入るので、その相のように説かれている。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

[54] 經に、「シャーリプトラよ、私が一乗から始めて」と言うものから「2や3と言うものは僅かたりとも存在しない」と言うまでには、授記の中において、一乗を始めることにとどまることで、この一乗を始めることは、衆生らに法を説くことであるが、独覺の第二乗や「声聞」と言う第三乗の殊勝が次第に配置されることはなく、そこで甚深か甚深でないか、難しいか易しいかの次第に配置されるものでもない。この場合に二乗は除かれ、大乘は一つであることを説いた意味を示している。⁽²¹⁾⁽²²⁾

[55] 經に、「シャーリプトラよ、十方の一切世間の意味もそれである」とは、法にとどまることで、現在おられる仏シャーキヤムニも一切の仏の法式に依り、多くの有情に信を起こさせ、自分と同じことをなすために先に方便だけを説いてから後に真実は何であるかを説いており、「以前の十方の仏の法式もこれである。三時の仏世尊の法式もこれである。現在私が説いた法式もこれである」と説かれており、これは十方の仏の法式が説かれている。「三時から十方」とは、他のものがなく、「十方から三時」とは、他のものがなくても、横と縦が特殊なものを解説している。⁽²³⁾⁽²⁴⁾

[56] 經に、「それは何故にか」と言うものから「一乗から始めてその法の解説も一切智の辺際まで」とは、三時の仏の法式が説かれており、これも2種ある。前に三時のそれぞれの法を説いたものがすべて同じであり、前者にも3種あり、過去と未来と現在の3種である。3つも2つずつで、仏の法を説いた法式が同じことと、衆生利益をなした結果が同じことで、これは過去仏の法式と同じことが説かれている。前に多くの因縁により方便と説いたことは、後に仏の一乗を獲得させるために説かれたのである。注釈より、方便は結合で、小乗の蘊と界と処を理解し、苦を厭い、苦を捨て、解脱を得ることが大乘の波羅蜜⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾

で、四摂事により自利と利他をなす対治の法である。「原因」とは、注釈に⁽²⁷⁾、前に6義を説いたもののうち第2の中から解説したとおりである。前に「原因と縁の種々相」を説いたのは、三乗も言葉と名称として設定されただけで、「真実の意味があるのではなく、真実の意味を解説したものではない」と言う意味である。「譬喩」とは、例えば、牛に乳と酪と生蘇と熟蘇と醍醐があるのと同じで、そのうち小乗は乳の如くである。大乘は醍醐の如くである。この譬喩により無上なる大乘が説かれており、声聞なども無上の大乘と同じであると説かれている。声聞と同じであることを説いたのが、仏世尊の法身自身は衆生と独覚などの法身と同じで、違いはないと説かれており、この喩例と合わせれば、衆生は牛の如くで、声聞は乳の如くで、独覚は酪の如くで、菩薩は生蘇の如くで、大菩薩は熟蘇の如くで、仏世尊は醍醐の如くで、醍醐が最高の正しいものであるように、仏の一乗もそれと同じで、牛の乳から醍醐までになるので衆生から仏まで特徴が異なっている、自性は同じで、不二である⁽²⁸⁾。

[57] 経に、「それは衆生たち」と言うものから「菩提を得ている」と言うまでには、過去の衆生の利益をなした結果が同じと説かれており、前に二乗により利益をなしてから後に仏として一切相を知る知恵を獲得することが説かれている。一切相を知る知恵は、仏の真実の知恵である。「相」とは、法の一切の相を知ることで、真実は牛の車の如くである⁽³⁰⁾。

[58] 経に、「このようにシャーリプトラよ、未来時」と言うものから「一切相を知る最後まで」と言うまでには、未来の諸仏の法式が同じであることが説かれている⁽³¹⁾。

[59] 経に、「それらは衆生たち」と言うものから「菩提を得るであろう」と言うまでには、未来の衆生を教化するようになる結果が同じことが説かれている⁽³²⁾。

[60] 経に、「シャーリプトラよ、現在時に」と言うものから「一切相を知る法を解説する」と言うまでには、現在の仏世尊の法式が同じことが説かれてお

り、意義と利益と樂は、樂をなす意味で、樂は樂を与えることである。苦から引き出し、樂を与え、知恵と福德を与え、世間と出世間の結果を与え、大と小の結果を与えることが順序通りに合わせられる⁽³⁶⁾。

〔61〕經に、「シャーリプトラよ、私も」と言うものから「一切種智」と言うまでには、現在のすべての衆生は結果の獲得が同じであると説かれている⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾。

〔62〕經に、「それは衆生たち」と言うものから「菩提を得るであろう」と言うまでには、衆生たちに対する法の解説も、一乗から始めて如来の知見そのものを区別し、示し、理解させ、入れるためである。「区別する」とは、外道たちの誤った見解から退けて、真実の法に入れることである。「入れる」とは、声聞たちに大菩提を理解させ、小乗から退いてから大乘に入れることである。注釈より、入れることは無上の意味である。「説く」とは、同じ意味で、疑惑があるならば、修習し、修行することである。「理解させること」は無知の意味で、発心していないものを発心させ、外道の者たちを正しい目的に入れるためである。「入れる」とは、不退の地に入れることで、発心した者たちを法に入れ、声聞たちを大菩提に入れることである⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾。

〔63〕經に、「それは衆生たち」と言うものから「菩提を得るであろう」と言うまでには、「私もこの法式に依り、すべての法もそれである」と説かれており、仏だけに種々なる知の力があるので、衆生の種々なる根を知り、知恵の力で信解を知り、信解とは行に対する信解である。種々なる界を知る力があるので自性を知っており、不定種の界に属する者が信解を起こすために、先に三乗を方便としてのみ説いてから後に究極の乗が説かれており、それぞれの衆生が仏の一乗を獲得し、一切の相を知る智を獲得するために、經に一乗から始めて一切智の最後まで説かれている⁽⁴²⁾⁽⁴³⁾。

〔64〕經に、「シャーリプトラよ」と言うものから「二乗を設定することもなければ、どうして三があろうか」と言うまでには、「独覚の第二乗もなければ、声聞の第三乗があることがどうして述べられよう」と説かれており、經典に「山

羊の車と鹿の車と牛の車を望むために燃えている城市から出たことは、二乗を取り除くことに尽きるが、牛の乗りものも除いているのではなく、それにより「ここに二乗の涅槃と辺際に至ることはない」と説かれている。注釈より⁽⁴⁵⁾、二乗がないとは、二乗の涅槃がないことで仏世尊だけが⁽⁴⁶⁾大涅槃を獲得して、一切の知恵を完成する辺際に至るので「大涅槃」と言われる。それも三事が完成して、二乗のように考察され、滅に依るものではなく、大智の法身があるのではなく、大涅槃があるのではなく、仏乗だけに⁽⁴⁶⁾ある。注釈に、授記の中から6義により「法は何か」などと説いた5義が説かれており、「法は何か」とは、まだ聞いていないものを聞くべきであり、過去に生じた説法から聞かせるのである。「如何なる法か」とは、種々なる成就の解説と、原因と根本が異なるものと説いたものと、所縁と語義解釈による善巧方便を説いたものである。「法はどの如くか」と言うことは、「何に依るのか、と言うならば、なすべき一大義のために」と述べられている。「法の特徴はどのようなのか」とは、一乗にとどまってから衆生の根に应じて仏の自性があり、仏法にとどまることである。「どのような自性なのか」とは、「二乗の自性は排除され、一乗の自性だけである」と述べられたそれらは、⁽⁴⁷⁾仏世尊の法身と同じである。

[65] 経に、「しかも如来」と言うものから「濁世に生まれたならば」と言う⁽⁴⁸⁾までには、ここで真実の特徴が説かれており、これ以後に4種の疑惑が、注釈⁽⁴⁹⁾から5義により示されており、4種の疑惑は何か、と言えば、いつ説かれるのか、我慢に関してどのように知るのか、説かれる器にどのようなになるのか、どのような場合に虚妄にならないのか、の4つである。この際に最初の疑惑を排除⁽⁵⁰⁾することが説かれており、注釈に、「仏世尊はいかなる時に方便のみとしての説法を示すのか、仏世尊は如何なる時に先に二乗を方便のみとして説いて、後に一乗の真実を説くようになるのか」と言うことにも2種あり、先に五濁の時に生じたことが説かれ、後に何故かが説かれており、濁にも5種ある。名称を説いたものと、特徴を説いたものと、対治と、廃立と、1つずつまとめたもの

との5つである。そのうち名称を説いたものが濁である。「濁」とは、垢や不淨の意味である。例えば、不淨で垢をとまなう食べ物は汚れており、「濁」と言われる。まとめれば、劫が生じる時に三災は徐々に減少し、煩惱は徐々に薄れ、衆生たちは善に向かい、邪見は少ないので命根は後々長く、善妙でよいものは徐々に生じ、衆生に苦がなく、仏の變化身が世間に生じない時が「清淨」と言われる。仏の變化が世間に生じれば、劫が減少する時が生じることに近づき、小さな三災も徐々に生じ、煩惱も徐々に生じ、衆生も罪過を喜び、見に徐々に執着し、命根も徐々に短くなり、徐々に惡土を汚す時が「濁」と言われる。「五」とは、数が説かれている。そこで特徴を説いたものは、注釈に、現在の人たちは寿命が短く、百年を超えないことが「寿濁」と言われ、アーラヤ識における習気の相により業が異なることが命根の特徴である。善業の結果の力が劣っており、命根が徐々に短くなることは、殺生の業の力による。父母を知らず、沙門とバラモンと師を知らず、法を知らず、この世間と彼の世間の業の異熟により恐れることなく、畏怖せず、布施をなさず、福德をなさず、戒を守らず、まとめれば、罪過をなし、善のない衆生が、「衆生の濁」と言われる。非法に執着する衆生が武器と衆生を損なう道具を布施して、戦いや口論を喜び、虚妄と陰謀をなし、誤った法を保持し、不善法を行ずることが、「煩惱の濁」と言われ、五見とは異なる一切の煩惱と一切の随煩惱が「煩惱の濁の特徴」と言われる。非法の貪欲の武器などを与えて、殺生に入れ、財産に執着し、武器を与えることで戦いや口論の根本になり、さらにまた、罪過の不善法に属する煩惱と、随煩惱の習気の力により煩惱が生じ、世間において正法が沈み、あるいは影像のみを行ずる邪見が生じることが「見濁」と言われる。外道の惡見が多く生じ、飢饉の劫と病気の劫と兵器の劫が生じることが「劫濁」と言われる。そのうち対治は、行からの対治が説かれており、注釈に、宗義の4種と五濁に合わせられる。⁽⁵²⁾ 4宗義とは、世間の宗義と、それぞれの根の宗義と、対治の宗義と、勝義の宗義とである。そのうち劫の濁と衆生の濁の対治が世間の宗義である。寿

命の濁の対治がそれぞれの根の宗義である。煩惱の濁と見の濁の対治が対治の宗義である。3つの宗義により五濁に打ち勝ってから勝義に入り、真実たるものが明である。そのうち廃立は、質問であり、何故に五濁から増減しないのか、と言え、返答する。衆生に2種あり、罪惡を行じる在家の人と邪見で出家した外道とである。在家で知恵がなく煩惱が生じたものが「煩惱濁」と言われる。外道で意味のない邪見を求めるものが「見濁」と言われる。さらにまた、鈍根は「煩惱濁」と言われ、鋭根は「見濁」と言われ、2種の原因により未来の結果を得る時に離合が異なるので濁は2種に分けられる。2つの内なる結果がまとめられて「衆生濁」と言われる。2つの外なる衆生の罪惡の結果がまとめられて「劫濁」と言われる。根本が説かれても、内の不善の結果は、「寿命濁」と言われる。外の不善の結果は「劫濁」と言われ、罪過の原因と結果は、衆生に罪業があるようになるので「衆生濁」と言われ、それ故に、五濁の特徴が説かれているので、それを厭うために五濁が解説される。そのうち一つずつをまとめたものは、經典に12の濁が説かれている。すなわち、劫濁を説いたものと、時濁を説いたものと、衆生濁を説いたものと、煩惱濁を説いたものと、寿命濁を説いたものと、三乗の差別の濁を説いたものと、不浄な国土の濁を説いたものと、教化し難い衆生の濁を説いたものと、種々なる煩惱を説いた濁を説いたものと、外道の迷乱の濁を説いたものと、魔の濁を説いたものと、魔の業の濁を説いたものと12である。この12の濁は変化の仏の国土において大乘の者だけにある。五濁の不浄な国土において大小の2つの乗がある。劫と時が劫濁で、衆生と教化し難い衆生が衆生の濁で、煩惱と種々なる煩惱が煩惱濁で、寿命が寿命の濁で、外道の迷乱は見濁で、これらの8つが五濁である。残りの4つは三乗の差別で説かれている。不浄な国土における魔と魔の業は五濁にまとめられない。注釈に、⁽⁵³⁾清浄は濁ではない意味で、濁にも6種あり、この濁を離れれば、「清浄」と言われる。6は何か、と言え、執着の濁と、行道の濁と、障碍の濁と、種々なる特徴の濁と、功德をともしない濁と、疑惑の濁と

の6つである。対治であるから、懈怠を捨てているから、清浄であるから、説かれているから、福德をとまなっているから、知恵をとまなっているから、この6つの対治と6つの尽きることが順序通りに合わせられる。法性である仏は五濁の時に世間に赴き、それ故に仏世尊は五濁の時に世間に赴く。何故にマイトレーヤは、8万歳の時に赴き、シャーキヤムニは百歳の時に赴くのか。曰く。誓願が異なる2つも五濁の時に赴くものと同じように、先に三乗を方便のみと説いてから後に真実が説かれている。変化身についても同じである。もしも報身と変化身において二乗を教化することがなければ、確実に濁ではない時に赴いてから二乗を教化するので、確実に濁の時に赴く。「濁」とは、滅劫から入って、五濁が徐々に生じるので、それを「濁」と言う。マイトレーヤ仏が赴く八万歳から徐々に減少するので、それも「濁世」と言うが、10年か20年を超えない小劫が生じることを「濁」と言うのではない。それ故に劫が減する時に仏が世間に赴き、劫が生じる時に転輪王が生じる。そのように劫が減する時に仏が赴き、劫が生じる時に転輪王が生じるならば、何故に「貝王」と言う仏がマイトレーヤと同時に生じるのか。もし出家しているならば、「転輪王になり、灯明仏の8子は皆四洲を支配するようになる」と説かれている。答えをなすと、「貝王」と言うものが、劫が生じる時に生じることが真実ならば、遠いので、寿命が長いことによりマイトレーヤと会うだけであり、マイトレーヤ仏は劫が減しない時に赴くのではない。「仏が出家してから転輪王になる」と説いたのも確実に授記するのではない。灯明仏の8子も前と同じで、報身なのでそれと同じ過失がないことに確定する。金輪を転じる王は劫が上に生じる時に世間に必ず生じるが、銀と銅と鉄の転輪王が生じる時は確定しておらず、それ故にアショーカ法王は、仏の涅槃から百年経った後に生じるのである。⁽⁵⁴⁾

『妙法蓮華註』第4巻。

[66] 経に、「シャーリプトラよ、この如くである」と言うものから「三乗を解説したそれが説かれる」と言うまでには、仏が五濁の時に何故に生じたのか⁽⁵⁵⁾

が説かれているので、このように劫と争いの濁と、多くの垢と、貪欲な衆生に善根が少ないことに対して世尊は善巧方便を3種と説いている。飢饉の劫と兵器の劫と病気の劫が生じる時は、衆生が争う濁で、「垢が多い」と言われる。垢は、濁や不浄の意味が多いことで、破壊し難い意味である。垢に6種あり、害と、恨と、悩と、諂と、誑と、憍との6つである。それは何か。衆生を害することを喜ぶことが「害」と言われる。怒りの力により心に執着することが「恨」と言われる。罪過が縁となって悲嘆することが「悩」と言われ、この3つは、瞋の自性である。自分の罪過を隠し、他者の過失を考察し、他者の意と合わせて、偽ることが「諂」と言われる。尊敬のために功德を欺いて示すことが「誑」と言われ、この2つは貪と癡の自性である。増やして満たすことに執着することが「憍」と言われ、貪の自性である。衆生たちは6つの垢が多いので沙門を知らず、善法を行じないことが衆生の濁である。慳と貪と嫉妬が煩惱の濁である。法と財産の所有を捨てることをためらうことが「慳」と言われる。得ていない財産を得ようとする方便と結合して執着し、望むことが「貪」と言われる。「小善根」とは、貪欲と瞋恚と痴の不善根である。その如くならば、衆生は善が少ないので、天と人が減り、悪趣が増えて生じる。衆生たちは大乘を頓に確立し難いので諸仏は善巧方便によりその仏の一乗から三乗に降りて説かれたのである。⁽⁵⁶⁾

[67] 経に、「シャーリプトラよ、そのように」と言うものから「仏でもない⁽⁵⁷⁾と知るべきである」と言うまでには、「如来は増上慢のために説いてはいない」と言うことが疑惑になっており、それら有情が増上慢のためではないことをどのように知るのか、と云えば、それに3種ある。真実ではない二乗の聖者の特徴を説いたものと、増上慢に関する特徴を説いたものと、真実の聖なるものをまとめた特徴である。ここでは真実ではないものが説かれており、声聞と独覺の聖者で真実を寂滅することに入る者は、仏と会っても、ほとんど大乘の法には会わない。種姓が確定せずに発心し、聞いた直後に聞き、入り、理解するよ

うになる者が真実の聖者である。そのように知らない者は、仏の近くにおらず、
真実の聖者ではないと知るべきである。⁽⁵⁸⁾

[68] 経に、「このようにシャーリプトラ」と言うものから「増上慢と知るべきである」と言うまでには、増上慢⁽⁵⁹⁾に関する特徴が説かれており、下品は四禪を得て、3つの結果の煩悩を尽くさず、阿羅漢の結果である内なる蘊の最後の涅槃を得ている⁽⁶⁰⁾と思ひ、仏を望まないことが「増上慢」と言われる。

[69] 経に、「それは何故に」と言うものから「あるのではない」と言うまでには、真実の聖者のまとめた特徴が説かれており、真実の聖なるものに会う者が寂靜に入るならば、ほとんど法に会う。彼らは修行できなくても、信と信解をなす。種姓が確定していない者は聞いてからも入り、修行する。それ故に、如来に明らかに会い、「この法を聞いてから信じない場合は、そこにいることはない」と言われる。⁽⁶²⁾

[70] 経に、「如来の涅槃は別である」とは、この場合、⁽⁶³⁾「どのように法の器になるのか」と言う疑惑が説かれている。ある者は、仏から法を聞いてから誹謗の心を起こす。何故ならば、如来がある者に対して「仏にならないし、法の器にならない」と説いたことへの疑惑が生じて、「そのように器にならない衆生に法を説いていないのならば、一切種智と言うのは適切なのか」と言う疑惑を取り除くために、「如来の涅槃は別である」と言われる。⁽⁶⁴⁾

[71] 経に、「それは何故に」と言うものから「生じない」と言うまでには、⁽⁶⁵⁾「涅槃の後に巧みではない方便で寂靜に入る者はこの法と会っても、このような經典の受持や解説は生じない」と説かれている。⁽⁶⁶⁾

[72] 経に、「シャーリプトラ」と言うものから「疑惑はないであろう」と言うまでには、⁽⁶⁷⁾「法と会った者が、私の涅槃後にも他の仏と会うことが善巧方便により説かれているならば、この法に疑惑はなくなる」と述べられている。⁽⁶⁸⁾

[73] 経に、「シャーリプトラ」と言うものから「仏乗である」と言うまでには、⁽⁶⁹⁾「先に三乗を説いてから今度は一乗を説く」と言う疑惑を断って、「先に説い

たものと後に説くものと同じでなくても、虚妄とならないことを、私だけが知っており、あなたは知らないので、信じなさい。信解しなさい。あなたは、最初に発心することで理解しなさい。阿羅漢の発心から2万劫を過ぎれば、最初の3無数劫における行の信心と同じなので、あなたは、疑惑を起こさずに信解しなさい。私が説いたことに虚妄はない。一乗に尽きている」と述べられている。⁽⁷⁰⁾

[74] 経に、「それから世尊」と言うものから「優婆夷たちを信じる」と言うまでには、⁽⁷¹⁾これ以後の121偈を2つに分けて、118偈は長行を繰り返している。3偈は後の教義と結びつけられる。前者についても2種に分けられ、115偈により先に2種の授記を示している。3偈により4つの疑惑を取り除くことが説かれ、前者にも2種ある。先の4偈により、授記してから悪い過失をもつ者が退くことが説かれている。111偈により授記が説かれている。前の4偈のうち、先に説かれた1偈により増上慢に関するものが説かれている。3偈により大きな不善根が説かれている。この偈により増上慢に関するものが説かれており、出家者が戒にとどまるならば、得ていないものを「得た」と言うことで増上慢をもつことになる。在家の優婆塞も「我」に執着することで我慢の心が生じ、増上慢の優婆夷は「我」と言う腹がなくても、「夫に従う我」と言うものが生じているので「増上慢」⁽⁷²⁾と述べられる。

[75] 経に、「5千人より少なかった」と言うものから「それらの核心となるものたちがとどまった」と言うまでには、⁽⁷³⁾3偈により大きな不善根が説かれており、小さな過失は、戒を損なってから罪過を隠すことである。損害とは、戒の一部分が損なわれることである。得ていないものを「得た」と言うことは、戒の根本がなく、そこには、戒もなく、清浄でもなく、三昧も明らかにならない。「濁」とはどこにも目的はなく、愚かな心をもつ者たちは、仏の力により進んでも、もし妙法を聞けば、それを損滅することで罪過が生じるようになり、利益がないので退いている。⁽⁷⁴⁾

[76] 経に、「この同じことを私に聞きなさい。シャーリプトラよ」と言うも

のから「数百の多くの善巧方便」と言うまでの⁽⁷⁵⁾これ以後は、111偈により授記が述べられており、前に経において6種に区別したように、ここでも6種に区別され、6偈により何故に解説されるのかが説かれている。7偈半により場所が説かれている。1偈半により所有が説かれている。8偈半により⁽⁷⁶⁾何らかの意味に依ることが説かれている。71偈により法をまとめたものが説かれている。7偈により聞いていない者に聞かせることが説かれ、経と註釈に解説したものと先後は同じではない。6偈による何故に解説したのかも2種に分けられ、4偈半により何故になされるのかが説かれている。1偈半により根の通りに解説されることが説かれている。そのうち1偈により種々なる原因が説かれている。2偈により疑いのない言葉と原因と種々なる譬喩が説かれている。1偈半により種々なる法が説かれ、この偈により根の通りに種々なる原因が説かれている。⁽⁷⁷⁾

[77] 経に、「その想と行が何に似ているのかを知り」と言うものから「何れから一切の衆生は喜ぶ」と言うまでには、⁽⁷⁸⁾疑いのない言葉と原因と種々なる譬喩が説かれている。理解するとは、菩提を理解することである。種々なる信は、「信解の最高」と言う意味である。想と行は、善と不善の業である。そのように種々なる想と分析と信を知ることで疑いのない言葉と原因と多くの譬喩が説かれているのですべてが喜ぶことになる。⁽⁷⁹⁾

[78] 経に、「そのように経」と言うものから「論議もそのように解説される」と言うまでには、⁽⁸⁰⁾ここで12部経が説かれており、それにも3種ある。特徴を説いたものと、名称を説いたものと、殊勝を説いたものである。「契経」の特徴にも2種あり、一般的特徴と個別の特徴とである。そのうち一般的特徴は、「この言葉を私は聞いた」から「明らかに喜ぶ」と言うまでには、述べられたそれらの語義はすべて「一般的特徴」と言われる。⁽⁸¹⁾註釈に、經典のその偈頌を説いたものとは別に長行から語義を述べており、述べられたものは、「個別の特徴」と言われる。「重頌」にも2種あり、後に来る者に有益なことと、長行から未了義なもの⁽⁸²⁾を了義と説くことである。注釈より、ある經典は前後が同じでなく、長

行から説いた後にその偈頌を繰り返すことが後に来る者に有益である。長行で未了義なものをその偈頌を繰り返すことで意味が明らかになるので「未了義を了義と説く」と言われる。「授記」に3種あり、弟子の生死の原因と結果の授記と、了義を明らかにする授記と、菩薩への成仏の授記との3つである。聖者の弟子たちに、「あなたは過去時にこのような善と過失なした」と生じる場所の差別を授記したものが、生死の原因と結果の授記である。未了義の經典を了義と授記することが、了義を明らかにする授記である。「アジタよ、あなたは未来時にシャンカ王に」と言うその時に、「マイトレーヤと言う仏になるであろう」と言う授記が成仏の授記である。「偈頌」とは、經典において長行から述べて2、3、4、5、6偈などにより述べるべき意味を偈頌で説いたものが「偈頌の部」と言われる。「自説」とは、經典から請願されずに真実の法と、説法と、長くとどまることをなすために請願をする必要なしに説いたものが「自説部」と言われる。「因縁」にも3種あり、請願してから説いたものと、損なってから戒を持つことを説いたものと、導くことがあることで法を説いたものと3つである。注釈より、導入から説いたものが、請願してから解説したものである。⁽⁸³⁾学処の偈をもつことである。經典から、他者により導かれ、例えば、一緒にいる際に、ある人がある鳥を捉まえてから再び放つことから導いて、世尊が過去の原因も導いてから説いたものが、「因縁」と言われる。「譬喩」は、經典から何種もの譬喩により法を説いたものである。「本事の部」とは、生じた世代が別の過去の人と法を原因により説いたものである。「本生の部」は、世尊が、過去時に某の者で生死を転移し菩薩行の難行をなし、經典において過去時に足が不自由な者と熊と兎と空を飛ぶ鳥などの姿をなして説かれたものが「本生」と言われる。「方広」も2種あり、菩薩の道を示すものと、広大で長時なものである。声聞にも方広があり、ここでは両者を「方広」と言う。「未曾有」とは、經典において仏と聖なる8人の弟子の功德の同じことと同じではないことの珍しい特徴を説いたものが、「未曾有」と言われている。さらにまた、經典に、仏が

生まれた直後に七歩ずつ歩き、大光明が十方を照らし、猿が蜜を献じ、白い犬が法を聞いたことなどで、珍しく希有な法が「未曾有」と説かれている。「論議」と言うものに2種あり、仏自身が説いたものと、聖なる弟子が説いたものとである。注釈に、諸經典の前後で論議することが「論議」と言われる。⁽⁸⁴⁾了義を説いた經典に対しても「論議」と言われる。そこで名称を説いたものは、12部經の名称が説かれている。そのうち、差別にも2種あり、自性の差別と、説かれた差別である。自性の差別は、重頌の中に偈頌はなく、偈頌の中に重頌はない。前後と、散文と誦は異なるから。經典に、最初の如是我聞から最後の隨行までを「契經」と言うので、12部もまとめられている。經は、長行だけで作られるので、重誦と偈誦とは別に7部のすべてに12部が完全にあると知るべきである。「説かれた差別」とは、大乘では円満であり、小乗では9の後はなく、この場合に小乗の信解では授記と自説と方広との3つが述べられず、これが、差別を説いたものである。⁽⁸⁵⁾

[79] 經に、「知らずに惡に執着している者」と言うものから「それから涅槃が近いことを説いている」と言うまでに、⁽⁸⁶⁾1偈半により根のとおり理解し難いことが説かれており、これに5つある。鈍根のものは理解し難く、小さなものを信解し、大により畏れ、輪廻に執着して出世間を信じず、福分があっても行じず、多くの苦により圧迫されている彼らに涅槃が近いことを説いている。鈍根の者は知らずに悪い輪廻に執着するので、諸仏と会っても、大乘の深い法を行じず、不善なる罪過を行じることで苦を領受するようになり、苦を脱するために二乗の涅槃が説かれている。⁽⁸⁷⁾

[80] 經に、「そのように自ら生じたものを方便としている」と言うものから「あなたがたは、仏にもなる」と言うまでの⁽⁸⁸⁾これ以後の7偈半によりとどめさせることが説かれており、そのうち1偈は一般を説いている。⁽⁸⁹⁾1偈は解説である。4偈はまとめである。1偈はとどまることの請願である。これは一般を説いており、2つを方便のみとして説いてから最後に仏の知恵は一乗に入ることと説

か⁽⁹⁰⁾れている。

[81] 經に、「何故か、と言え、護る時にとどまっている」と言うものから「正しくて疑いのないものが解説される」と言うまでには、こ⁽⁹¹⁾で一般を説いたものから把握され、「以前にあなたの根が熟していなかったので、大乘を理解せず、説かれる器となっていなかった。今は根が熟しているので時に至って、疑いのない意味を解説する」と説か⁽⁹²⁾れている。

[82] 經に、「私が説いたそれらの九部經も」と言うものから「明らかに入るために私が解説する」と言うまでには、これ以後の4偈半によりまとめが説か⁽⁹³⁾れている。それについても3つに分けられる。1偈により「小さな法は真実でなく、大は真実である」と説か⁽⁹⁴⁾れている。1偈により大きな法が真実であると説かれ、正しい人に解説することが説か⁽⁹⁴⁾れている。2偈により法と人が説かれており、これは、最初の発心の力を力のままに説いた9部の解説で、究竟ではないので「大に入る」と説か⁽⁹⁴⁾れている。

[83] 經に、「このように常に清浄となる」と言うものから「そこでとても広大な經典を解説する」と言うまでには、この場合に偉大な正法を正しい人に解説することが説かれており、まとめれば、菩薩の法を行じるすべての者が「仏子」と言われている。仏子も5つの功德をもっている。「5とは何か」と言え⁽⁹⁵⁾ば、心が清浄で大乘の仏の知恵のみを求めることと、柔和で確定した心で大乘を精進することと、鋭根で苦から出て楽を与えることと、無量で多くの仏に奉仕することと、甚深なる行で福德と知恵の資糧を保存することである。さらに菩提に発心して、この10法をとま⁽⁹⁶⁾え、ば、「菩提に発心する」と言われる。何かと言え⁽⁹⁶⁾ば、善友に奉仕することと、多くの仏になすべきことをなすことと、善根を行うことと、最高の法を求めることと、心が柔和で確定することと、苦に耐えることと、悲が大部分であることと、心を浄化することで平等になることと、大乘を信解することと、仏の知恵を求めることで10である。これらの功德をとま⁽⁹⁶⁾え、ば、「仏の子」と言われ、大乘を説くであろう。

[84] 經に、「このように彼らの心が円満で」と言うものから「広大な經典を明らかに解説する」と言うまでには、⁽⁹⁷⁾5 功德をもつ人は未來時に成仏するであろう。さらに、仏を念じる円満な心と清浄な戒をもつ。仏を念じることに2種あり、心により念ずることと言葉で述ることである。戒を持つことは円満な三学を授記することになる。「彼らは聞いてから歡喜するであろう」と言われる。⁽⁹⁸⁾

[85] 經に、「このように導くそれらの声聞から」と言うものから「すべてが悟ることに疑惑はない」と言うまでには、⁽⁹⁹⁾信を起こすことが請願されており、この法を聞いたり、所持すれば、大乘にとどまるであろうことが説かれている。⁽¹⁰⁰⁾

[86] 經に、「乗は1つで、2としてはない」と言うものから「種々なる乗が明らかに説かれている」と言うまでには、⁽¹⁰¹⁾この1偈半により不二が説かれており、不二は「獨覺の乗はない」と言う意味である。3としてないことは、声聞乗はなく、仏が方便として説いたものとは別に大乘から「2と3は存在しない」と説かれている。⁽¹⁰²⁾

[87] 經に、「仏の知恵が説かれているから」と言うものから「小乗により導かない仏の」と言うまでには、⁽¹⁰³⁾これ以後の18偈半によりいずれかの意味にとどまることが説かれており、そこで1偈半により一大事が説かれている。17偈により區別することと、説くことと、理解させることと、入れることが説かれている。仏が世間に生じたことは、一大事であるから、仏の乗は1つで、2として存在するものではない。⁽¹⁰⁴⁾

[88] 經に、「自ら生じた自身が1つにとどまり」と言うものから「彼らにも衆生をそれぞれ置く」と言うまでのこれ以後の17偈により區別することと、説くことと、理解させることと、入れることが説かれており、最初の1偈により區別することが説かれている。5偈により理解させることが説かれている。1偈により入れることが説かれている。10偈により説くことが説かれており、場所は所依の意味で、涅槃と菩提に樂にとどまることである。無量なる力と禪定により飾られ、福德と知恵の資糧となる一切の功德をこの二法の中に集めて、

その一切衆生を悟らせるので「区別する」と言われる。⁽¹⁰⁶⁾

[89] 経に、「物惜しみの罪過が私にあるようになる」と言うものから「衆生が1人でも、私には善ではない」と言うまでで、⁽¹⁰⁷⁾これ以後の5偈により理解させることが説かれており、それも3つに分けられる。1偈半により平等が説かれている。2偈半により 功德の殊勝が説かれている。1偈により理解させることが説かれており、「最高の菩提」と言うのは、無上の勝義の大乘である。仏の無上の平等な乗を得るならば、「それを私か、他者に」と区別することでどうして分けようか。内の知が平等でなければ、自分だけ大乘に入れ、外の知が平等でなければ、他者を小乗に入れるであろう。障碍を離れていなければ、無上の大乘をどうして合わせようか。それ故に、「物惜しみの罪過が私にあれば、善ではない」と述べられている。⁽¹⁰⁸⁾

[90] 経に、「私に物惜しみが僅かばかりもなく」と言うものから「すべての有情を知り、仏となる」と言うまでには、⁽¹⁰⁹⁾功德の殊勝が説かれており、そのうち、1偈半により、自分は貪欲が離れているので恐れがない功德が説かれている。次の1偈により外の莊嚴と眞実の法の功德が説かれている。「物惜しみが無い」とは、大乘を隠し、小乗を説き、衆生を欺いたり、先に大乘を布施してから後に布施しないことはないので物惜しみはない。衆生が大乘を知り、入ることで疑惑の心がないので妬みはない。煩惱の業をとまなう罪過の法と、苦の転生の法を完全に断じているので罪過の過失は何もない。眞実の知恵を完成してから十方に獅子の声を轟かし、怖れがないので、「すべての有情を知り、私は仏になる」と言われる。⁽¹¹⁰⁾

[91] 経に、「例えば、特徴により私が飾られている」と言うものから「法の自性のこの印を解説する」と言うまでには、⁽¹¹¹⁾外の特徴により飾られることが説かれている。善妙なる特徴で飾られた身体の光と知恵の光で器世間と衆生世間を明らかにしてからすべての有情が私に奉仕する。内に煩惱はないので、外の特徴により飾られており、この法の自性の印が解説されている。印は、二空の

大乘の印で、この印により特徴づけることが「大乘の眞実の法」と言われる。⁽¹¹²⁾

[92] 經に、「そのように私は思う。シャーリプトラよ」と言うものから「自ら輝き、自ら生じた世間を知る」と言うまでには、理解させることが説かれており、「眞実の大乘の知恵を、私が理解しているままに、一切衆生にも説いている」と言う意味である。⁽¹¹⁴⁾

[93] 經に、「見たように、思ったように」と言うものから「彼らの墓に再び生まれる」と言うまでで、1偈により入れることが説かれている。過去の誓願が成立してから誓願のままに菩提を確立する。菩提は、原因の意味である。初地から八地までに入って、不退転を得るので仏になる原因である。⁽¹¹⁶⁾これ以後の10偈により説くことを解説する。そのうち、最初の8偈により異なることが説かれている。後の2偈により後に同じものになることが説かれている。そのうち、知をもつ者はそのように保持するが、知らない者たちはそれに対して狂乱して損減させる。⁽¹¹⁷⁾これ以後の6偈により異なる特徴が説かれており、それにも2種ある。最初の1偈により善がないことに対する罪過をもつので異なることが説かれている。後の5偈により、罪過をもつ者に善はないので同じではないことが説かれている。「行を行じていない者は前世において」とは、出世間の善根を起こしておらず、僅かだけ起こしても、無漏の原因とならないが、五欲の功德の原因となるので、この5つに固執し執着し、痴の業をなすことで愛が生じ、生死の幹が再び生じるのである。⁽¹¹⁸⁾これ以後の5偈により、罪過をもつ者に善はないので同じではないことが説かれ、それも2種である。そのうち、前の4偈により罪過をもつので同じではないことが説かれている。後の1偈により、不善により同じではないことが説かれている。前のものにも2種あり、五欲の功德に固執し執着することで同じでなく、学処に酔い迷乱することで同じではなく、執着の力により不善業だけを行じるので「惡趣に落ちる」と言われる。業を圧迫する行は六趣における煩惱になる。4種の生において業をとまなうことで3、5、8苦により苦しめられるので「苛まれる」と言われる。再び生じ

ることは、輪廻の相續を断じていないことである。⁽¹¹⁹⁾

〔94〕 經に、「福德が小さいので苦により苛まれる」と言うものから「数千の生において」と言うまでには、これ以後の1偈半⁽¹²⁰⁾により学処を散乱させることで同じではないことが説かれ、最初の1偈半⁽¹²¹⁾により身見と辺見による62見となることが説かれている。後の1偈により見を自慢することと戒を自慢することの原因になることと、そうではない他のものも生じることが説かれている。衆生は無始より福德と知恵の資糧が少ないので苦により苛まれている。彼らも解脱の道を求めるけれども、真実と誤りとを考察せず、外道となれば邪見を学び、行を迷乱するので「邪見」と言われる。見には多くの種類があり、衆生が生じる道を中断させ、解脱することにならないことを「濃見」と言う。「有と無」とは、五見のうち4つは有見である。悪見は、無と見ることである。さらにまた、種々なる見が「有無」と言われる。さらにまた、有は、我の蘊が後に存在すると執着することで、常見である。無は、我の蘊が後に存在しないと執着することで、断見である。辺見と邪見から62見を2と取ることが「有無」と言われる。そのように、我執として62見などを把握し、執着して、捨てることができないで誤っていることを「増上慢」と言う。⁽¹²²⁾これ以後の1偈は、不善により同じではないことが説かれており、善をもつ者は4つの親近に仕えるべきである。善知識に依ることと、真実の法を聞くことと、理のままに作意することと、聞いたままに修行することである。欺く罪過をもつ童子は、多くの生涯において仏の特徴も聞かなければ、いかなる善知識と会おうか。そのように仏も見ず、法も聞かず、法を聞く福分がなく、作意し、修行することがどこに成立しようか。彼はとても教化し難いので最初から大乘を説くのは難しい。⁽¹²³⁾

〔95〕 經に、「私の方便により、彼に、シャーリプトラよ」と言うものから「彼らは涅槃が近いと説く」と言うまでには、同じでないことをまとめたものが説かれており、自分が前に方便の涅槃を苦の寂滅のみと説いたのである。⁽¹²⁴⁾⁽¹²⁵⁾

〔96〕 經に、「このように常に私が解説した涅槃」と言うものから「この乗は

1つで、2としてはない」と言うまでの⁽¹²⁶⁾これ以後の70偈半により法にとどまることが説かれており、それに3種ある。1偈半により十方の仏の法が説かれている。中間の38偈半により三時の仏の法が説かれている。最後の30偈半により「私もその如くである」と説かれている。これは十方の仏の法が説かれ、經に、「一乗で、2はない」と出ていれば、3はないとされ、1つにまとめることにどうしてなろうか。⁽¹²⁷⁾

[97] 經に、「過去の如来が生じた」と言うものから「それらの量は把握するものとしてあることはない」と言うまでには、⁽¹²⁸⁾これ以後の38偈半により三時の⁽¹²⁹⁾仏の法が説かれ、それにも3種ある。最初の27偈半により過去が説かれている。中の6偈により未来が説かれている。最後の4偈により現在が説かれており、過去を説いたものに2種あり、最初の4偈半により仏の法が説かれ、最初に導く方便だけを説いてから後に真実が説かれている。23偈により衆生らが法を聞いてから最後に一切智を得ることが説かれている。前のものにも4つあり、1偈により多くの仏が説かれている。1偈により方便だけが説かれている。1偈により真実を説いている。1偈半により何故に方便と真実を説いたのか⁽¹³⁰⁾が述べられている。

[98] 經に、「それらのすべての聖なる人の」と言うものから「数百の善巧方便により」⁽¹³¹⁾と言うまでには、方便だけを説いたことが述べられて⁽¹³²⁾いる。

[99] 經に、「それらすべては一乗と説かれている」と言うものから「多くの有情は不可思議なものを」⁽¹³³⁾と言うまでには、真実が説かれて⁽¹³⁴⁾いる。

[100] 經に、「勝者の他の方便は種々なので」と言うものから「如来は天を含む世間に」⁽¹³⁵⁾と言うまでには、何故に勝者は方便だけを説いたのかと真実を説いたことが述べられており、多くの衆生が一時に一乗に入ることはできず、それ故に根と合わせて、先に方便で異なることが説かれ、後に一乗説いたのである。⁽¹³⁶⁾

[101] 經に、「それを目の当りにした衆生はそこで」と言うものから「彼らのすべては菩提を得るであろう」⁽¹³⁷⁾と言うまでには、これ以後の23偈により多くの

衆生が法を聞いてから最後に一切智を得ることが説かれ、それにも3種ある。最初の2偈により仏が現在いることが述べられている。20偈により過去仏が述べられている。1偈によりまとめが説かれている。これが最初で、仏と会ってから法を聞くことによる六波羅蜜と四摂事などが「福德は種々である」と述べられ、仏の原因になることを修習し、菩薩行を行ずることによってそれらすべてが菩提を得ることになる。⁽¹³⁸⁾

[102] 經に、「涅槃したそれらの勝者の」と言うものから「彼らすべては菩提を得るであろう」と言うまでには、これ以後の20偈により仏の涅槃が説かれており、それに5種ある。1偈により慈愛が説かれている。⁽¹³⁹⁾ 4偈半により塔を造ることが説かれている。⁽¹⁴⁰⁾ 6偈半により像を造ることが説かれている。7偈により供養をなすことが説かれている。1偈により仏が述べたものが説かれている。これは最初で、善も寂靜を調伏することがなく、寂靜を調伏しても善がなければ「菩提心」とは言わず、善があり、寂靜を調伏することが「菩提心である」と言われ、理のままに利他をなし、寂靜を調伏すれば、彼らは菩提を得るであろう。これも、仏の涅槃後の教化し難い者たちの行であるが、仏がいる時のこの行により原因を作るのではない。六波羅蜜も仏の涅槃後の共通な行であり、彼らも菩提を得るであろう。⁽¹⁴²⁾

[103] 經に、「舍利に供養をなす者は」と言うものから「彼らも菩提を得るであろう」と言うまでには、これ以後の4偈半により塔を作ることで菩提を得ることが説かれており、それにも2つ。最初の4偈により塔を作ることが説かれている。後の半偈によりまとめが説かれている。最初の偈に3種あり、初めの2偈により多くの塔を宝珠で飾ることが説かれている。1偈により相から塔を造ることが説かれている。1偈により遊戲のために砂から塔を作ることが説かれており、何であっても塔を作れば梵王の福德と同じである。梵の福德は四洲と六欲界との天の福德と同じで、塔を造ってから菩提を得るであろう。⁽¹⁴⁴⁾

[104] 經に、「ある者は塔を石の心髓から造る」と言うものから「勝者の塔を

喜びながら造り」と言うまでの⁽¹⁴⁵⁾1偈により9相で塔を造ることが説かれている。⁽¹⁴⁶⁾

[105] 経に、「それ故に微塵の集まりからも」と言うものから「彼らも菩提を得るであろう」と言うまでの⁽¹⁴⁷⁾1偈により、「娯楽のために小さな価値のもので塔を造っても菩提になる」と説かれており、砂から集めて勝者の塔を造れば、菩提を得るであろうということは、菩提に発心し、菩薩の行を行じ、何らかの善根をなしても、菩提を得る行為をなす下品の声聞や菩提に心を起こさない不定種姓は得ることはない。その在り方で、「小さなものから手を合わせて敬礼しただけでも菩提を得るであろう」と述べたものもそのように合わせられる。⁽¹⁴⁸⁾

[106] 経に、「ある者はそのように宝石で像を造る」と言うものから「彼らはすべて菩提を得るであろう」と言うまでの⁽¹⁴⁹⁾6偈により造像が説かれ、それにも2種ある。5偈により造像が説かれ、1偈半によりまとめが説かれている。造像も、設置することと絵を描くことなどである。⁽¹⁵⁰⁾

[107] 経に、「ある者は、それは七宝と」と言うものから「それらのすべてが菩提を得るであろう」と言うまでの⁽¹⁵¹⁾2偈により宝珠などで色身が飾られることが説かれている。⁽¹⁵²⁾

[108] 経に、「ある者は石窟の側面に像を描いて」と言うものから「彼らはすべて菩提を得るであろう」と言うまでの⁽¹⁵³⁾この偈により像を絵で描くことが説かれている。⁽¹⁵⁴⁾

[109] 経に、「ある者は、それは学ぶ時にも適切である」と言うものから「彼らはすべて菩提を得る」と言うまでの⁽¹⁵⁵⁾この偈により遊戯から像を描くことが説かれている。⁽¹⁵⁶⁾

[110] 経に、「それらのすべてが悲心をもつようになるであろう」と言うものから「多くの菩薩が明らかに入る」と言うまでの⁽¹⁵⁷⁾この偈によりまとめが説かれており、何れかの大悲の心をもつ者は、いかなる善をなしても悲心をもつことで彼岸に至り、菩提を得るであろう。⁽¹⁵⁸⁾

[111] 経に、「如来の舎利と」と言うものから「それに花と香を供えて」と言

うまでには、これ以後の7偈で供養をなすことが説かれており、そのうち5偈半により供養をなすべきことが説かれている。1偈半によりまとめが説かれている。そのうち、1偈により4物による供養が説かれ、1偈により音楽による供養が説かれ、1偈により歌頌による供養が説かれ、1偈により身業により供養することが説かれている。花による供養で菩提の七支の花を得る。⁽¹⁶⁰⁾香を施すことで法身の言葉を得る。幡を施すことで陀羅尼を得て、罪過から退くであろう。天蓋を施すことで四無量により衆生を覆うであろう。⁽¹⁶¹⁾

[112] 経に、「そこである者は繞を打つことに入る」と言うものから「水を打ち、掌を打って」と言うまでには、音楽による供養が説かれており、経に「音楽と他者の美しい少女の心を奪うことで布施をなすべきではない」と出ており、仏に供養すれば矛盾はない。⁽¹⁶³⁾

[113] 経に、「その善逝に供養をするので」と言うものから「その舍利に多くの相で供養をする」と言うまでには、この偈により歌と歌曲により供養をなすことが説かれ、梵の歌を得るであろう。⁽¹⁶⁵⁾

[114] 経に、「善逝が舍利に僅かでも」と言うものから「彼らは次第に数千万の仏を見る」と言うまでには、花の供養をなすことが説かれ、先に4物を供養してから花の供養と何が異なるのか、と言えば、これは争うままの心により供養をなすことである。⁽¹⁶⁷⁾

[115] 経に、「その塔に誰かが掌を合わせ」と言うものから「そのように1度身体を傾け」と言うまでのこの偈により身業の供養がなされ、歌曲と歌による供養は口業である。そのように供養することを思うことが意業である。これ以外は、「外の財物の供養」と言われる。⁽¹⁶⁹⁾

[116] 経に、「敬礼を仏に1度述べ」と言うものから「彼らはすべて菩提を得るであろう」と言うまでで、この偈により仏の名前を述べることで菩提を得ることが説かれており、仏の名前を1度述べることで最高の菩提を得るのならば、何度も述べる必要があろうか。⁽¹⁷¹⁾

[117] 経に、「その時にそれらの善逝は」と言うものから「彼らはすべて菩提を得るであろう」と言うまでのこの偈は、衆生が法を聞いてから一切種智を得ることが説かれている。⁽¹⁷²⁾⁽¹⁷³⁾

[118] 経に、「後に生じる数千万の仏たち」と言うものから「この方便も解説するであろう」と言うまで、これ以後の6偈半により 未来の法が説かれ、そのうち3偈半により「現在の解説と同じである」と説かれている。3偈により前の意味を繰り返して説かれている。前者にも3つあり、⁽¹⁷⁴⁾1偈により方便のみが同じと説かれ、1偈半により真実が説かれている。1偈により何故に解説されたのか説かれている。⁽¹⁷⁵⁾⁽¹⁷⁶⁾

[119] 経に、「善巧方便は無限である」と言うものから「この法を聞いてから仏にならない」と言うまでのこの偈は、真実を成就するようになることが説かれており、そのように法を聞いたすべての者が仏にならないことはない。⁽¹⁷⁷⁾⁽¹⁷⁸⁾

[120] 経に、「如来たちの誓願は」と言うものから「菩提のために行じてから行に入る」と言うまでのこの偈により何故に解説したのか説かれ、それも「以前の誓願の力である」と説かれている。⁽¹⁷⁹⁾⁽¹⁸⁰⁾

[121] 経に「数千億の法門」と言うものから「如來自身が法を解説する」と言うまでのこれ以後の3偈により前の意味が繰り返して説かれている。そのうち、1偈により前に方便のみを説いても一乗に尽きることが、2偈により三性の起源が説かれている。⁽¹⁸¹⁾⁽¹⁸²⁾

[122] 経に、「このように常に法の在り方にとどまる」と言うものから「善巧方便を示すであろう」と言うまでのこの偈は、三性の起源が説かれている。一乗は、円成就性をなし、前に解説した如くである。法の住性は一切法に真実としてあるので法の住性である。法に煩惱と清浄があり、煩惱を捨ててから相を得ることが、法の不変性である。真実の特徴は常に存在するので動かずに存在することである。心髄である菩提に入り、一切法を善巧方便により説いている。一切法に2種あり、空たるものと有たるものである。空に差別はないので特徴

は1つで、「遍計所執」と言われる。有に差別があり、2種である。常と無常で、常は円成実性である。無常は、依他起性である。それにも2種あり、有漏と無漏である。有漏は、依他起性である。無漏は、円成実性で、それ故に円成実性に関して、それを「一乗」と言う。一乗により真実を知る所以法性の住性と法の不変性で、そこを動かずにとどまってから衆生に対して善巧方便により法を示すのである。⁽¹⁸⁴⁾

[123] 経に、「天人のすべての供養を十方に」と言うものから「彼らもこの最高の乗を説く」と言うまでの⁽¹⁸⁵⁾これ以後の4偈半により現在の意味が説かれている。⁽¹⁸⁶⁾

[124] 経に、「善巧方便により説き」と言うものから「信じるこの寂靜の地を知ってからである」と言うまでの⁽¹⁸⁷⁾この偈は、先に方便のみが説かれ、後に真実が説かれている。⁽¹⁸⁸⁾

[125] 経に、「一切の有身の行を知り」と言うものから「種々なるものを明らかに成就させることが説かれている」と言うまでの⁽¹⁸⁹⁾この偈は、何故に前に方便だけが説かれ、後に真実が説かれたのかを示しており、一切の有身の行は、心の行の特徴である。何を思ったのかは、遍行の特徴である。力は業の力である。「威力」とも言われ、衆生の種々なる根を知る力である。精進は処と非処の力である。そのように衆生の信を知ってから譬喩と根本の多くの相が衆生の根のままに種々であることを明らかに示し、至っていない諸仏も三性を知るようになる。現在おられるものも衆生の根を知る所以先に方便だけを説いてから後に真実を説くのである。⁽¹⁹⁰⁾

[126] 経に、「導く力の勝者である私もここで」と言うものから「それは私の自証の知力である」と言うまでの⁽¹⁹¹⁾これ以後の30偈により「私もその如くである」と説かれており、そのうち2偈により実際に把握して説かれている。28偈により⁽¹⁹²⁾詳細に説かれている。

[127] 経に、「私が見る貧しい衆生たち」と言うものから「欲望によりこれら

は常に縛られている」と言うまでのこの偈により詳細に説かれており、最初の20偈半により先に三乗が方便のみと説かれ、長行に「衆生の種々なる信解を知る」と説かれている。7偈により現在真実として説いたことが述べられ、先に仏の一乗である一切種智を得るべきなので説かれている。前にも4種あり、3偈半により生じる場所を妨げてから解脱すべきことが説かれている。3偈により解脱することができない心が説かれている。11偈半により方便だけを説いたことが意図されている。3偈半により三乗の変化が説かれている。前者にも2つあり、1偈で善がないことが説かれている。2偈半により罪過が存在することが説かれている。「私が見る」とは、5眼のうち仏眼で見ることである。智慧と福德を捨てることは、六趣の衆生が無始より福德と知恵の原因となることをなさずに、聖者の七宝をもたずに天と人の法の七宝と六波羅蜜と善巧方便がないことは、智慧と福德が捨てらるることである⁽¹⁹⁴⁾。これ以後2偈半により罪過があると説かれており、そのうち1偈半により現在時に輪廻に沈み、苦が生じることが説かれている。1偈により解脱を望んでも邪見を行ずることが説かれている。世間において牛の尾に執着するように、衆生たちも五欲に執着してから苦により苦しみ、悪趣に落ちるであろう⁽¹⁹⁵⁾。

[128] 経に、「仏の大力も完全に求めず」と言うものから「私のそれらの悲の大力を」と言うまでのこの偈は、解脱を求めて邪見を行ずることが説かれており、仏の大力と知恵により苦を断つことは外道の見解と同じで悪見に落ち、身苦をなしてから輪廻の苦からの解脱を求めることは適当ではない。6年の間1粒の穀物を食べなくても、菩提を得なければ、茨の上に臥すことで菩提をどこで得ようか。犬が石を追うことと同じであるが、獅子のように追うのではない⁽¹⁹⁷⁾。これ以後の3偈により解脱できない心が説かれており、それにも3つある。半偈により過去の行の原因である心が説かれており、1偈により結果を得た後の心が説かれている。1偈半により能力のない心が説かれている。これは最初で、衆生たちがこの2つの原因をもつので「私のそれらの悲の大力を」と説かれて

⁽¹⁹⁸⁾
いる。

[129] 経に、「彼らは、私が思うその菩提座で」と言うものから「その前でお互いに歩き、とどまっている」と言うまでのこの偈により結果を得てから意図することが説かれており、明らかに悟ってから樹王の前で互いに歩き、衆生利益をどのようになすべきかが意図されている。さらにまた、幹を考察することで、対象を心に設定することが説かれている。歩くとは、衆生利益をなすことである。幹を考察することは、4種の生を護ることを意図している。歩くとは、⁽²⁰⁰⁾福德と知恵の布施を意図している。

[130] 経に、「この知恵は、正しく、希有なもので、これらの衆生は知らず、無知で盲である」とは、⁽²⁰¹⁾解脱させるのに適していないことを意図している。4種の原因があるから。甚深なる法により知り難く、鈍根により知り難く、欲に執着することで捨てることができず、無知による盲で解脱に適さない、と思うことを意図している。⁽²⁰²⁾

[131] 経に、「その時に私に請願した梵天と」と言うものから「すべてが合掌してから尊敬し、立っている」と言うまでのこれ以後の11偈半により方便のみとして説くことを意図したことが説かれており、それにも4種ある。最初の2偈により諸天の法の解説を請願することが説かれている。3偈により意趣が説かれている。4偈半により福分をとまなうことが説かれている。2偈により方便のみにより説いたことが説かれている。これは、梵天などが請願してから三乗の法が説かれ、法性による請願がなされずに法を説くのではない。⁽²⁰⁴⁾

[132] 経に、「捨てることをどのようになすべきかを考える」と言うものから「私は今静かに涅槃すべきである」と言うまでのこれ以後の3偈により意趣が説かれており、ここにも2種がある。2偈により大乘の衆生を損なうことが説かれている。1偈により三乗の衆生に対して有益になることが説かれており、これらの衆生は苦により目の当りに苛まれるので、出家しても非法の苦を行ずるので、彼らに一時に大乘の法を説くならば、信解せず、童子の心をもつ者たち

は誹謗により悪趣に落ちるようになる。在家の者たちは、苦により苛まれるので信解することはない。他の出家者たちは法の解説により信解せず、それ故に「法を解説せずに速やかに涅槃も容易である」と思うことを意図している⁽²⁰⁶⁾。

[133] 経に、「明らかならば歓喜する過去仏と」と言うものから「3種に分けて明らかに解説する」と言うまでには、三乗による衆生利益である。諸仏と同じであるから⁽²⁰⁸⁾。

[134] 経に、「私は、その意味をそのように思う」と言うものから「世間の導師に続いて獲得する」と言うまでのこれ以後の4偈半により福分をもつ者を教化するであろうことが説かれており、1偈半により現在の仏の賞讃が説かれている。半偈により諸仏と同じことが説かれている。2偈半により「後半は真実であるが、前半は方便のみとして説いている」ということが自在に説かれている⁽²¹⁰⁾。

[135] 経に、「私も正しい場所を知るその時に3種に分けて解説する」とは、自分に関することが説かれており、「方便のみとして三乗を解説した」と言う意味である⁽²¹²⁾。

[136] 経に、「巧みでない小さな信の人」と言うものから「多くの菩薩が入るべきである」と言うまでには、童子の心をもつ小さな信の者たちは小さなものを信解することで成仏すると言う大義を信解しないので先に三乗を方便のみとして説き、菩薩を入れるのである⁽²¹⁴⁾。

[137] 経に、「その声を聞くことが喜びになる」と言うものから「最高の大仙の疑いのない言葉」と言うまでの2偈により方便のみで導くことが説かれ、声を聞いて歓喜することによる賞讃とそれに続く行を意図することが説かれている⁽²¹⁶⁾。

[138] 経に、「私もそのように普く行じることとは」と言うものから「衆生の濁世に生まれる」と言うまでには、続く行が説かれることを意図して、福分をもつ者に対して濁世の中に生まれてもそれに続く行が意図されている⁽²¹⁸⁾。

[139] 経に、「そのように私は」と言うことから「シャーリプトラよ」と言うものから「方便により寂靜の法を解説する」と言うまでのこれ以後の3偈半により三乗の変化を真実と説いており、それにも3種ある。1偈半により方便のみが説かれている。1偈により三宝の生起が説かれている。1偈により現在と過去の成就が説かれている。ヴァーラーナシーは、鹿野苑の無畏施の住所である。その場所で最初に5人の所依に法が説かれ、方便による寂靜の法が説かれている。⁽²²⁰⁾

[140] 経に、「それから私は法輪を廻す」と言うものから「そこでサンガの声もそのように生じる」と言うまでには、三宝の生起が説かれており、法輪を廻すことは、3度12の在り方で廻すことである。「輪」とは、廻してとどまらない意味である。八聖道と適切なものと合わせられる。聖道を説いたことで彼岸の結果を得るので「廻す」と言われる。そのように聖道が世間に生じることで三宝の声も世間に生じている。仏自身が仏宝で、涅槃と結果と説法が法宝である。5人の所依などが僧宝である。⁽²²²⁾

[141] 経に、「年の数が少ないことも解説される」と言うものから「そのように常に三時において私は説く」と言うまでに、⁽²²⁴⁾現在と過去も成就することが説かれている。この現在時にのみ涅槃を説くのではなく、年の数は少なくなく、⁽²²⁵⁾苦が最後に尽きるまで解説し、説いている。

[142] 経に、「私はその時に、シャーリプトラよ」と言うものから「善巧方便は多種である」と言うまでのこれ以後の7偈により「この法の解説で一切智を得る」と説かれており、これにも4種ある。最初の2偈により根が熟した者が会うことが説かれている。1偈により意味をなすことを意図することが説かれている。3偈により真実を解説することが説かれている。1偈により法の意味が説かれている。自分が方便だけを説いても、以前の勝者たちから方便だけを説いたことを聞いたので善根をもち、自分と会ってから法を解説することを意図することが説かれている。⁽²²⁷⁾

[143] 経に、「その直後に私はこのように考える」と言うものから「その最高の菩提をここで解説する」と言うまでに、意味をなすことを意図することが説かれており、根が熟した者に仏智を解説し、最高の菩提を何故に意図すべきではないのか、と思うことを意図して、時に至ったことが説かれている。⁽²²⁸⁾⁽²²⁹⁾

[144] 経に、「それは遠く、ここでは信じ難ことが」と言うものから「巧みでなく我慢をもっている」と言うまでのこれ以後の3偈により真実を解説することが説かれている。そのうち、1偈により巧みでない童子の心をもつ者は把握できないことが説かれている。2偈により鋭根の者は知恵をもつので把握できることが説かれている。法を保持できない過失は5種で、鈍根が法を聞いても意味を理解できないことと、童子の心を持つものの知識が少ないことと、相に対する想が空と有の2相に執着していることと、増上慢の享受により慢心することと、傲慢を知らない者が煩惱をもつこととである。⁽²³⁰⁾⁽²³¹⁾

[145] 経に、「そこで私も恐れなく歓喜して」と言うものから「これらのすべてが世間で仏になる」というまでに、把握できることが説かれており、歓喜は無量の歓喜により衆生の成仏を嫉妬することはないことである。無畏とは、疑いのない意味を獅子の声で呼ぶことに疑いがなくすることである。すべての相を捨てることは、方便のみを3つに説いている。地に至らない菩薩は、自分は菩薩を得ることを把握し、声聞に福分はないことを把握し、不定種姓の者は自分も福分はないと思うことで小さなものを退けて自分のためにこの法を説くことで疑惑を離れることが説かれている。120の声聞も成仏しないと考えるので彼らのためにも法が説かれている。⁽²³²⁾⁽²³³⁾

[146] 経に、「このように過去のそれらの守護者たちと」と言うものから「そのようにあなたにはそれが遠いことを私は解説する」と言うまでには、法をまとめたものが説かれており、大乘の勝義とは、本質の考察を捨てることで、「三乗に区別はないのですべてが成仏するであろう」と説かれている。⁽²³⁴⁾⁽²³⁵⁾

[147] 経に、「いつかどこか何れかの世間に」と言うものから「最高の法を聞

いてから信じる者である」と言うまでの⁽²³⁶⁾これ以後の7偈により聞いていないことを聞くべきことが説かれており、これにも4種ある。そのうち2偈により4つの難が説かれている。2偈半により困難の2種の譬喩が説かれている。1偈半により信を起こすことの請願が説かれている。1偈により意味をまとめたものが説かれている。4難について、仏が生じ難いことと、法を解説し難いことと、法を聞き難いことと、聞き難いことである。そのうち、仏が生じ難いことは、賢劫の千の仏が生じる如きである。そのように多くの劫により仏が生じ、カーシャパ仏の如きは7日後にいないので仏が生じることはそのように難しい。そのように、仏が生じ難いことは八難による劫で、仏に会い難いので法を聞き難い。法を聞かないので行もととても難しい。⁽²³⁷⁾

[148] 経に、「優曇華は得難いように」と言うものから「一切の仏を供養するようになる」と言うまでの⁽²³⁸⁾この偈は、2つの譬喩により獲得し難いことが説かれており、そのうち1偈により法が生じ難いことが説かれ、1偈半により聞いてから賞讃し難いことが説かれている。法が生じることと聞いてから賞讃することが⁽²³⁹⁾難しいことも、「優曇華に似ている」と説かれている。

[149] 経に、「このように疑惑と疑念を捨てる」と言うものから「ここで私は声聞は誰もいない」と言うまでには、⁽²⁴⁰⁾信を起こすことを請願して、疑惑を捨てなさい、と説かれて⁽²⁴¹⁾いる。

[150] 経に、「シャーリプトラよ、あなたは、これも秘密にきなさい」と言うものから「私のこれらの秘密を護持しなさい」と言うまでには、⁽²⁴²⁾諸仏の秘密を賞讃することが⁽²⁴³⁾説かれている。

[151] 経に、「どのようなのか、たとえば、五濁の時である」と言うものから「彼らも菩提心を起こさない」と言うまでの⁽²⁴⁴⁾これ以後はまとめて3偈により4つの疑惑を取り除くことが説かれ、それにも3種ある。始めの1偈により仏から世間に生じ、三乗により五濁の時に生じるであろうことが説かれている。1偈により「例えば我慢により阿羅漢である」と述べられ、この法を信解する法が

ないことが説かれている。1偈により、どのように示そうか、と考えることを説いている⁽²⁴⁵⁾。

[152] 経に、「私のこの一乗を聞く」と言うものから「経を損減する者は地獄に行く」と言うまでのこの偈は、⁽²⁴⁶⁾未来時に罪過をもつ衆生は我慢により地獄に行くことが説かれている⁽²⁴⁷⁾。

[153] 経に、「美しく清浄になる衆生たち」と言うものから「一乗による賞讃は限りない」と言うまでのこの偈により、⁽²⁴⁸⁾どのように説かれるようになるのか⁽²⁴⁹⁾が説かれており、羞恥は、慚と愧をともなう意味である。

[154] 経に、「導師たちによるそのような解説」と言うものから「仏となることにより⁽²⁵⁰⁾歡喜が生じる」と言うまでのこの3偈により、⁽²⁵¹⁾歡喜の心をもつ者は確實に成仏することが説かれており、1偈半により仏の法と異なり、学ばなければ理解できないことが説かれている。1偈半により歡喜の心を起こすことで成仏することが説かれている⁽²⁵²⁾。

〈注〉

- (1) 和訳箇所は、『丹珠爾(対勘本): 中華大藏經』第69卷, pp. 578-628に相応する。
- (2) 羅什訳では、「仏知見に入れる」と「仏知見の道に入れる」を1つにしている。荻谷定彦「四佛智見の本文想定」『印度学仏教学研究』12-1, 1964, pp. 170-173を参照。知見については、藤井教公「仏知見の解釈をめぐる」『印度学仏教学研究』31-2, 1983, pp. 818-821を参照。
- (3) 前稿と同じように、『法華經』の引用箇所に対して、梵(ケルン)、藏(中村瑞隆)、漢(鳩摩羅什訳、『大正新脩大藏經』)の該当箇所をあげておく。
[46] Skt. 39.3-5; Tib. 39.3-5; Chin. 7a12-14.
- (4) 709b16-21: 【53】 經 爾時佛告至當爲汝說 贊曰三快勒也風驚毘落霜殞貞存佛許說而驚其心振威神而令起去故以枝條退爲佳唱貞實住而許說輕薄虛疎故譬枝葉敦重堅固乃同貞實佳音古鮭反善好也脣音戸佳反南人謂鮭隔也
- (5) [47] Skt. 29.5-8; Tib. 39.5-9; Chin. 7a14-16.
漢文はこのセクションを2つに分けて(7a14-15, 15-16)注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている([46] = 【54・54】)。
- (6) 709b22-25: 【54】 經 舍利弗言至願樂欲聞 贊曰四敬諾也唯音弋誰弋水二反敬諾

之詞然音如延反順從稱願樂爲希解之意欲聞亦冀聽之心

709b26-c18: 【55】經 佛告舍利弗至時一現耳 贊曰此下明與授記爲之解釋也論云有六種一未聞令聞此等文是二者說舍利弗諸佛隨宜所說下是三者依何等義所以者何諸佛世尊唯以一大事下是四者令住舍利弗如來但以一佛乘故爲衆生說法下是五者依法舍利弗一切十方諸佛法亦如是下是六者遮舍利弗十方世界中尚無二乘下是未聞令聞者歎法希有顯令聞故說者明所說法意難知事依何等義者謂未聞令聞及方便所說依何等義謂依佛所得深難解法住者勸令來住一乘之中法者十方三世佛所共行儀軌法式初隨宜說意令久後取佛種智遮者遮破二執遮遣二眞令歎法希有未聞令聞有三一歎希二舉喻三勸信此即初二此若頻說無智不欣時乃說之愚智同樂梵云鄔曇鉢羅此云瑞應金輪王出大海減少金輪路現其華乃生應金輪之御世名瑞應華此法華經法輪王出生死海滅一乘道顯方演說之故舉爲喻歎法希有驚子住劫曾所未聞今者令聞令渴仰故

(7) [48] Skt. 39.8-10; Tib. 39.9-10; Chin. 7a16-17.

(8) 709c19-20: 【56】經 舍利至言不虛妄 贊曰此勸信也智解局者未能證達故標不虛勸其生信

(9) [49] Skt. 39.10-11; Tib. 39. 11; Chin. 7a17-18.

(10) 709c21-22: 【57】經 舍利弗至意趣難解 贊曰下第二段明說有二初標後釋此標也

(11) [50] Skt. 39.11-13; Tib. 39.11-14; Chin. 7a18-21.

(12) 709c23-710a1: 【58】經 所以者何至乃能知之 贊曰此釋也論釋種種因緣者謂三乘法彼三乘法唯名字章句說非有實義故以彼實義不可說故此中意說我以方便說三乘法此法唯有名字章句無別三體隨宜說三非二乘等思量能解唯佛能知此說前標智門難了三乘實義即是眞如不可說故下依何等即佛智慧

(13) [51] Skt. 39.13-40.1; Tib. 39.14-15; Chin. 7a21-22.

(14) 710a2-10: 【59】經 所以者何至出現於世 贊曰自下文第三依何等義有二初略標後廣解此初也因前文起故假徵顯有何所以言辭難解唯佛知也依何等義作如是說諸佛世尊者總苞十方三世諸佛唯以一大事者事物體事事義道理隨應皆得爲此大事因緣所以出現世間自稱德號廣利衆生不爾便如二乘入滅由此大事故隨宜說意趣難知

(15) [52] Skt. 40.1-8; Tib. 39.16-40.11; Chin. 7a22-28.

漢文はこのセクションを3つに分けて(7a22-23, 23-27, 27-28)注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている([52] = [60・61・62])。

(16) この「入らしめること」に対する解説を漢文に確認することはできない。中村瑞隆「西藏訳正法蓮華註と法華玄贊に見られる三草二木喩」坂本幸男編『法華經の中国的展開』平楽寺書店、1972, pp. 701-2を参照。

(17) 以上のアビダルマの解説を、漢文に確認することはできていない。

(18) 710a11-13: 【60】經 舍利弗至出現於世 贊曰下廣釋有二初別顯後釋意別顯有三一

微二釋三結此微也

710a14-712c15: **[61]** 經 諸佛世尊至出現於世 贊曰此釋大事體即知見諸佛出世爲此大事四義明之謂開示悟入論云後一大事者依四種義應知佛知見者如來能證如實知彼義故此有三釋一云法性眞如名爲如實法眞性故即是所證義理境界俱名爲義正智之體名爲能證能知義理證眞境故即此能證正智及所證眞如能所知見並名知見如爲知見之性智爲知見之用知見性相俱稱知見無著般若論云無上菩提是法身正等菩提是報身解深密經云菩提菩提斷俱名爲菩提智度論云說智及智處俱名爲般若故或知謂正體智見謂後得智是二是用能照眞俗二種境故此二本性即是眞如合名知見將性就相故名知見欲令二乘求種智故勝鬘云一乘即佛乘佛乘即大乘攝大乘云亦乘亦大故名大乘萬行是也或乘大性故名大乘眞如是也故知一乘佛果乘體通理及智契當宗義火宅牛車意在智用說牛車等我所作故險途寶所意在智性稱化作城非寶所故由此合二並名知見本論云何者爲四一開者無上義除一切智智更無餘事故一切智者佛也又言智者根本後得智此二是用此二智性即是眞如若用若性合名爲智一切智人之智名一切智智又一切智者根本智重言智者後得智舉此二智攝於智性眞如妙理又一切智者智用菩提又言智者智性涅槃二種如來藏今顯此二悉皆無上歎勝令欣然此菩提體是有爲本有種子多聞熏習因修生長體即四智楞伽經云阿梨耶識名空如來藏具足熏習無漏法故名不空如來藏藏識有漏虛妄不實故名爲空能含一切無漏種故名如來藏四智種子體是無漏非虛妄法由近善友多聞熏習漸次生長當成四智四智之因名不空如來藏藏是含藏因性義故猶如種樹生長圓滿其涅槃性體是無爲本來而有自性清淨後逢善友斷障所顯雖一眞如逢緣證別名四涅槃勝鬘經云有二種如來藏空智謂若離若脫若斷若異一切煩惱藏不離不脫不斷不異不思議如來藏煩惱有漏虛妄不實能覆眞如名空如來藏涅槃無漏體是無爲非虛妄法由近善緣斷諸煩惱漸次智起方便顯證名爲涅槃體性非空因空所顯空之性故煩惱覆位名不空如來藏藏是覆隱因性義故故在煩惱纏裹之位名如來藏出煩惱時名爲法身即此法身因空所顯空本性故亦名空如來藏如刀提耶掘寶顯得阿賴耶識及諸煩惱名如來藏者即涅槃云未得阿耨多羅三藐三菩提時善不善法皆名佛性無垢稱云僞身種姓七識住貪欲瞋恚愚癡十不善業道爲如來種等文非一故即前菩提名爲報身報身修生法身修顯法身證因證故報身生因生故前藏有四一能含藏藏謂阿賴耶識如庫藏等二能生德藏謂報身種子如穀種等三能覆藏藏謂煩惱等如土覆物四能顯德藏謂法身佛性如金性等大位而言所知障斷證佛報身菩提圓滿煩惱障斷證佛法身涅槃圓滿諸佛出世欲令衆生斷所知障及所發業并所得果一切俱盡圓證菩提開知見相使得清淨障盡智圓清淨故欲令衆生斷煩惱障及所發業并所得果一切俱盡圓證涅槃開知見性使得清淨障盡理顯名清淨故緣此知見故出世間開者出生顯證之義出生菩提證涅槃故除此二種更無餘事勝過二法故名無上二示者同義以聲聞辟支佛佛三乘法身平等法身平等者佛性法身無差別故涅槃經云譬如乳牛有種種色及搆其乳置之一處白色無異佛性亦爾衆生雖有種種不

同佛性無別此意説言三乘法身本來平等衆生不知不肯修證法身圓滿諸佛出世欲示衆生此佛知見之性三乘同有平等無二令同證滿以成法身三悟者不知義以一切聲聞辟支佛不知彼真實處故不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如下有人至親友家醉酒而臥以無價珠繫衣裏者彼初不覺後悟方知此意説言二乘不知究竟唯一佛乘體即菩提四智所以不修報身圓滿佛出世者欲令衆生悟於究竟唯此一乘佛菩提智令修生長上來三種開者雙顯法身報身涅槃菩提二種無上歎勝令欣示者別顯法身涅槃三乘無二本來而有令其修證悟者別顯報身菩提第一究竟本有種子令修果生俱明果中斷德智德既證此二利樂衆生應物現形應機說法即是化身及他受用名為恩德四入者爲令證得不退轉地示現與無量智業故上三總別雖顯佛果無上同勝未知如何可能證獲今顯能證能得之因故名爲入依此本論初地已上名不退地佛果位中一切智智體用大故名無量智業者因也佛出爲説初地已上能得佛果一切智因故名爲入佛説此因欲令二乘有學無學及初地前證初地上不退轉地入變易生修種智因觀察智性入佛二果此四意言佛出世者欲令衆生斷二障盡開佛菩提涅槃知見使證清淨歎二無上勸令欣故示法身同有令使證故悟所不知唯一佛乘智令修生故既顯佛果菩提涅槃殊勝體性并顯其因令其趣入謂佛出世意説一乘若果若因令諸衆生修因證果皆作佛故更不爲餘前歎智慧及智慧門即是一乘教之與理今説行果故知總説一乘四法名為法華或不退者八地以上行不退故諸論説受變易生故雖二乘迴心未即至彼地三乘俱同後決定得出分段死入變易生故作是説又二乘者煩惱不退經三大劫俱名不退地又一乘者修行一乘若信若位若證若行今於此中皆令入故並名不退或此果因一乘實體是前所説諸佛智慧其智慧門即前所説三乘權教令二乘者捨權取實行一乘因趣一乘果是此本意上來所説總別果因以解四種准下三世佛法之中不説初開唯説示悟入故知但應如此説善示悟別顯二果已周不假標故舉此二種攝佛一切有爲無爲萬德盡故此方便品法説一乘唯爲上根由此通辨若因若果菩提涅槃以爲一乘譬喻品中爲中根者但説於悟牛車菩提智德一乘由唯迷因智不迷因果理智故化城喻品爲下根者但説於示寶所涅槃斷德一乘由迷果理不迷果智因理智故各隨所宜斷除彼障令其進入偏説一乘或爲中下互説因果智理二門影顯令解唯此一品通明因果覺寂一乘理義周備故本論中具解此品餘品但總釋其大意不異此故若解此品便解一部矣然勘下文牛車在果即是菩提下文但明因中之智三乘乘此至道場故又理雖然諸經論中多説涅槃理性智慧以爲一乘一乘本故如無量義第二解云今此四義總依佛性法身智體以爲一乘涅槃經言大事者所謂佛性又畢竟有二一莊嚴畢竟二究竟畢竟莊嚴畢竟者謂六波羅蜜究竟畢竟者一切衆生所得一乘一乘者即是佛性以是義故我説一切衆生悉有佛性悉有一乘無明覆故不能得見故知佛性即是知見即是一乘説諸衆生悉有佛性名之爲開曲宣分別名之爲示此是法佛性此是報佛性此是因性此是緣性此是理性此是行性此是善根人性此是不善根人性此等名示故涅槃云如貧女舍內多有真金之藏家人大小無有知者時有異人善知方便乃至即於其家掘出真金之藏女人見已心生歡喜生奇特想宗仰是

人善男子衆生佛性亦復如是一切衆生不能得見如彼金藏貧女不知善男子我今普示一切衆生所有佛性善方便者即是如來貧女即是一切無量衆生眞金藏者即佛性也種種分別令其生解名之爲悟勸物起修令其入證名之爲入若依此解譬喻品中牛車各與吾爲汝造便非此義第三解云其前三種即依佛果大般涅槃三事解之涅槃經第二卷云我今當令一切衆生及以我子四部之衆悉皆安住祕密藏中我亦復當安住是中入於涅槃何等名爲祕密之藏猶如伊字三點若並則不成伊縱亦不成如摩鹽首羅面上三目乃得成伊三點若別亦不得成我亦如是解脫之法亦非涅槃如來之身亦非涅槃摩訶般若亦非涅槃三法各異亦非涅槃我今安住如是三法爲衆生故名入涅槃如世伊字此中意說梵本伊字上有二點下有一點似倒品字並者橫也謂前後證縱者豎也謂有三品世說縱橫即此豎並皆非伊字三點別安亦非伊字要三和合不縱不橫亦不離別和合三點不一不異如大自在天面上三目額上有一眉下各一佛入涅槃亦復如是摩訶般若若能證之智如來身者所證法身解脫者由能證智證所證理法身之時二障滅盡二死當來後有不續更無繫縛假名擇滅即是解脫故雜集云滅諦有三若能滅若所滅若滅性即是此三大般涅槃般若在上爲能證道如額上目法身解脫並在其下是所證故猶如眉下所有兩眼以智證理令後惑苦皆斷不生名入涅槃是佛安住祕密之藏不同二乘智了生空不是大慧理但生空無我之理不名法身雖得惑種及分段死少分不生之假擇滅不得習氣及智障滅分段變易二死俱盡之勝解脫如縱如橫非大涅槃身灰智滅彼名爲入無現身智何得稱大佛今不爾故名爲大稱爲祕藏古人有解但依眞如以爲三事名大涅槃便無入義常住不壞爲利有情以智證眞惑苦解脫方名爲入是佛意故不同二乘無有身智乃名爲入故佛自言假使烏角鴉乃至永入於涅槃等今作此解善順彼經審讀經文當自悉知摩訶般若即開佛知見故論說言除一切智智更無餘事一切智者證二空智重言智者證諸有智此最勝妙故名無上更無過故法身即是示佛知見故論說言三乘平等佛性法身無差別故解脫即是悟佛知見二障俱亡二死皆盡是眞解脫二乘唯得一障一死盡滅無餘不知於此故論說言二乘不知眞實處故令其悟也上來三事即是證入大般涅槃此必有因更說入義故論說入示現不退轉地與無量智業也佛出於世欲令三乘有情皆修不退地業安住祕密藏入大涅槃不爲餘也此與涅槃名字雖殊體性無別一切皆欲行因證入佛果位故若作此解既契化城之趣寶所亦合火宅之御牛車一乘體德既曰大般涅槃法報二身正覺之與圓寂一一總攝周備亦何理而不彈今此三解唯取所詮智慧名曰一乘能證之教門即次前說也隨宜所說意趣難解故又以蓮華喻於妙法必兼開敷之與秀出果秀因敷亦無乖爽然勝鬘等經及此文多說眞理以爲一乘乘之本故實通二種於義苞盡開示悟三明佛果乘入之一種明佛因乘因乘雖通三無數劫今此唯取第二劫後論說令證不退位故楞伽經中十地分爲三種意生身故如別章說又後品言聲聞緣覺不退菩薩乘此寶乘直至道場勝鬘經言無明爲緣無漏業因有阿羅漢辟支佛大力菩薩三種意生身生初地已前實居三界分段死中未出火宅猶在門中當爲燒故不與一乘之名或八地後名不退地瑜伽論說八地後爲意生身故得決定故問二乘無學羊鹿果位亦居

分段應在門中如小菩薩應非出宅答談其分段應非出宅餘依永滅已得涅槃名居門外不同於彼問何故二子趣於牛羊鹿稱出宅大子趣於牛菩薩未出宅答二乘惑種盡得滅稱出宅初劫惑猶行如何稱出宅又七地分段盡此一生亦名出宅二乘同故已前即非猶多生故如有學類故出宅已方上牛車然此經文初開之中初總標勝致使得清淨之言後三別顯故略不說

712c16: 【62】經 舍利弗至出現於世 贊曰。第三結也

(19) [53] Skt. 40.9-13; Tib.40.12-13; Chin. 7a29-b1.

(20) 712c17-716c10: 【63】經 佛告舍利弗至示悟衆生 贊曰此釋於前有何意況衆生身中悉有佛性故所教化但化菩薩所爲所作常爲此事唯以佛之知見示悟衆生論第二番釋示悟入云又示者爲諸菩薩有疑者令知如實修行故謂有菩薩疑無佛性不肯修行今示所化但化菩薩令知三乘同有佛性斷彼疑故如實修行又悟入者未發菩提心者令發心故此解悟義已發心者令入法故此解入義明因果盡又重釋悟入云悟者令外道衆生覺悟故復入者令得聲聞果入大菩提故迴邪入正捨權取實故一乘之義正是經宗今且略以五門分別一出體性二釋名字三明說意四彰差別五問答辨體性者略爲三類一總含體二隨勝體三真實體一總含體者一切無漏若種若現有爲無爲若因若果根本方便能成佛德皆名一乘一乘即大乘大乘即無上乘故勝鬘云一乘者即大乘也此本論云開是無上義辨中邊論無上乘品有三無上一正行無上謂十度隨修差別有六正行二所緣無上有十二種所緣三修證無上謂種姓修證等十種修證通攝一切菩薩所有境行果故勝鬘又云阿羅漢辟支佛有恐怖有歸依四智不究竟名向涅槃界又云正法住正法滅波羅提木叉毘尼出家受具足此六法爲大乘故說故知一切根本方便一切無漏若種若現有爲無爲若因若果能成佛德並名一乘三種意生身皆入初地故二隨勝體此有六類一攝事歸理體涅槃勝鬘等多以法身眞理佛性名爲一乘故勝鬘云一乘者即大乘大乘者即佛乘佛乘者即涅槃界又云於恒沙劫行六波羅蜜不如有人聽受讀誦乃至執持經卷何況有人爲他廣說以有爲行比無爲乘故涅槃經言一乘者即是佛性此滅化城至於寶所唯以眞如法身平等名爲一乘二攬餘歸智體亦以眞智名爲一乘上文自云方便知見皆已具足不退諸菩薩其數如恒沙一心共思求不能測佛智智體多是正體後得若在因位智劣識強在果位中智強識劣故三隱劣從勝體下經自云說佛智慧故諸佛出於世唯此一事實餘二即非眞是法住法位世間相常住於道場知已導師方便說分別功德品云有爲無上正等菩提於八十萬億那由他劫行五波羅蜜不如有人一念生信所得功德不可比喻由以佛果理智二種名爲一乘理凝本有離纏而號涅槃智照新生果圓而稱正覺乃四德之鴻源三妙之妙本故揚爲彼智見出現於世以理智二爲一乘體智性智相合名爲智四二運用廣體唯以因智名爲一乘火宅喻中與諸菩薩及聲聞衆乘此寶乘直至道場唯因行故五勝出分段體通取因果出分段死所有理智以爲一乘開示悟入四義之中前三爲果二後一爲因二如前已說故略不論勝鬘亦云如取爲緣有漏業因續後有者而生三有如是無明習地爲緣無漏業因有阿羅漢獨覺已得自在菩薩三種意生身身故

意生身所乘之乘名因中二攝大乘中萬行眞如俱名大乘故六引攝殊勝體以詮旨二名爲一乘教隨物設趣妙難知理假智冥體深頗測故方便品初以所詮智慧能詮教門名爲一乘無量義經十七名中彼第十四亦名一乘由此蓮華論有二義一體出水二能開敷初喻智慧後喻慧門若但以眞如爲一乘得出水之一義失開敷之二能然今蓮華既具四義何獨法唯二種三眞實體者根本大乘教理行果及能入大乘方便四法皆名一乘咸有運載之功能故根本教者此品初云其智慧門難解難入本論釋言阿含甚深華開敷義以喻妙法下文亦言法華經藏深固幽遠等攝大乘云阿毘達磨大乘經等方便教者此品下云或說修多羅伽陀及本事本生未曾有亦說於因緣譬喻並祇夜優婆提舍經我此九部法入大乘爲本隨順衆生說以故說是經勝鬘亦云正法住等爲大乘故說此六處故小三藏皆大方便根本理者謂法性眞如六度等行乘此眞理能有所往故名大乘此經上云諸佛智慧甚深無量下文亦云是法住法位世間相常住於道場知已導師方便說本論亦云念觀者謂大乘人觀法無我眞如法界等故無性亦云或乘大性故名大乘辨中邊說眞如法界名所緣無上方便理者謂四諦理二乘所觀皆方便理故勝鬘云聲聞知有作四聖諦佛知無作四聖諦涅槃亦言聲聞有苦有諦而無有實菩薩具有本論亦云念觀者聲聞觀人無我等由此二理皆理一乘根本行者謂六度等菩薩萬行菩薩地說七地所修四菩薩行安樂行品皆菩薩行又云乘此寶乘直至道場即行大乘攝大乘云亦乘亦大故名大乘辨中邊說十波羅蜜名正行無上方便行者勝鬘亦云正法住等爲大乘說依三藏教進善滅惡修無漏行皆行大乘法華論云方便者聲聞觀蔭界入厭苦離苦苦薩修六度四攝二利行由此二行皆一乘故根本果者佛身所有菩提涅槃即前所說法報二身理智二見故下經云說佛智慧故諸佛出於世唯此一事實餘二則非眞又云是法住法位世間相常住於道場知已導師方便說又壽量品所說法報化身皆果一乘辨中邊說十修證中第七淨土第九佛地第十示現菩提方便果者二乘所有菩提涅槃此經下言汝等所行是菩薩道羊車鹿車爲求牛車出於火宅方便施設中路化城爲至寶所息處故說二唯有一非餘勝鬘亦云聲聞緣覺四智不究竟名向涅槃界言得蘇息處四智究竟得涅槃者是佛方便故二乘果亦是一乘由頓悟者正學根本教理行果兼爲伏化二乘者故亦學方便教理行果其漸悟者初學方便後迴心已方學根本所學法同初後全別故知但有二種佛性理智二因無漏現種有爲無爲根本方便所有教理行果能成佛者皆一乘體兼取有漏地前功德及十地者助爲一乘未乖正理法華經論及餘教中隨依於此三種體中一門出體未必攝盡若依此解總含諸文無不盡矣然此體性合有五門一詮旨分別通教及理二因果分別通行及果三智福分別通福及智四覺寂分別通滅道諦菩提涅槃五二利分別通自利利他此說一乘故義通貫若言佛乘舉果攝因名若云菩薩乘舉因攝果稱名便不通義可兼有又由行者修習二智正體後得觀於二理生空法空斷於二障煩惱所知息於二死分段變易證於二果菩提涅槃圓得二滅無餘無住行於二利自利利他稱果滿也所斷二障集諦所攝所息二死苦諦所攝所修二智所證菩提道諦所攝所觀二理所得二滅所證涅槃滅諦所攝所行二利滅道諦攝合此滅道名爲一乘故此本論解述中云無二乘者無二乘涅槃

聲唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃唯佛乘故涅槃經中既以摩訶般若法身解脫三事圓滿名大涅槃故此一乘二諦爲體 釋名字者乘是運載義故廣雅云乘駕也周禮云乘載也運載行者至彼岸故故此經云乘此寶乘直至道場攝論亦云六度萬行亦乘亦大法性眞如所乘大性事理俱能運載行者自運運他至於彼岸皆名爲乘問因行能自運至果可名乘佛果自運息應非是乘體答有五義一者運載以名乘因中通二運至果廣運他由此亦名乘二者體能通二運能體並名乘果中體有能非無亦乘攝如割名爲刀有能即刀攝非要廣現割有能非是刀佛果德體能爲二運非要廣用方名爲乘三者二乘唯自運小尚得乘名況佛廣運他何理非乘攝四者因中理智能雙運二用勝故得名乘果中理智因修成因乘種類亦乘攝五者因中二運常增進作用現勝得名乘果中自運窮未來令他增進得乘稱初之四義隨他不正答後之一義隨自正義答故對法論云自他並利所依止一有三義一簡別故名一二破別故名一三會別故名一簡別故名一者昔日說三今時說一故知所詮理極一而爲實能證之教二即稱權無別二理以爲極也無我解脫雖悉皆等然至佛果方名爲極故所詮理佛智名一非別簡三唯無二極故論解述云無二乘者無二涅槃體然經云我設是方便令得入佛慧又云火宅之內許以三車出門已後但與牛車又云雇其除糞經二十年假名爲子故二乘者是後眞子付家事因又以果一簡別因三即有二簡一理簡教二果簡因汝等所行是菩薩道故破別故名一者二乘不知二爲方便執二乘果以爲眞極今說二涅槃但爲化城說二菩提但是羊鹿權教所設非是二果所得所證菩提涅槃眞勝極也破彼情執有二果極故說爲一即經所言諸求三乘人有懷疑網者佛當爲除斷令盡無有餘驚子亦言然我等不解方便隨宜所說初聞佛法遇便信受乃至斷諸疑悔迦葉亦言又今我等得涅槃證於菩薩法不生好樂之心攝論亦云斷除四處障二乘作意等即是此執本論末後亦云方便品有五分示現破二明一不說破三等或有說言破三執故非唯破二如薩婆多執佛化身以爲眞佛今說爲化故破三執此亦不然法華但以自修所得一乘爲宗會破彼乘令入於一非以所知一身爲宗會破彼身令入一身又無執彼化身爲極趣求至彼更不趣求餘身今破彼執令求一身故但破執二乘爲極不破執彼二身極也亦有解云聞昔說三執三皆極今說一極故破三執此乃地前菩薩起故若破執大極還爲說一乘更增其病何名爲破又未出宅許以牛車既亦破大後出宅與是何等車若言與白牛乘本黃牛故既爾即應捨頓學漸黃白牛相因行何殊既還本牛明不破大若執一極不違趣大何須破之執二爲極不趣大故可須破也若隨位得即執爲極未見趣大乘因中有此執設爾許亦破即應破無窮由此但破執二爲極又非破執四乘爲極爲無種姓說人天乘解有四乘不執極故執二爲極不異破二無執人天乘爲極者執者不解乘解乘不執故若一對四一是方便乃應破一執而歸四乘故亦非破五執不定乘同執三故由此勝鬘唯云阿羅漢辟支佛有恐怖有歸依言得四智及涅槃者是佛方便此經亦云唯此一事實餘二則非眞密遣二人息處說二羊鹿非眞不說三言從勝至劣數佛乘第一獨覺第二聲聞第三無第二獨覺無第三聲聞非無三乘之中大乘體極勸梵本云無第二第三今翻之略故云無二亦無三也此有難言經說別體三寶不破別體而歸

一體何故破二乘而歸一乘此亦不然若執別體三寶爲極亦同破之若別相三寶體亦無三極故雖爾亦無求住別體然可會之入於同體廣如經說非權實宗會別故名一者教修行果皆有根本及以方便會漸悟者先二乘中所修成得教修行果爲大方便依此本論初地已上離分段死見道已前教修行果爲不退地之根本因總依諸文會一有四一者會教無垢稱云佛以一音演說法衆生各各隨所解此經下云一雨普潤三草二木生長不同此會教同而機有異三乘取教有偏普故二者會理實性論云如馬象三獸度河河性無差得有淺深又下經云譬於高原穿鑿須水若見乾土知水尚遠若見濕土知水不遠 若見於泥知水極近水性無差得之有異此會理同而證有異三乘證理有圓缺故三者會行鷺子自言爲是究竟法爲是所行道佛自亦言我設是方便令得入佛慧勝鬘亦言此六處爲大乘故說故知行同而修有異三乘修行有分全故四者會果此經下言息處故說二中路設化城爲引至寶所方爲究竟處爲求牛車出於火宅權設羊鹿後皆與牛勝鬘亦言聲聞緣覺四智不究竟名向涅槃界即會二乘菩提涅槃若理若智皆歸一乘故知果同而證有異三乘取果有初後故雖依諸教總會此四然法華中顯會教理密會行果會教理者即前所標諸佛智慧及智慧門一雨普潤會教也牛車寶所會理也此以所詮名之爲理非要眞如欲顯所得甚深難解有所言說意趣難知道場所得法無能發問者我意難可測亦無能問者亦顯法華開方便門顯眞實相即是法華開敷秀出密亦通會行果二同我設是方便令得入佛慧乘此寶乘直至道場即會行故中設化城爲至寶所即會果故勝鬘經中顯會行果六處正爲大乘故說正會行故二乘四智非爲究竟名向涅槃界即會果故勝鬘正說一乘因果故顯會行果密會教理法華正顯昔權今實故顯會教理令其修證密會行果由此一乘據實通會教理行果總解諸文於理名矣故云會別名之爲一此經正取一乘因果爲眞乘教爲方便故不相違今此小義雖未動於智海如愚所知頗亦絕於今古博識深智當自詳之三義之中初二解通定性不定性後一多唯依不定性大乘無上雖即一乘非經所須故略不說明說意者攝大乘云爲引攝一類及任持所餘由不定種姓諸佛說一乘法無我解脫等故姓不同得二意樂化究竟說一乘此中十因一爲引攝一類不定種姓聲聞獨覺令依大乘般涅槃故法華一會多爲此類說於一乘法華論名退已還發大菩提心由鷺子等昔皆求大退修小果名退還發非諸不定姓皆退還發心此應名不定種二爲任持所餘不定種姓地前菩薩第六住前猶在退位恐於大乘精進且壞退依二乘般涅槃故故此經云菩薩聞是法疑網皆已除本論亦言如來爲二種人正與解釋此二皆是不定種姓爲此二種故說一乘三法等故行乘雖異所趣眞如無差別故法華論說多與此同四無我等故若有眞實補特伽羅可有乘別我既無異故說一乘五解脫等故三乘並於煩惱障中而得解脫解脫無差別故六姓不同故二乘之中不定種姓有差別故此聲聞身具有聲聞及佛種姓由有此姓故說一乘第七佛於有情得同自體意樂故言我即是彼彼即是我我既成佛彼亦成佛第八乘於佛得同自體意樂同名菩薩得受記別故謂於此會佛與二乘授佛記別爲令攝得如是意樂我等與佛平等無二又此會有諸菩薩與彼名同因得記別故佛一言含二種益謂二乘者得同佛自體意樂及諸菩薩得受記別九化故如世尊

説汝等苾芻我憶往昔無量百返依聲聞乘而般涅槃云何已成佛後依二乘而般涅槃即爲調伏所化聲聞佛菩薩等自化其身爲彼同類於無餘依現般涅槃經百千劫耽寂滅酒醉逸而臥後從彼起現受佛記令諸不定種姓二乘盡作是心往昔者導入涅槃者今皆復起現受佛記況我今者不希作佛而入涅槃今此會中富樓那等即其類也**法華論**中爲化聲聞授記即此是故亦爲降彼二乘者慢我亦得汝之涅槃故廣如**楞伽**說阿羅漢入無餘涅槃經百千劫耽三昧酒醉逸而臥後從彼起方發大心皆佛菩薩之所化作若不爾者實入無餘涅槃身智都盡後從彼起法從何生故知是化十究竟故由過此外無別勝乘依理究竟最爲殊勝故説爲一今此會中依論但與二人記別一不定姓二應化者爲不定姓者即第一第二第八少分爲應化者即第九義及餘少分説於一乘非全撥其無定性故此一乘是密意説**解深密經**云相生勝義無自性如是我皆已顯示若不知佛此密意失壞正道不能往依諸淨道清淨者唯依此一無第二故於其中立一乘非有情性無差別於定不定有性無性合説一故**涅槃**亦言一乘一道四果聖人皆得作佛不解我意故但應如是所説善今此十義説於一乘**法華論**中無此具足顯揚説六因莊嚴論八義説於一乘不過此十故不叙之第四彰差別者此説一乘與**勝鬘涅槃經**所説一乘差別之相此通理智彼唯佛性此唯攝入彼通出生此唯有性彼通無性此唯不定性彼通定性此多説教理彼多説行果此説一乘爲實二乘爲權彼説一乘爲權四乘爲實故**勝鬘**云若如來隨彼意欲而方便説唯一乘無有餘乘等也與**無量經**所説一乘辨差別者如釋名中已廣解釋是差別相及第五問答辨等皆如別章不繁具舉

- (21) [54] Skt. 40.13-15; Tib. 40.13-14; Chin. 7b2-3.
- (22) 716c11-19: [64] 經 舍利弗至若二若三 贊曰此與記中第四令住一乘以此一乘爲衆説法都無第二獨覺第三聲聞從勝至劣爲次第故不以修習淺深難易爲次第也故此經中第一周云餘二則非眞第二周云密遣二人第三周云息處故説二不説於三故知不是總無三乘但應如今所説義也會彼所修教理行果爲今大因勤住大乘
Cf. 山口益「チベット仏典における法華經」金倉圓照編『法華經の成立と展開』平樂寺書店, 1970, pp. 687-688.
- (23) [55] Skt.40.15; Tib. 40.15; Chin. 7b3-4.
- (24) 716c20-29: [65] 經 舍利弗至法亦如是 贊曰自下第五依法顯今釋迦依一切佛説法軌則初説方便後説眞實勸彼生信引他成已大文有三初明十方佛法式如是次明三世佛法式如是後明我由此法式亦如是此初也雖離三世更無十方離於十方更無三世橫豎有殊故分差別攝大乘云人趣諸有情處數皆無量念念證等覺故不應退屈由此現在十方佛亦無窮法式皆同
- (25) [56] Skt. 40.15-41.5; Tib. 40.15-41.6; Chin. 7b4-6.
- (26) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7b22-25: 言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故。T. 1520, 16c18- 17a2: 我等觀故方便者小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於

大乘中修諸波羅蜜四攝法攝取自身他身利益對治法故

- (27) 序本において引用される『十二門論』に説かれる六義の何か。677b4-6: 十二門論六義名大乘一出二乘二佛最大此乘能至三佛之所乘四能滅大苦與大利樂五觀音等大士所乘六能盡諸法源底
- (28) 717a1-28: 【66】 經 舍利弗至一佛乘故 贊曰下明三世佛法式有二初別明三世法式後結所爲皆同初中有三初過去次未來後現在三中各二初明佛說法法式同後明所度衆生得道同此明過去佛法式同初以種種因緣等說法爲方便者皆爲後得一佛乘故本論云方便者小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故大乘中諸波羅蜜四攝法攝取自身他身利益對治法故因緣者本論於其六義第二說中解故指前云如向所說種種因緣者謂三乘法彼三乘唯名字章句說非有實義故以彼實義不可說故譬喻者如依牛有乳酪生蘇熟蘇乃至醍醐醍醐爲第一小乘如乳大乘如醍醐故此譬喻明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上故聲聞同者示諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞辟支佛等法身平等無差別故在此譬喻示現此中意說凡夫如牛聲聞如乳辟支如酪小菩薩如生蘇大菩薩如熟蘇佛如醍醐醍醐爲第一佛乘亦爾由本一牛腹中乳性展轉增勝乃至醍醐故從凡夫乃至成佛相貌有差體性平等本無二也今此經文唯有此三本論釋經更有念觀念觀者於小乘中人無我等於大乘中眞如法界實際人無我法無我等觀故此經以方便因緣譬喻言詞爲次第本論釋經以譬喻因緣念觀方便爲次第故今引釋與論不同學者應悉
- (29) [57] Skt. 41.5-9; Tib. 41.6-11; Chin. 7b6-7.
- (30) 717a29-b3: 【67】 經 是諸衆生至一切種智 贊曰此明過去已度衆生得道皆同初雖作二乘後皆作佛得一切種智一切種智即佛正智種別能知一切法故正是牛車
- (31) [58] Skt. 41.10-15; Tib. 41.12-18; Chin. 7b7-10.
- (32) 717b4-5: 【68】 經 舍利弗至一佛乘故 贊曰此明未來佛法式同
- (33) [59] Skt. 41.15-20; Tib. 41.19-23; Chin. 7b10-11.
- (34) 717b6-7: 【69】 經 此諸衆生至一切種智 贊曰此明未來當度衆生得道皆同
- (35) [60] Skt. 42.1-5; Tib. 42.1-5; Chin. 7b11-15.
- (36) 717b8-11: 【70】 經 舍利弗至一佛乘故 贊曰此明現在佛法式同饒益者利益之安樂者與樂也拔苦與樂與智與福與世出世果與小果大果如次配之
- (37) [61] Skt. 42.5-7; Tib. 42.6-7; Chin. 7b15-16.
- (38) 717b12-13: 【71】 經 是諸衆生至一切種智 贊曰此明現在衆生得道皆同
- (39) [62] Skt. 42.7-11; Tib. 42.7-12; Chin. 7b16-18.
- (40) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7a21-b3: 依四種義應當善知何等爲四一者無上義唯除如來一切智知更無餘事如經欲開佛知見令衆生知得清淨故出現於世故佛知見者如來能證以如實知彼深義故二者同義謂諸聲聞辟支佛法身平等如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身無差別故三者不知義謂諸聲聞辟支佛等不能知彼真實處故此言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經

- 欲令衆生悟佛知見故出現於世故四者令證不退轉地示現欲與無量智業故。 T. 1520, 16b21-c2: 依四種義應知何者爲四一者無上義除一切智智更無餘事如經欲開佛知見令衆生知得清淨故出現於世佛知見者如來能證如實知彼義故二者同義以聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身更無差別故三者不知義以一切聲聞辟支佛不知彼真實處故不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世四者爲令證不退轉地示現與無量智業故
- (41) 717b14-b28: 【72】經 舍利弗至入佛知見道故 贊曰此結所爲所爲衆生究竟之時但爲菩薩當作佛故往因發心所修諸行皆向大故皆名菩薩所爲法者皆爲一乘以佛知見示彼衆生故悟衆生故欲令衆生入佛知見道故經文無開以總義故示義如前論更不解復解悟者令外道衆生覺悟故迴邪入正復解入者令得聲聞果者入大菩提故迴小向大本論一番開解無上義二番解示同義有疑修行三番解悟不知義未發心令發令外道生覺悟四番解入不退位已發心令入法令得聲聞者入大菩提且隨文別第一番配在正解大事之中第二番配在結大事文中第三配在依法之中論文並於大事中解。理亦無失
- (42) [63] Skt. 42.12-43.2; Tib. 42.13-43.2; Chin. 7b18-22.
- (43) 717b29-c9: 【73】經 舍利弗至一切種智故 贊曰此明我由斯法式亦如是唯佛有種種勝解智力故知諸衆生種種欲有遍趣行智力故知深心所著著謂所樂著所修行也或即情欲所起樂著即衆生處處著引之出故並是勝解智力所知有種種界智力故知其本性既知不定種姓界欲所修故初說三乘爲方便今說一乘爲究竟皆爲衆生得一佛乘一切種智故上文皆言得一佛乘一切種智故知種智即一佛乘
- (44) [64] Skt. 43.2-3; Tib. 43.2-3; Chin. 7b22-23.
- (45) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7b26-28: 界中尚無二乘何況有三如是等故無二乘者謂無二乘所得涅槃唯有如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃。 T. 1520, 17a04-5: 十方世界中尚無二乘何況有三如是等故無二乘者無二乘涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
- (46) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7a10-12: 與授記者六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮未聞者令聞。 T. 1520, 16b11-13: 與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮未聞令聞者。
- (47) 717c10-718a3: 【74】經 舍利弗至何況有三 贊曰此第六遮尚無第二獨覺乘何況第三聲聞乘也由此經云羊車鹿車爲求牛車出於火宅故唯破二不說更別破牛車故此無二乘涅槃體究竟故論云無二乘者無二乘涅槃唯佛如來證大涅槃究竟滿足一切智慧名大涅槃三事體義皆具足故二乘不然唯假擇滅無大智法身非諸聲聞緣覺等有大涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義如前已說論以與授記中六義配如前所說何等法乃至何體法等五義何等法者謂前第一未聞令聞謂說未曾有法令聞故云何法者謂第

二説初以方便種種言詞譬喻説故何似法者謂前第三依何等義唯爲一大事故何相法者謂第四令住一乘隨衆生根器有於佛性故令住諸佛法故何體法者謂第六遮遮無二體唯一乘體即是諸佛如來平等法身也三乘因果觀行不同可有差別非此所遮今所遮者遮無二種法身之體三乘眞如法身同故非謂遮無二乘體故一切皆無以此義理推論可解不爾論文稍隱難解唯無第五諸佛法式故以餘五次第配之便可解矣

- (48) [65] Skt. 43.4-5; Tib.43.4-5; Chin. 7b23-24.
- (49) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7c10-13: 自此以下如來說法爲斷四種疑心應知何等四疑一疑何時説二疑云何知是增上慢人三疑云何堪説四疑云何如來不成妄語。T. 1520, 17a15-17: 自此已下説法爲斷四種疑應知何等四種一者何時説二者云何知增上慢三者云何堪説四者云何不成妄語
- (50) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 7c13-14: 諸佛如來於何時起種種方便説法爲斷此疑。T. 1520, 17a17-19: 何時説者諸佛如來於何時起種種方便説法爲斷彼疑。
- (51) 菩薩地持經, T1581, 928c23-24: 謂今世短壽人極壽百歲是名命濁
- (52) 大智度論, T1509, 59b19-20: 四種悉檀一者世界悉檀二者各各爲人悉檀三者對治悉檀四者第一義悉檀。
- (53) 十地經論, T1522, 128a26: 清淨者不濁故
- (54) 718a4-719b6: 【75】經 舍利弗至命濁 贊曰就第三段開斯實相啓彼權門中有二上來已解取與二記下第二段破四種疑論科五分中下第五斷疑分論説四種疑者一何時説二云何知增上慢三云何堪説四云何不成妄語此破初疑論云諸佛如來於何時等時中起方便説法謂佛於何時中初説二乘權後明一乘實此下答中有二初標五濁時出後明所由此初也五濁義以五門分別一釋名二出體三對治四廢立五相攝釋名者濁者滓穢義如食滓穢下惡可汚名之爲濁此言意説劫增之時三災漸輕煩惱轉薄衆生向好惡見漸微命根轉長漸漸向勝以上好可欣名之爲清衆生無苦化佛不出世諸化佛出世必向劫減小災漸起煩惱轉厚衆生向惡染見漸盛命根轉短漸漸向劣下惡可厭故立濁名五者是數帶數釋也釋別名者皆持業釋或以別簡總亦依主釋出體者地持論云謂今世人多皆短壽極長百歲是名命濁此以本識名言種子由業所引功能差別命根爲體善業力弱命根漸短由殺生業之所感故若諸衆生不識父母不識沙門婆羅門及宗族尊長不脩義理不怖不畏今世後世惡業果報不脩惠施不作功德不脩齊法不持禁戒是有情濁雖第八識名爲有情今説由近惡外緣故五蓋假者作惡無善名有情濁合以第八識及五蓋爲性若此衆生增非法貪或惠刀劍成施器械諍訟鬭亂詬曲妄語攝受邪法及餘惡不善法是名煩惱濁除五見外所餘一切煩惱隨煩惱皆煩惱濁體此非法貪惠刀劍等令行殺害或慳好財但捨刀劍因非法貪諍訟等起乃至及餘惡不善法通攝一切煩惱隨煩惱盡由性數習逢惡境牽煩惱尤重若於今世法壞法沒像法漸起邪法轉生是名見濁此以五見而爲體性多近外道惡見數生若飢饉劫起疾病劫起刀兵劫起是名劫濁此以色蘊

四塵爲體或通五蘊仍是不相應時爲其體依四五蘊而建立故煩惱增多惡業尤重便招惡果三災遂生對治者謂隨其相說對治法智度論中立四悉檀悉檀宗也一世界悉檀二各各爲人悉檀三對治悉檀四第一義諦悉檀劫濁衆生濁世界悉檀治之識器世間衆生世間悉皆虛幻厭怖脩道即永離故命濁以各各爲人悉檀治之識知人由善業所得脩持淨戒行不殺等命自長故或爲三乘之人各說自乘之法令得自乘涅槃之果便除生死所有命濁煩惱濁見濁對治悉檀治之脩習隨應對治之道令不起故由三悉檀破五濁故入第一義證會眞宗廢立者何故唯立五濁不增減耶答衆生有二一惡行謂在家白衣二邪行謂出家外道白衣無慧煩惱增時名煩惱濁外道邪解浪推求時立爲見濁又諸鈍惑名煩惱濁諸餘利惑名爲見濁由此二因得當果時離合不同復分二濁合二內果名衆生濁惡衆生故合二外果總名劫濁惡器具故劫謂時分時無別時依法辨故劫濁故以惡器爲體此惡衆生及與外果雖復總陳是二濁果未辨何者正惡果體今顯根本故立命濁或內惡果名爲命濁外惡果者名爲劫濁此惡因果由誰而有謂惡衆生故名衆生濁由此五濁據增行相欲令生厭故偏說五問何故惑苦名爲障今離以爲濁業亦是障攝不立於濁中答障是礙義三皆是礙礙聖道故濁滓穢義業濁義微故不立濁又劫中刀兵亦即業濁劫濁寬故從寬爲名立亦無夾相攝者薩遮尼乾子經立十二濁一示現劫濁二示現時濁三示現衆生濁四示現煩惱濁五示現命濁六示現三乘差別濁七示現不淨國土濁八示現難化衆生濁九示現說種種煩惱濁十示現外道亂濁十一示現魔濁十二示現魔業濁善男子諸佛國土皆是出世功德莊嚴具足清淨無有諸濁如是過失皆是諸佛方便示現爲利衆生唯言示現故知業等亦可立濁此十二濁唯大乘有隨佛化土勝劣二法示現立之開合不同五濁唯據穢土相增義門乃通大小乘有其劫及時即劫濁衆生及難化衆生即衆生濁煩惱及說種種煩惱即煩惱濁命即命濁外道亂即是見濁此八濁即五濁餘之四種謂三乘差別不淨國土魔及魔業非五濁攝五濁據勝唯實雜染十二濁通能化能障佛示現故若依毘尼母經五濁中無見濁立業濁若依彼經煩惱及業各合爲一果中分三一正報體謂命濁二內報體謂衆生濁三外果體謂劫濁障據類同合立三障或并法障濁據滓穢或合或開隨機不同遣生厭怖不可爲難十地論第一卷云清淨者不濁義濁有六種離此諸濁故名清淨一不欲濁二威儀濁三蓋濁四異想濁起妬勝心破壞心故五不足功德濁善根微少於彼說中心不樂住六癡濁謂愚癡等此唯據行濁不通依諸法有六對治故離懈怠故嚴故淨故堅固故功德具足故智具足故此六所治故立六濁不須和會餘如別章恐繁且止法爾佛出必五濁時故言諸佛出於五濁惡世問何因彌勒八萬歲時生釋迦佛百歲時出答願力異故俱是濁世並化三乘初權後實並化身故若諸報佛及化佛中不化二乘初權後實未必濁時佛方出世若化二乘初權後實必濁時出惡生難化漸入道故此言濁者入滅劫中漸生此五即名濁時故彌勒佛初滅八萬漸向五濁方出世故非要人壽三二十歲大災起時方名劫濁故諸論云劫滅佛興世劫增時轉輪王問若劫滅時佛方出世劫增輪王何故偃伏與彌勒同世又佛不出家當爲輪王日月燈明八子皆統四天下也答偃伏劫增時出命長故逢彌勒非彌勒佛不滅時出又佛不出家應爲金輪之位非

定作也燈明八子義理亦同彼是報身故無此失此說金輪必劫增出銀銅鐵輪王出時不定是以無憂王世佛滅百年鐵輪王也

(55) [66] Skt. 43.5-8; Tib. 43.5-8; Chin. 7b24-27.

(56) 719b7-c12: 【76】經 如是舍利弗至分別說三 贊曰下釋五濁佛出所由牒指前標所說五濁故言如是劫濁亂時者牒前劫濁飢饉疫病死刀兵起時衆生垢重牒衆生濁垢謂六垢污染身心點染不淨名之爲垢增強難破名之爲重一害二恨三惱四諂五誑六矯於有情所樂爲損惱名害由忿爲先結怨不捨名恨已追往惡觸現違緣心便俱戾多發瞋暴凶鄙龜言蛆螫名惱此三以瞋爲體爲網胃他或藏已失或取他意矯設異儀險曲名諂爲獲利譽矯現有德詭詐名誑謂矯誑者心懷異謀多現不實邪命事故此二貪癡二法爲體於自盛事深生染著醉傲名矯以貪爲體由諸衆生六垢重故不識沙門不修善法故衆生濁慳貪嫉妬即煩惱濁耽著已得財法不能惠捨秘吝名慳於諸未得有及有具希欲名貪慳雖即貪已得未得染希別故分成二門嫉音秦悉秦血辭栗三反或作嫉疾毒害也殉自名利不耐他榮妬忌憂惑名爲嫉妬嫉雖即妬緣他正法名稱嫉緣他榮樂名利稱妬說文玉篇云害賢曰嫉害色曰妬成就諸不善根者不善根有三謂貪瞋癡由具二義立不善根一是根本煩惱能生他故簡諸隨惑不得立之二遍六識有過失深廣餘慢見疑非不善根唯意有故由具此二義唯三名不善根根者出生義生惡緣故亦即煩惱濁唯說三濁不說見命濁者劫濁攝命由飢兵疾命多短故煩惱濁攝見及舉不善根煩惱之本攝一切煩惱故由於彼時人天減少惡道增多衆生難可卒以大乘而可教化故以智方便於一佛乘分別說爲三令漸入道故下經云但讚佛乘衆生沒苦不能信受故方便說

(57) [67] Skt. 43.8-10; Tib. 43.8-11; Chin. 7b27-29.

(58) 719c13-21: 【77】經 舍利弗至非辟支佛 贊曰自下釋第二疑第二疑云如來既不爲增上慢人說者云何知彼是增上慢文中初三顯非眞二乘聖相次顯增上慢者相後結成二眞聖相此初文也聲聞辟支眞聖趣寂若遇佛者多不愚法其不定姓可迴心者不問近遠必能聞知佛化菩薩事故名自謂是眞二聖而得遇佛都不聞知化菩薩事非佛聖弟子亦非眞二聖

(59) [68] Skt. 43.11-13; Tib. 43.12-14; Chin. 7b29-c3.

(60) 719c22-25: 【78】經 又舍利弗至皆是增上慢人 贊曰此顯增上慢者相凡夫得第四禪未離三界染自謂眞二聖是阿羅漢最後之身究竟涅槃不求正覺心不信向是增上慢

(61) [69] Skt. 43.13-15; Tib. 43.14-16; Chin. 7c3-5.

(62) 719c26-720a3: 【79】經 所以者何至無有是處 贊曰此結成二聖相但是眞聖而遇我者趣寂多是愚法人雖不能行聞之亦信不定種姓理信脩覺故眞二聖若不信者必無有是處彼非道理故其趣寂者不能證入初猶未信名損驚怖返道疑生後必信之成不愚法故此結云不信一乘無有是處

(63) [70] Skt. 43.15; Tib. 43.16; Chin. 7c5.

(64) 720a4-16: 【80】經 除佛滅後現前無佛 贊曰自下釋第三疑云何堪說謂有疑云從佛

聞法而起謗心云何如來不成不堪說法人此意說言亦有趣寂真實二聖而愚法者聞法起謗亦不聞知但化菩薩事即是世尊不能得化何故佛不成不堪說法人既成不堪說法人翻結之曰如何世尊可堪爲衆生說法而稱種智也故佛答言除佛滅度後現前無佛雖真趣寂而遇我者多不愚法皆定聞知化菩薩事若不遇我而趣寂者有愚於法即不能知但化菩薩此文有三初標次釋後結成此初也

- (65) [71] Skt. 43.15-44.2; Tib. 43.16-44.2; Chin. 7c5-7.
- (66) 720a17-21: 【81】 經 所以者何至是人難得 贊曰此釋前標我滅度後以無良緣善方便誘諸趣寂中多愚於法於此等經受持解義乃爲難得不解意故故我滅後有真二聖不聞不知但化菩薩
- (67) [72] Skt. 44.2-3; Tib. 44.2-3; Chin. 7c7.
- (68) 720a22-b1: 【82】 經 若遇餘佛至便得決了 贊曰此結成前義此愚法者若我滅後更遇餘佛方便說化於此法中便得決了故亦能知但化菩薩不逢佛者即有不知是我故我今非不堪說等故瑜伽云若已建立阿賴耶識依無色界亦入滅定信有藏識不斷絕故或復此疑非疑趣寂即疑增上慢既不化得云何世尊不成不堪說法人故此釋言我在必化得除我滅後等
- (69) [73] Skt. 44.3-4; Tib. 44.3-4; Chin. 7c7-9.
- (70) 720b2-20: 【83】 經 舍利弗至唯一佛乘 贊曰此下釋第四疑云前說三乘今說爲一今說法異今說法異云何世尊不成妄語故佛答言我已證解汝全未知行位未到但當一心信我所說汝創發心初可信故阿羅漢迴心經二萬劫始至三大阿僧祇劫初信心之位故但應信勿生疑惑佛語無妄理唯一乘不定種姓究竟成果智亦唯一乘無二乘故般若論云佛說四事無虛妄者菩提授記小乘大乘今即大乘及授記故成不妄語也此品初首初歎法妙及法師妙已有定疑分於定記分有此四疑初疑於與記上生於何時中初說方便後說真實既第二疑於取記上生有增上慢從生起去故云何知是若依初解第三疑於因記上生佛心本定爲二人說不爲愚法故生此疑云何堪說若依後解亦取記上生第四疑於一切上生初說後說自相違故云何不成妄語
- (71) [74] Skt. 44.5-8; Tib. 44.5-7; Chin. 7c9-12.
- (72) 720b21-c4: 【84】 經 爾時世尊至優婆夷不信 贊曰下有一百二十一頌中後之三頌入品第四段勸發喜心令知作佛即初一百一十八頌頌前長行第三開斯實相啓彼權門分二初一百一十五頌頌前二記後之三頌頌破四疑初中復二初四頌頌取記中惡人退席後一百一十一頌頌與授記四中初一頌頌增上慢後之三頌頌罪根深重四頌如次慢犯覆障此頌慢也出家之人道證爲首少得謂多得多起增上慢在俗男子多計著我自恃高心故生我慢在俗女人多生卑慢無恃勝道少計著我隨順夫朋亦懷不信
- (73) [75] Skt. 44.8-14; Tib. 44.7-13; Chin. 7c13-18.
- 漢文はこのセクションを3つに分けて(7c13-14, 15-16, 17-18)注釈を行っているが、チベット語訳は1つにまとめている([75] = 【85・86・87】)。

- (74) 720c5-12: 【85】經 如是四衆等至於戒有缺漏 贊曰下三頌頌罪根深重犯戒覆罪法障別放此犯戒也少犯爲缺多犯爲漏可毀責故壞戒名缺壞見名漏或煩惱漏起仍不見覺自恃高心戒中既云除增上慢自稱得聖方犯重罪故此尤過不是尸羅不清淨故三昧不現前攝今言犯戒總相而說不知犯相
720c13-23: 【86】經 護惜其瑕疵至佛威德故去 贊曰覆罪也玉內有病爲瑕玉外有疾爲玼犯戒亦爾世譏嫌如玼內起過如瑕身語過如玼即缺也內心過如瑕即前漏也犯性罪名瑕犯遮罪名玼其玉外病應爲玼字今爲疵者法內之人有煩惱病如玉有瑕喻法合說疵者病故護惜不陳覆藏已失酒滓曰糟極沈濁故米糲名糠輕無用故不但小智背法自行佛威拂之令避席去恐聞妙法誹謗增罪於彼無益故威逼之令其起去
720c24-26: 【87】經 斯人尠福德至唯有諸真實 贊曰法障也夙造置法業法障在身不堪聞法故尠少也鮮尠俱得
- (75) [76] Skt. 45.1-2; Tib. 45.1-2; Chin. 7c19-20.
- (76) 漢文は18偈半である。
- (77) 720c27-721a12: 【88】經 舍利弗善聽至而爲衆生說 贊曰下第二段一百一十一頌頌與授記長行有六今亦分六初六頌頌說次七頌半頌令住次一頌半頌遮次十八頌半頌依何等義次七十頌半頌依法後七頌頌未聞令聞於六不同中前後不同故頌曰六說七半住次一頌半遮十八半何等七十半七二初六頌說中分二初四頌半頌所以者何下釋文後一頌半頌前標中隨宜所說意趣難解初中復三一頌頌無數方便二頌頌種種因緣譬喻言詞即譬喻因緣念觀方便也一頌半頌演說諸法此初也前長行中標云諸佛隨宜所說釋中云我以無數方便今此頌釋云諸佛所得法無量方便力者前後彰影他互互顯亦不相違
- (78) [77] Skt. 45.3-6; Tib. 45.3-6; Chin. 7c21-24.
- (79) 721a13-20: 【89】經 衆生心所念至令一切歡喜 贊曰頌種種因緣等於中有二初頌知機後頌因緣譬喻心所念行道遍趣行也諸欲者種種勝解也諸性者種種界也先世善惡業者處非處及自業也說佛有五智力種種念觀也能知衆生此之五種故以因緣譬喻言詞方便說法皆令歡喜釋前種種言詞所由
- (80) [78] Skt. 45.7-8; Tib. 45.7-8; Chin. 7c25-27.
- (81) 大乘阿毘達磨集論, T1605, 686a25: 何等契經謂以長行綴緝略說所應說義
- (82) 大乘阿毘達磨雜集論, T. 1606, 743c04: 應頌者即諸經中或中或後以頌重頌
- (83) 大乘阿毘達磨集論 T. 1605, 686b11: 何等緣起謂因請而說
- (84) 成唯識論述記集成 T. 2266, 48b18-19: 論議者謂諸經典循環研覈摩理迦
- (85) 721a21-723a5: 【90】經 或說脩多羅至優婆提舍經 贊曰一頌半頌演說諸法依諸處說十二部經次第一契經經云脩多羅二應頌經云祇夜三記別此中無四諷誦經云伽陀五自說此中無六緣起經云因緣七譬喻八本事九本生三名同此十方廣此中無十一希法經云未曾有十二論議經云優婆提舍經於此義中以三門分別一辨相二釋名三差別

辨相者契經有二相一通二別涅槃經云從如是我聞乃至歡喜奉行如是一切名脩多羅攝十二盡名通相也以教貫理及攝生故對法論云謂以長行綴緝略說所應說義名為契經此唯長行名為別相偈頌便非別契經攝應頌有二相一為益後來二顯前未了義對法等云謂諸經中或中或後以頌重頌前長行義名益後來又云不了義經應更頌釋長行雖說義未了故名顯前未了義涅槃唯說初之一義記別有三相一記弟子死生因果二分明記深密之義三記菩薩當成佛事對法等云謂於是處聖弟子等謝往過去記別德失生處差別此記弟子死生因果又云又了義經說名記別記別開示深密義故即此第二記深密義故此本論云授記有四謂決定心因取與記等涅槃經云如來為諸大人授記汝阿逸多未來有王名曰優伽當於是世而得成佛名曰彌勒是記別經此即第三記當成佛誦誦相者顯揚等云謂諸經中非長行直說然以一句結成或以二句三四五六句等說並為誦誦自說相者瑜伽等云謂於是中不顯請者為令當來正法久住正教久住不請而說並名自說緣起有三相一因請而說二因犯制戒三因事說法對法論云因緣者謂因請而說又有因緣制立學處即初二義名為緣起涅槃經言如諸經偈所因根本如舍衛國有一丈夫羅網捕鳥得已還放世尊知其本末因緣而說偈言莫輕小罪以為無殃水滌雖微漸盈大器是名緣起即是第三因事說法譬喻相者瑜伽論云謂諸經律所有譬喻而說諸法本事相者瑜伽論云謂除佛本生宣說前際若人若法諸所有事涅槃經中唯說往法如我出世所可說法名曰界經响樓秦佛名甘露鼓响那含牟尼佛名曰法鏡迦葉佛時名分別空不說往人據實通也本生相者顯揚論云謂於是中宣說世尊在過去世彼彼方所若死若生行菩薩行行難行行是名本生說佛為菩薩時若身若行皆本生故涅槃經中唯說菩薩往身不說菩薩往行作鹿作熊作獐作兔乃至廣說作金翅鳥等方廣有二相一說菩薩道二法廣多極高大故時長遠故此通聲聞亦有方廣今取涅槃具二為正希法相者謂諸經中宣說諸佛及聖弟子八衆所有共不共德及餘最勝殊特驚異之法是為希法涅槃經中唯說佛事如佛初生即行七步放大光明遍照十方彌猴獻蜜白狗聽法魔變為青牛行瓦鉢間令相觸無所傷損但說弟子及非弟子希有之事皆名希法論議有二相一佛自說二弟子說瑜伽論云謂諸經典循環研覈摩呬理迦一切了義經皆名摩呬理迦謂於是處世尊自廣分別法相又聖弟子已見跡跡依自所證無倒分別諸法體性此亦名為摩呬理迦亦名阿昆達磨今此且引攝義周文其餘偏教恐繁不引釋名者先釋總名先德翻為十二部經部含二義一部袞二部類此是部類十二義類有差別故古人疑云十二部袞經由此道士說三十六部老莊之徒各為一部今言十二分教分謂分段文義差別有十二分段故又云經者乃濫契經今翻為教十二通稱更無所濫帶數釋也釋別名者總為三類應頌誦誦自說緣起希法方廣此之六名唯依主釋應重述頌乃至方理之廣故論議一種唯持業釋論體即議故或誦誦亦持業釋可誦可誦故不同應頌彼頌是教此誦是言故契經記別譬喻本事本生此之五名通持業依主兩釋能契即契理之經乃至本體即生本世之生故差別者一體差別二教差體差別者應頌之中定無誦誦誦誦之中定無應頌初後別故單重別故本事之中定無本生本生之中定無本事師資別故此之四部唯具十一所餘八部

皆具十二隨其所應有前所說差別相故**涅槃經**云始從如是終至奉行皆脩多故通十二別相即無唯取長行為契經故二偈便非自餘七教皆具十二准此可知其應頌中具十一者**譬喻品**云舍利弗來世成佛普智尊號名曰華光當度無量衆即有記別之應頌也應頌之中亦有自說**方便品**云世雄不可量諸天及世人一切衆生類無能知佛者即是自說之應頌也應頌之中亦有緣起**方便品**云舍利弗善聽諸佛所得法無量方便力而為衆生說即是因緣之應頌也因鶩子請而說法故應頌之中亦有譬喻譬如長者有一大宅其宅久故而復頓弊等即是譬喻之應頌也應頌之中亦有本事**序品**中云彼佛滅度後懈怠者汝是妙光法師者今即我身是即是本事之應頌也應頌之中亦有本生。**常不輕品**云彼時不輕即我身是即是本生之應頌也應頌之中亦有方廣**方便品**云十方佛土中唯有一乘法無二亦無三除佛方便說即是方廣之應頌也應頌之中亦有希法**化城品**云大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道即是希法之應頌也應頌之中亦有論議**壽量品**云衆生既信伏質直意柔軟一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山我時語衆生常在此不滅以方便力故現有滅不滅此即論議之應頌也自餘三教皆具十一准此應知然此經中具十二分一部皆是契經通相重宣此義處並是應頌諸為授記解深義處皆是記別**化城品**中東方梵天以偈頌言世尊甚希有難可得值遇具無量功德能救護一切等皆是諷誦**方便品**初即是自說故前偈云無問而自說稱歎所行道鶩子三請彌勒三請等所說權實處皆是緣起**譬喻品**等皆是譬喻說諸弟子過去事處皆是本事自說佛身過去事處皆是本生說一乘處皆是方廣說現神通處皆是希法**壽量品**中佛自往復說三身相可名論議教差別者一大全小九即此經文小乘唯無授記自說方廣三種不遮大乘有十二分二小 大全九**涅槃**第三云護大乘者受持九部彼除因緣譬喻論議不遮小乘有十二分三大全小十一**瑜伽**三十八云方廣一分唯菩薩藏所餘諸分有聲聞藏四大全小十一**瑜伽**八十五云除方廣一分餘名聲聞乘相應契經何故此文大全小九依授弟子得成佛記名為記別說聲聞無彼先未求大菩提故譬如以寶示其愚人愚人便笑聲聞聞記亦復如是故說為無非記別弟子謝往死生之事亦無又聲聞乘多聞淺法若不待請而即為說憍慢便生言無自說其實亦有又聲聞人但證小果不得正覺理非至極行不苞弘說無方廣其實亦有正法廣陳之方廣也故此頌中唯為聲聞說於九部理通十二**涅槃經**中小大全九者因犯制戒說為因緣菩薩無犯故略云無非無因請因事說法之緣起也夫說譬況開中下根至如鶩子利根上品尚多不待喻況諸菩薩多分不待故說為無理亦有也又大菩薩性皆利根舉宗便解不假徵詰方生慧心說無論議理實非無又護法者多誦素咀纒藏緣起譬喻多調伏藏論議多是對法藏攝故言大唯九理非無十二**瑜伽**三十八大全小十一者小乘亦記弟子謝往及不待請佛悲深故具有記別及自說等故有十一無方廣者不求正覺說理龜淺名之為無實亦有也**瑜伽**八十五文與前無別然以十一說為聲聞對之方廣說為菩薩非菩薩藏無餘十一皆是隨於一別之義說數不同理實聲聞菩薩二藏皆具十二今隨所要且略分別自餘廣釋如章應知

- (87) 723a6-14: 【91】 經 鈍根樂小法至爲是說涅槃 贊曰。此一頌半頌前標中隨宜所說意趣難解略由五義一鈍根難悟二樂小怖大三耽生死不怖出世四逢緣不修五現衆苦迫由此五義爲說涅槃以鈍根故著於生死雖逢諸佛往日已化不行大乘深妙之道由行惡故退還受苦由勸離苦故初爲說二乘涅槃故信解品最初逢佛退流生死後化二乘正與此同
- (88) [80] Skt. 45.11-12; Tib. 45.11-12; Chin. 8a2-3.
- (89) 7 偈半は、続く数字の総数7と合わないが、4 偈が漢文では4 偈半であり、チベット語訳も後の[82]では4 偈半である。ただし、チベット語訳は、この4 偈半を1 偈、1 偈、2 偈とし、混乱が見られる。
- (90) 723a15-18: 【92】 經 我設是方便至當得成佛道 贊曰下第二段有七頌半第四令住中分四一頌標一頌釋四頌半會一頌勸住此初也初設二權爲令究竟入於佛慧住一乘故
- (91) [81] Skt. 45.13-14; Tib. 45.13-14; Chin. 8a4-5.
- (92) 723a19-25: 【93】 經 所以未曾說至決定說大乘 贊曰此釋前標會於已前汝根未熟未悟大乘不堪爲說汝今根熟正是其時故爲說也同化城品云諸比丘若如來自知涅槃時到衆又清淨信解堅固了達空法深入禪定便集諸菩薩及聲聞衆爲說是經世間無有二乘而得減度唯一佛乘得減度耳
- (93) [82] Skt. 46.1-2; Tib. 46.1-2; Chin. 8a6-7.
- (94) 723a26-b3: 【94】 經 我此九部法至以故說是經 贊曰下四頌半會中分三一頌顯小法非眞說爲大本一頌半顯大法勝妙爲勝人說二頌結成勝妙人法勸捨非妙人法此初也隨順初機說此九部爲入大本非究竟也故應住大
- (95) [83] Skt. 46.3-4; Tib. 46.3-4; Chin. 8a8-10.
- (96) 723b3-21: 【95】 經 有佛子心淨至說是大乘經 贊曰顯大法勝妙爲勝人說勸捨劣法勿成惡人頓悟漸悟一切菩薩皆名佛子此有五德一心淨專求大乘佛之智慧非樂下劣除二障故二柔軟下心耐勞倦堪能作大業精勤不息故三利根性多拔苦樂與他樂一切均平聞法速入四無量諸佛所久遇良緣恒自磨瑩五而行深妙道齊修福慧寶規眞覺發菩提心經說具十種法堪發菩提心一親近善友二供養諸佛三修習善根四志求勝法五心常柔和六遭苦能忍七慈悲淳厚八深心平等九愛樂大乘十求佛智慧皆此五攝心淨攝二句愛樂大乘求佛智慧柔軟攝二句心常柔和遭苦能忍利根攝二句慈悲淳厚深心平等無量佛所攝二句親近善友供養諸佛行深妙通攝二句修習善根志求勝法有具此五德成十法之子方爲說大乘令其發趣
- (97) [84] Skt. 46.5-8; Tib. 46.5-8; Chin. 8a11-14.
- (98) 723b22-28: 【96】 經 我記如是人至故爲說大乘 贊曰結成勝妙二勸捨非妙二記五德人來世成佛以深心念佛脩持淨戒故念佛有二一語念二心念或心緣事佛願救希成智念身求證滅障定慧既爾又持淨戒三學既成故爲之記此等聞得佛順心故歡喜佛既知心故爲說大

- (99) [85] Skt. 46.9-10; Tib. 46.9-10; Chin. 8a15-16.
- (100) 723b29-c1: [97] 經 聲聞若菩薩至皆成佛無疑 贊曰此勸住也讚法聞益勸住大乘
- (101) [86] Skt. 46.11-12; Tib. 46.11-12; Chin. 8a17-19.
- (102) 723c2-17: [98] 經 十方佛土中至引導於衆生 贊曰此第三段一頌半頌第六遮無二者無第二獨覺乘無三者無第三聲聞乘從勝向劣佛乘爲初此據真理無二極乘除方便說方便說中可有三故以假三名引導生故用假羊鹿之名引生出於火宅非有實二以度衆生此說二乘涅槃菩提俱無實體並稱假名然涅槃可證而縛除種智不成以無覺故化城入之以息苦羊鹿有名而不登問三事稱大般但得解脫言入城二空智名牛但得生智上羊鹿答解脫諸苦息方名入化城種智二乘無故不上羊鹿又解脫二乘同息苦彼亦分得與入名眞智種類獨佛圓雖亦分得不名上理實無別又惑障因果彼皆除解脫化城稱暫入智障因果彼不滅二車種智不言登
- (103) [87] Skt. 46.13-14; Tib. 46.13-14; Chin. 8a20-22.
- (104) 723c18-724a2: [99] 經 說佛智慧故至濟度於衆生 贊曰下第四段有十八頌半頌第三依何等義中有二一頌半頌標一大事十七頌頌開示悟入此初也佛之智慧如前所說合有五種今此多說佛果二法菩提涅槃智性慧用合多智慧或唯眞智不取眞如佛出世者爲顯此一令生欣趣唯此一實究竟極果勝妙無上餘之二乘體非眞極究竟勝妙故經下文以前五度校量此經不說般若故終不以小乘濟生或此一事多說智性涅槃經中師子吼說佛性即空空即智慧由此智性亦名智慧今此多取初解爲正二乘無故既言餘二則非是眞故知不是破三會三以歸於一
- (105) [88] Skt. 47.1-2; Tib. 47.1-2; Chin. 8a23-24.
- (106) 724a3-14: [100] 經 佛自住大乘至以此度衆生 贊曰下十七頌頌開示悟入中分四一頌開五頌悟一頌入十頌示此初也大乘合取眞理正智假者佛身恒安處此涅槃菩提名住住即依止安處之義所得唯是法身眞理或大乘者唯取眞理正智證會名之爲住以此法身萬德具足眞德性故故佛報身如其所證法身眞理還以無量定慧莊嚴定即福也慧即智也攝持一切有爲德盡內冥眞理涅槃已滿眞智遂生具福慧嚴菩提復滿自德既圓故以二法開於衆生名之爲度顯二體性是無上故令生欣樂
- (107) [89] Skt. 47.3-4; Tib. 47.3-4; Chin. 8a25-27.
- (108) 724a15-25: [101] 經 自證無上道至此事爲不可 贊曰下有五頌悟中有三一頌半顯平等二頌半顯勝德一頌令悟此初也無上道者正智勝故無上大乘者眞理勝故一無上言貫通二處二皆平等無能所取無有自他物我異故又大乘者即無上道運用勝故佛既證此平等理智何有自他物我二別內智若不平等等自取大乘外智不平等令他取小則墮恆法貪求名利惑既未盡何名證得正覺大乘廣運一切此爲不可
- (109) [90] Skt. 47.5-6; Tib. 47.5-6; Chin. 8a28-b1.
- (110) 724a26-b11: [102] 經 若人信歸佛至而獨無所畏 贊曰下二頌半顯勝德有二初一頌半顯內離染無所畏德後一頌顯外莊嚴說實法德此初也若人信佛初發心也歸佛者

後脩正行如來不爲欺陵輕賤而不授大純化以小亦不誑逗初許與大後不與之所以者何以佛亦無貪惜大乘誑而不與亦無嫉妬畏彼證大而欺網之由斷一切法中惡故惡者煩惱業苦生死惡法已永斷故既無如上所說諸事正智圓滿故於十方都無所畏作師子吼我是一切智者一切見者平等化者若有上事惡既未盡智果未圓如何於十方能作無畏吼故俗中云父聞子健恨不殺身自外何憐故無貪嫉

(111) [91] Skt. 47.7-8; Tib. 47.7-8; Chin. 8b2-3.

(112) 724b12-19: 【103】經 我以相莊嚴身至爲說實相印 贊曰顯外莊嚴說實法德形骸相好端嚴其身身光智光復能朗照器及衆生二種世間由此衆人皆尊敬我名世間解若內有染外無此相外現此相明內無染故我今者說實相印實相印者謂即二空大乘之理以此理印印大教故大教決定勝實非權如小乘中說三法印印定教法

(113) [92] Skt. 47.9-10; Tib. 47.9-10; Chin. 8b4-5.

(114) 724b20-23: 【104】經 舍利弗當知至如我等無異 贊曰此一頌令悟汝應如我悟先所不知大乘眞智我昔立誓願令一切衆生與我無異願令悟故願以信欲勝解爲性

(115) [93] Skt. 47.11-48.4; Tib. 47.11-48.4; Chin. 8b6-14.

漢文はこのセクションを4つに分けて(8b6-7, 8-9, 10-11, 12-14)注釈を行っているが、チベット語訳は1つにまとめている([93] = 【105・106・107・108】)。

(116) 724b24-27: 【105】經 如我昔所願至皆令入佛道 贊曰此一頌令入今者果滿遂昔願心故化衆生入於佛道道者因義令入八地或初地上不退轉位佛之因故

(117) 724b28-c7: 【106】經 若我遇衆生至迷惑不受教 贊曰下有十頌顯示有二初八頌示初不同後二頌示後還同初中復三一頌示不同意六頌示不同相一頌結不同此初也若教衆生盡以大乘智者可爾無智愚人錯學亂行心迷不信疑惑誹謗便返增惡不能領受亦如覆杯水於坳塘致杯即膠故由此返增愚人之咎故不純以大乘教化

(118) 724c8-18: 【107】經 我知此衆生至癡愛故生惱 贊曰下有六頌示不同相中分二初二頌標無善有惡故不同後五頌釋有惡無善故不同此初也未曾脩善本即是出世方便善根無始雖起多分暗劣唯生得善無漏因由著五境堅執不捨以此爲緣癡便發業愛便潤生故諸生生死老死支一切苦惱苦樹增長由無出世方便善本有癡愛二以爲其因著五欲境不肯捨故發業無明多由迷內發潤生貪愛多緣五欲生今據欲界無明發業通言著欲說重處故

(119) 724c19-725b6: 【108】經 以諸欲因緣至世世常增長 贊曰下五頌釋有惡無善故不同中有二初四頌有惡故不同後一頌無善故不同初中復二初二頌半由處俗塵五欲沈沒故不同後二頌半求邪出離錯行亂學故不同此初由諸欲故純起不善業墜墮惡趣由雜業故輪迴六趣備受諸苦四生生長皆有業故三苦八苦五苦迫故偏指一生現苦爲論故言受胎之微形世世常增長微者劣也胎謂胎藏不淨纏裹可厭可惡微劣生故瑜伽論說初受生者本居中有中有極長七日命終極多不過七七日住造惡業者中有如黑闇光或陰暗夜造善業者如白衣光或晴明夜隨當生相所住無礙見已同類及當生處造惡業

者眼視不淨伏面行往天趣者向上仰面往人趣者傍面而行若造不律儀生地獄中見昔同類喜樂馳趣遂被拘礙純苦鬼界傍生亦爾若餘雜業隨業善惡何處生長於其父母隨男隨女生憂生喜以潤當生攬父母之遺體迷醉之時便被拘礙一七日內名羯刺藍此云雜穢父母不淨共和名雜深可厭惡名穢若已結凝箭內稀故二七日內名頰部曇此云疱猶如芋豆瘡疱之形表裏如酪未至肉故三七日內名閉尸此云凝結猶如就血稍凝結故西域呼就血云閉尸若已成肉仍極柔軟四七日內名健南此云凝厚漸凝厚故若已堅厚稍堪摩觸五七日內名鉢羅除佉此云形位猶如泥團分相連一身四支內風向外擊生根形差別相故即前肉團增長支分相現六七日內名髮毛爪位髮毛生故七七日內名具根位五根圓滿明盛顯故至此初復方釣三月種種成就若不增減如是合經三十八七日在腹圓滿更經四日頭趣向下雙足向上胎衣遂裂遍趣產門種種衆苦于時迫近或由先業母食灰鹽子髮毛稀少或由先業母食煖熱子黑黯色或赤色生或由先業母食冷食或近寒室子多頑白母習姪欲子多疥癩癰病等生母多跳躑威儀不愍子支缺減繚戾不安男居右脇倚腹向脊女居左脇倚脊向腹隨於父母生愛染故初既攬父母不淨以爲身後以母之不淨以資長現緣既爾故業不善百惡所感三十六物不淨爲體如是惡身不可愛樂輪轉不窮名世世增長

- (120) [94] Skt. 48.4-8; Tib. 48.4-8; Chin. 8b15-21.

漢文はこのセクションを2つに分けて(8b15-19, 20-21)注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている([94] = [109・110])。

- (121) 漢文は1偈半である。

- (122) 725b7-c15: 【109】經 薄德少福人至諂曲心不實 贊曰此二頌半求邪出離錯行亂學故不同初一頌半明起身邊邪見成六十二見後之一頌因起見戒取所餘惑生或初一頌總明起五見後一頌半別明起五見彼諸衆生無始已來薄德少福故爲苦所迫雖祈出要不悟邪正錯入外道不正見中錯行錯學名爲邪見五見皆邪此依後科非要撥無方名邪見邪見煩惱拘礙衆生難可出離不能解脫名爲稠林此爲總見後分別顯若有若無等者此有二解依後科者五見之中四見爲有皆執有故邪見爲無多撥無故等言顯示種種煩惱若依初科邪見稠林者撥無邪見若有者執我後身爲有常見也若無者執我後身爲無斷見也此二爲邊見等取身見見取戒取由六十二見以邪見邊見二爲自體故別舉之以餘二見而爲眷屬依於身見以爲根本如六十二見章廣述云何六十二見頌曰二四八十劫見生死遍常梵餘大種心戲憤恚一分有色有邊等各死生想地一種小無量純樂等有想即有色邊等生無想俱非人欲天色界四無色斷滅 從無想天沒 尋伺計無因憶上下傍俱壞劫有邊等怖無知行諂 懷怖顛矯亂人欲天欲樂四靜慮涅槃 此諸見中幾前際過去攝幾後際未來攝幾現在通二際中攝遍一分無因邊矯亂前際所餘四十四皆後際見攝此六十二經論俱言邪見邊見二見所攝誰幾見攝遍一分各四有想成十六俱非各八七斷皆邊見即彼二無因邊邪亂各四五現涅槃論皆邪見所攝由執我起我見已便起如是六十二見後起見取執見等法爲勝爲因又起戒取執戒等法爲因爲勝著此妄

法曾不肯捨我慢自恃矜誇自高而陵蔑他互於所師諂曲相讚矯求名利心何曾實以具如是耽欲著邪故不堪任即化大法

- (123) 725c16-22: 【110】經 於千萬億劫至如是人難度 贊曰此一頌無善故不同善人皆修四親近行一親近善友二聽聞正法三如理思惟四如說修行此等惡人千萬億劫不聞佛名何得親近一切善友既不見佛亦不聞法既無聞慧入法初因思惟脩習理不可得故如是人甚爲難度如何初首即教大乘
- (124) [95] Skt. 48.9-10; Tib. 48.9-10; Chin. 8b22-27.
漢文はこのセクションを2つに分けて（8b22-23, 24-27）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も1つにまとめている（[95] = 【111・112】）。
- (125) 725c23-25: 【111】經 是故舍利弗至示之以涅槃 贊曰此結不同由如此故爲設方便初示涅槃且令苦息
725c26-726a4: 【112】經 我雖說涅槃至開示三乘法 贊曰上顯初不同此二頌示後令同勸捨解脫身取佛法身所說二乘涅槃猶如化城是非眞滅法從無始性常寂故即是自性清淨涅槃性離言法非今新有如寶所者乃是眞滅眞滅既爾故行道已來世證此法本性滅得成佛道我本智慧巧用方便初開二權後示一實總名開示三乘之法
- (126) [96] Skt. 48.11-49.2; Tib. 48.11-49.2; Chin. 8b28-c1.
- (127) 726a14-18: 【113】經 一切諸世尊至唯一無二乘 贊曰下第五段七十頌半頌第五依法有三初一頌半頌十方佛法次三十八頌半頌三世佛法後三十頌半頌我亦如是此初也既唯一無二乘云何破三以歸一
- (128) [97] Skt. 49.3-4; Tib. 49.3-4; Chin. 8c2-3.
- (129) 続く区分の27偈半と6偈と4偈をたすと37偈半にしかない。漢文では、後の2つが6偈半と4偈半であり、チベット語訳の偈の数え方に混乱が生じている。
- (130) 726a19-25: 【114】經 過去無數劫至其數不可量 贊曰下三十八頌半頌三世中分三初二十七頌半頌過去次六頌半頌未來後四頌半頌現在初中有二初四頌半頌佛說法初權後實後二十三頌頌衆生聞法皆究竟得一切種智初中有四一頌佛多一頌開權一頌顯實一頌半釋開權顯實之意此初也
- (131) [98] Skt. 49.5-6; Tib. 49.5-6; Chin. 8c4-5.
- (132) 726a26-27: 【115】經 如是諸世尊至演說諸法相 贊曰明初開權
- (133) [99] Skt. 49.7-8; Tib. 49.7-8; Chin. 8c6-7.
- (134) 726a28-29: 【116】經 是諸世尊等至令入於佛道 贊曰明後顯實
- (135) [100] Skt. 49.9-10; Tib. 49.9-10; Chin. 8c8-10.
- (136) 726b1-b10: 【117】經 又諸大聖主至助顯第一義 贊曰釋開權顯實之義知諸衆生未能頓學一乘教故識其根欲故初以權方便助顯一乘後令入實又菩薩根性有二一不定性二定性爲不定性初權後實顯暢一乘前二頌是爲定性者說頓教一乘此文是也謂知

衆生心性頓欲故以異方便不從權取實顯助一乘一乘者第一義諦眞如等是初三後一
是權實之方便頓說一乘故名異方便

(137) [101] Skt. 49.11-14; Tib. 49.11-14; Chin. 8c11-14.

(138) 726b11-16: 【118】經 若有衆生類至皆已成佛道 贊曰下二十三頌頌衆生聞法究竟
皆得一切種智爲三初二頌佛在次二十頌滅後後一頌結此初也逢佛聞法修行六度四
攝無量等名種種福德修佛之因菩薩行故皆已成道

(139) [102] Skt. 50.1-2; Tib. 50.1-2; Chin. 8c15-16.

(140) チベット語訳は、最初に「1偈により菩薩が説かれている」を加えているが、
見出しの「5種」と偈頌の総数「20」と合わなくなるので、削除する。

(141) ここと続く2箇所の「善」は、チベット文は「忍、(bzod)」であるが、漢文の
「善」に対するチベット語の“bzang”が誤記されたのであろう。

(142) 726b17-25: 【119】經 諸佛滅度已至皆已成佛道 贊曰下二十頌頌佛滅後分五一頌
慈心四頌半造塔六頌半造像七頌供養一頌稱佛此初也有善剛強非菩薩心柔軟非善
亦非菩薩要善而更方菩薩心順理益物極柔和故已成佛道植佛因故後文且據佛滅之
行後難作故是別行故非是佛在作此諸行而非佛因在易修故准上六度佛滅後行是總
行故亦成佛道

(143) [103] Skt. 50.3-6; Tib. 50.3-6; Chin. 8c17-20.

(144) 726b26-c13: 【120】經 諸佛滅度已至莊校於諸塔 贊曰下四頌半造塔成佛分二初
四頌明造塔後半頌結初文有三初二頌造塔數多八珍嚴整次一頌九物爲塔後一頌下
至戲笑劣物爲塔此初也佛地論數七寶無玫瑰仍琉璃與珠別珠謂赤眞珠今此若以琉
璃爲珠即爲七寶不爾故八琉璃與珠別故頗梨多白紅色車渠青白間色馬腦有多色或
純白或純青黃或衆色間玫瑰赤色說文火齊珠也一曰石之美好曰玫圓好曰瑰餘者可
知增一阿含經中佛告諸比丘我今當說四梵之福一若有信心善男子等未曾起塔處能
起於塔二補持故寺三和合聖衆四佛初成道諸天人等請轉法輪是名四梵之福比丘白
佛梵福多少佛言四天下及六欲天所有福德猶不如一梵王之福故勸造塔當得菩提

(145) [104] Skt. 50.7-9; Tib. 50.7-9; Chin. 8c21-22.

(146) 726c14-20: 【121】經 或有起石廟至磚瓦泥土等 贊曰此一頌九物爲塔石廟者石佛
堂古云支提今云制多翻爲靈廟應作廟宇廟貌也白虎通玉篇云先祖尊貌所在故謂之
廟木槨者字林香木切韻作檻玉篇作榱其樹似槐而香極大伐之五年始用若取其香皆
預研久乃香出

(147) [105] Skt. 50.10-12; Tib. 50.10-12; Chin. 8c23-25.

(148) 726c21-27: 【122】經 若於曠野中至皆已成佛道 贊曰初一頌下至戲笑劣物爲塔後
半頌結之論云聚沙爲佛塔已成佛道者謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非
諸凡夫及決定種姓聲聞未發菩提心者之所能得故如是乃至上文及下小低頭等亦如
是

- (149) [106] Skt. 50.13-14; Tib. 50.13-14; Chin. 8c26-27.
- (150) 726c28-727a12: 【123】 經 若人爲佛故至皆已成佛道 贊曰下六頌半明造像中有二初五頌造後一頌半結初中分四一頌刻彫二頌十物嚴飾一頌綵畫一頌戲作此初也明作佛像非作餘像故言爲佛爲求作佛爲思敬佛故名爲佛又說爲佛而作諸像爲莊嚴佛故名爲佛造像功德經說造像得十一種果一世世所生眼目淨潔面目端正二生處無惡三常生貴家四身體姝好紫磨金色五常豐珍翫六生賢善家七後生爲王王中最勝八金輪化王九後生梵天壽命一劫十不隨惡道十一後生之中還重三寶喜持妙物復造功德一之梵福多四天下大海十倍
- (151) [107] Skt. 50.15-51.2; Tib. 50.15-51.2; Chin. 8c28-9a2.
- (152) 727a13-15: 【124】 經 或以七寶成至皆已成佛道 贊曰此二頌十物嚴飾作像切韻鈐即錫也有云錫銀・鈐之間玉篇青金也
- (153) [108] Skt. 51.3-4; Tib. 51.3-4; Chin. 9a3-4.
- (154) 727a16-17: 【125】 經 綵畫作佛像至皆已成佛道 贊曰此頌畫佛
- (155) [109] Skt. 51.5-6; Tib. 51.5-6; Chin. 9a5-6.
- (156) 727a18-19: 【126】 經 乃至童子戲至而畫作佛像 贊曰此頌戲作
- (157) [110] Skt. 51.7-8; Tib. 51.7-8; Chin. 9a7-9.
- (158) 727a20-22: 【127】 經 如是諸人等至度脫無量衆 贊曰此結也具足大悲心者凡所作善必帶悲心方成到彼岸故成佛道
- (159) [111] Skt. 51.9-10; Tib. 51.9-10; Chin. 9a10-11.
- (160) 漢文は、「一頌華供養一頌身業行敬供養」とあり、身業の供養と花の供養の順序が逆である。
- (161) 727a23-b2: 【128】 經 若人於塔廟至敬心而供養 贊曰下有七頌明供養有二初五頌半明供養後一頌半結成初中有五一一頌四物供養一頌半音樂供養一頌歌唄供養一頌華供養一頌身業行敬供養此初也發菩提心經云若以華施得七覺華故以香施得五分法身香故以幡施得陀羅尼轉衆惡故以蓋施獲四無量覆衆生故業報差別經說各得十德
- (162) [112] Skt. 51.11-52.1; Tib. 51.11-52.2; Chin. 9a12-14.
- (163) 727b3-18: 【129】 經 若使人作樂至盡持以供養 贊曰此以音樂供養樂音五覺反以生樂故亦慮各反黃帝世伶倫作樂說文五聲八音之總名禮記干戚羽毛謂之樂鄭玄云八音克諧謂之樂鼓動也鳴也凡出音曰鼓今木有皮動之即鳴角者曲形而似角貝者螺也涅槃經吹貝知時簫管也玉篇編小管所吹又簫也笛七孔簫俗名直玉篇五孔竹笛羌笛三孔琴禁也君子守正自禁神農所作箜篌琵琶相可知矣鏡如鈴而大玉篇小鉦也軍法十長執鉦五人爲伍五伍二十五人爲兩兩司馬執鐸銅拔兩扇相擊出聲有作鉦無所從或爲跋字發菩提心經云音樂女色不以施人亂衆生故此供養佛故不相違如金藏中音樂供養事

- (164) [113] Skt. 52.2-3; Tib. 52.1-3; Chin. 9a15-16.
- (165) 727b19-24: 【130】 經 或以歡喜心至皆已成佛道 贊曰此以歌唄供養當得大士梵音
聲故梵云婆陟此言讚歎唄匿訛也陳思登漁山間巖岫誦經清婉適遠谷流響遂擬其
聲而製梵唄故今俗中謂之漁梵冥合西域三契七聲聞俱胝耳等所作也
- (166) [114] Skt. 52.4-6; Tib. 52.4-6; Chin. 9a17-18.
- (167) 727b25-28: 經 若人散亂心至漸見無數佛 贊曰此以華供養與前四事中華施何別彼
專善心此以散心故不相違略言供養畫像供養餘像亦得
- (168) [115] Skt. 52.7-8; Tib. 52.7-8; Chin. 9a19-23.
漢文はこのセクションを2つに分けて（9a19-20, 21-23）注釈を行っているが、
チベット語訳は引用文も1つにまとめている（[115] = 【131・132】）。
- (169) 727b29-c3: 【131】 經 或有人禮拜至或復小低頭 贊曰此明身業行敬供養上歌唄是
語業也其能發心即是意業自餘皆是外財供養三業行供養
727c4-5: 【132】 經 以此供養像至如薪盡火滅 贊曰結成供養
- (170) [116] Skt. 52.9-10; Tib. 52.9-10; Chin. 9a24-25.
- (171) 727c6-9: 【133】 經 若人散亂心至皆已成佛道 贊曰此稱佛作佛且舉一稱尚得作佛
何況多稱如藥王藥上經云我常稱五十三佛名故今得作佛即其事也
- (172) [117] Skt. 52.11-12; Tib. 52.11-12; Chin. 9a26-27.
- (173) 727c10-11: 【134】 經 於諸過去佛至皆已成佛道 贊曰頌衆生聞法得種智中此爲第
三結成佛道
- (174) [118] Skt. 52.13-14; Tib. 52.13-14; Chin. 9a28-29.
- (175) チベット語訳は「2」とあるが、漢文とチベット語訳の内容から「3」とし
た。
- (176) 727c12-16: 【135】 經 未來諸世尊至亦方便說法 贊曰下六頌半頌未來法中分二初
三頌半標同今說實後三頌重釋前義初中有三一頌標同初方便一頌半標後成說實一
頌釋前所由此初也
- (177) [119] Skt. 53.1-3; Tib. 53.1-53.3; Chin. 9b1-3.
- (178) 727c17-19: 【136】 經 一切諸如來至無一不成佛 贊曰此頌標後成說實令聞法者皆
得作佛及衆生二俱合說
- (179) [120] Skt. 53.4; Tib. 53.4; Chin. 9b4-5.
- (180) 727c20-21: 【137】 經 諸佛本誓願至亦同得此道 贊曰釋前所由由本願故
- (181) [121] Skt. 53.5-6; Tib. 53.5-6; Chin. 9b6-7.
- (182) 727c22-25: 【138】 經 未來世諸佛至其實爲一乘 贊曰下三頌重釋前義有二初一頌
明初方便皆爲一乘後二頌明悟三性諸法歸趣所以如此此初也
- (183) [122] Skt. 53.7-10; Tib. 53.7-10; Chin. 9b8-11.
- (184) 727c26-728a29: 【139】 經 諸佛兩足尊至導師方便說 贊曰明悟三性諸法歸趣所以

初權後説一乘眞如妙理體性常住佛能證知遍計所執生法二我體性は無佛證無我理故亦知此無是凡虛妄執佛種從緣起者無漏依他報佛種子因緣所生從緣所起因脩作故由證眞理斷能執心染分依他知所執無從於淨分依他因緣修佛種者爲一乘故何者一乘重顯常法即圓成實法住法位者眞如住在諸法之中體性常有名爲法住法有染淨離染得淨分位顯之故名法位相者體性世間本體即是常住眞如實性一乘體也於金剛座道場之中知此諸法本體性已於無名相法中導師方便以名相説一切法中略有二種一空二有空無差別總立一性名遍計所執有法有差別分之爲二一者常二者無常常者名圓成實性無常者爲依他起性依他起性復分爲二一有漏二無漏有漏爲依他起性無漏爲圓成實性今依前門無常爲依他依他有漏皆悉除斷就中但取無漏無常淨分依他究竟滿位成菩提故故言佛種從緣起也意顯能證常住法性眞如無我理故乃能了知二我爲無依於善友修習智慧從緣起法菩提覺滿爲證一乘眞如妙理妙理即是法住法位世間常住相大般涅槃於道場中既證知已今爲衆生方便説之令欣趣證今此依他即菩提圓成即涅槃合成一乘圓成勝故獨名一乘由斷有漏依他起性遣遍計所執證此二果由了依他所執性故初説阿含次説般若純有空教名爲方便今三俱説故名眞實三性之義如別章説

(185) [123] Skt. 53.11-12; Tib. 53.11-12; Chin. 9b12-14.

(186) 728b1-3: 【140】 經 天人所供養至亦説如是法 贊曰下有四頌半頌現在有三初一頌半標一頌開權顯實二頌顯意此初也

(187) [124] Skt. 53.13-14; Tib. 53.13-14; Chin. 9b15-16.

(188) 728b4-5: 【141】 經 知第一寂滅至其實爲一乘 贊曰此初開權後還顯實
ただし、經文の後半の「一乘」は、羅什訳では「仏乘」である。

(189) [125] Skt. 53.14-54.2; Tib. 53.15-54.2; Chin. 9b17-20.

(190) 728b6-15: 【142】 經 知衆生諸行至隨應方便説 贊曰此顯初權後實之意衆生諸行者總句心行相也下是別句或勝解也心所念者遍趣行也業力者自業也欲力謂勝解也性力謂種種界也精進力者謂處非處等或精進等體即性力以種性體即五根故下一力字貫通上也根利鈍者根勝劣力也佛有此智力能知之故所以初權後還眞實前未來佛由悟三性此現在佛由衆生互相影顯故初方便後説眞實

(191) [126] Skt. 54.3-6; Tib. 54.3-6; Chin. 9b21-24.

(192) 728b16-19: 【143】 經 今我亦如是至皆令得歡喜 贊曰下三十頌半頌我亦如是釋迦同中分二初二頌標後二十八頌半廣釋此初也初頌今實後頌昔權皆令歡喜漸入道故

(193) [127] Skt. 54.7-9; Tib. 54.7-9; Chin. 9b25-29.

漢文はこのセクションを2つに分けて (9b25-26, 27-29) 注釈を行っているが、チベット語訳は1つにまとめている ([127] = 【144・145】)。

(194) 728b20-729a1: 【144】 經 舍利弗當知至貧窮無福慧 贊曰下廣釋分二初二十一頌半頌初以三乘方便誘引即長行云知諸衆生有種種欲深心所著隨其本性以種種因緣

譬喩言辭方便力而爲說法後有七頌頌今說眞實即長行云如此皆爲得一佛乘一切種智故即頌初權後實之義就初文分四初三頌半見生處危難次三頌思救不可得次十一頌半請念設權方後三頌半正說三乘化初中有二一頌無善二頌半有惡此初也般若經說佛有五眼一肉眼非脩定生四大所造或長養或異熟淨色爲性二天眼斷於定障修習所起唯是長養四大所造淨色爲性三法眼觀事有慧四慧眼觀空理慧五佛眼因積而果圓攬前四爲體龍樹解云如四大河流至天池通名大海如是四眼流至佛果通爲佛眼初二體色次二體智後一通二又言人等有肉眼天等有天眼二乘有慧眼菩薩有法眼佛有佛眼由此說五瑜伽十四說有三眼一肉眼能照顯露無障礙色二天眼能照隱顯有無障色三慧眼能照一切種若色非色法眼體慧合慧爲一不同色眼境有隱顯故略不論佛眼即前四眼或談因因果故亦不說華嚴經說十眼一肉眼見一切色二天眼見死此生彼三慧眼見諸衆生諸根差別四法眼見一切法第一義五佛眼見佛十力六智眼分別了知一切種法七光明眼見一切佛光明八出生死眼見涅槃法九無礙眼見一切法無有障礙十普眼謂見法界平等法門十中第一是五中第一見諸色故此中第二是前第二此中第三第五第六第七第九五眼是前法眼此第四第八是前慧眼見眞諦故或第四第八第九三眼是前慧眼俱見理故第十普眼是前佛眼普見法界平等性故以佛眼觀者以五眼中佛眼觀也十中佛眼不見衆生見十力故六道衆生無始不修福智二因未獲七種聖財及人天七法財謂施戒忍勤定慧方便故無福及慧

- (195) 729a2-12: 【145】經 入生死險道至盲瞋無所見 贊曰下二頌半有惡爲二初一頌半現苦沈溺煩惱增多後一頌設求出要而行邪行此初也世間犛牛由自愛尾藏身護尾人貪其尾遂殺其身衆生亦爾貪著五欲以自藏身遂以貪愛而自弊敗反自弊因墜墮惡道有本云自蔽蔽掩障也如犛牛愛尾以弊其心遂致喪命衆生亦爾貪愛蔽心犛牛說文西南夷長髯牛也有作猫字人間捕鼠者非此中義有作猫犛不知所從

- (196) [128] Skt. 54.10-12; Tib. 54.10-12; Chin. 9c1-3.

漢文はこのセクションを2つに分けて（9c1-2, 3）注釈を行っているが、チベット語訳は1つにまとめている（[128] = 【146・147】）。

- (197) 729a13-19: 【146】經 不求大勢佛至以苦欲捨苦 贊曰設求出要而行邪行佛有神通威勢及以智慧斷苦之法而不求趣翻墮外道邪見網中行諸身苦行以捨生死苦此爲未可所以六年麻麥尚不證於菩提坐臥荊棘何容得於道果如狗逐塊塿打轉多豈同師子逐人非塊

- (198) 729a20-24: 【147】經 爲是衆生故而起大悲心 贊曰下三頌思救不可得爲三初半頌思起因行一頌得果已思一頌半思救不可得此初也見諸衆生有此二緣遂起悲心發心修行思惟將救

- (199) [129] Skt. 54.13-54.1; Tib. 54.13-55.1; Chin. 9c4-5.

- (200) 729a25-b10: 【148】經 我始坐道場至思惟如是事 贊曰得果已思佛成道已樹下經行觀樹喜自道園經行思惟利物又觀樹心凝妙理經行想化群生又觀樹心愆四生經行

思施福慧諸經說佛成道已後說法時節各不同此云三七日彌沙塞律三昧七日與十地經同七日不說法顯示自受法樂故爲令衆生增愛敬故律及薩婆多傳過六七四十二日方說法梵天來請僑陳如等根方熟故又有說云夏安居後方度五人十二由經成道後二年方度五人智度論說五十箇七日不說法此皆諸部宜見不同未可和會然今解者大乘以法華爲正此說通行四諦法輪故三七日若唯說大乘法輪十地爲正第二七日說十地故

- (201) [130] Skt. 55.2; Tib. 55.2; Chin. 9c6-8.
- (202) 729b11-14: 【149】經 我所得智慧至云何而可度 贊曰思救不可得有四因故一法深難解二根鈍難救三著樂難捨四癡盲難悟云何可度
- (203) [131] Skt. 55.3-5; Tib. 55.3-5; Chin. 9c9-12.
- (204) 729b15-26: 【150】經 爾時諸梵王至請我轉法輪 贊曰下十一頌半請念設權方中分四初二頌諸天請說次三頌示相思惟次四頌半化遇良緣後二頌念隨權誘此初也大自在天色界天也今對三乘法爾說法皆待請故智度論云淨居天勸出家四天王獻鉢帝釋獻寶座梵王請轉法輪佛初不許梵王說有三根重請慫慂佛方許之初說三乘勝天王般若云四天王等獻鉢天帝釋獻座佛爲受之各見獨爲受之皆發勝心然大通智勝唯梵王請此說通諸天者彼舉勝類非無餘天請彼佛也
- (205) [132] Skt. 55.5-8; Tib. 55.5-8; Chin. 9c13-16.
- (206) 729b27-c6: 【151】經 我即自思惟至疾入於涅槃 贊曰下三頌示相思惟有二初二頌即說大乘衆生有損後一頌且說三乘衆生有益此初也以諸衆生處俗現在苦中出家妄行苦行無暇頓能信大乘法若爲說者返生誹謗疑惑破壞壞生不信却墮惡道又在俗者沒苦故不信外道出家者破法故不信既有此損寧不說法疾入涅槃何得翻損諸衆生也即同智論初不許也
- (207) [133] Skt. 55.9-10; Tib. 55.9-10; Chin. 9c17-18.
- (208) 729c7-9: 【152】經 尋念過去佛至亦應說三乘 贊曰且說三乘衆生有益同諸佛故此同智論重請方許
- (209) [134] Skt. 55.11-14; Tib. 55.11-14; Chin. 9c19-22.
- (210) 729c10-16: 【153】經 作是思惟時至而用方便力 贊曰下有四頌半化遇良緣有三初一頌半佛現讚揚次半頌勸同諸佛後二頌半引己爲證後實初權此初二也十方佛現歎佛稱善讚第一師得無上法勸隨諸佛後實初權釋迦能姓牟尼寂號今略言文如音訓說法爾隨喜皆云善哉
- (211) [135] Skt. 56.1; Tib. 56.1; Chin. 9c23-24.
- (212) 729c17-20: 【154】經 我等亦皆得至分別說三乘 贊曰下二頌半引己爲證後實初權中有三初一頌引己爲證次一頌釋此所由後半頌結歸真實此初也引己初時說三乘也
- (213) [136] Skt. 56.2-4; Tib. 56.2-4; Chin. 9c25-27.
- (214) 729c21-24: 【155】經 少智樂小法至但爲教菩薩 贊曰此釋所由及結歸真實以不定

- 人創在凡夫小智樂小無欣大意不信自作佛故初說三乘雖復初權後必眞實但化菩薩
- (215) [137] Skt. 56.5-6; Tib. 56.5-6; Chin. 9c28-29.
- (216) 729c25-730a1: 【156】經 舍利弗當知至喜稱南無佛 贊曰二頌念隨權誘分二初頌
聞之敬讚後頌思順彼行此初也有本云稱南無諸佛應從喜稱為正正言納慕亦言納莫
此云敬禮若言伴談或言伴題此云禮拜舊云和南訛略也
- (217) [138] Skt. 56.7-8; Tib. 56.7-8; Chin. 10a1-2.
- (218) 730a2-4: 【157】經 復作如是念至我亦隨順行 贊曰思順彼行也既遇良緣勸我權化
思生濁劫應順彼行
- (219) [139] Skt. 56.9-10; Tib. 56.9-10; Chin. 10a3-5.
- (220) 730a5-c23: 【158】經 思惟是事已至爲五比丘說 贊曰下三頌半正說三乘化分三初
一頌半正起權化次一頌三寶遂興後一頌會成今古此初也梵云婆羅痾斯云波羅奈訛
也中印度境往昔此地有兩群鹿各五百餘佛爲一群鹿王提婆達多復爲一王時此國王
耽遊原澤菩薩鹿王前請王曰大王狩獵中原縱獵飛矢凡我徒屬命盡斯晨即日腐臭無
所充膳願欲次差日輪一鹿王有割鮮之膳我延旦夕之命王善其言迴駕而返兩群之鹿
更次輪命提婆群中有懷孕鹿次當就死白其王曰身雖應死子未次也願暫差替誕訖當
往鹿王怒曰誰不寶命雌鹿歎曰吾王不仁死無日矣乃急告菩薩菩薩鹿王曰悲哉慈母
之心恩及未形吾今代汝遂至王門道路之人傳聲唱曰彼大鹿王今來入邑都人士庶莫
不馳觀王之聞也也以爲不誠門者白王王乃信然王曰鹿王何遽來耶鹿王曰有雌鹿當死
胎子未產心不能忍敢以身代王聞歎曰我人身鹿也無慈育之心爾鹿身人也有代命之
德於是悉放諸鹿不復輪命即以其林爲諸鹿藪因而謂之施鹿林焉鹿野之號自此而興
初薩竭喝刺他悉陀唐言一切義成古曰悉達多訛略也太子踰城之後棲山隱谷亡身殉
法淨飯王乃命家族三人舅氏二人曰我子一切義成捨家脩學孤遊山澤獨處林藪故命
爾曹隨知所止內則叔父伯舅外則君而且臣凡厥動靜宜知進止五人銜命相望衛衛因
即勸求欲期出離每相謂曰夫修道者苦證耶樂證耶二人曰安樂爲道三人曰勤苦爲道
二三交諍未有以明於是太子思惟至理爲伏苦行外道即麻麥以支身彼二人者見而言
曰太子所行非眞實法夫道也者樂以證之今乃勤苦非吾徒也捨而遠遁思惟果證太子
六年苦行未證菩提欲驗苦行非眞受乳糜而證果斯三人者聞而歎曰功垂成焉今其退
矣六年苦行一旦捐功亦捨而去於是相從求訪二人既相見已匡坐高論更相議曰昔見
太子一切義成出王宮赴荒谷去珍服被鹿皮精勤勵志貞節苦心求深妙法期無上果今
乃受牧牛女乳糜敗道虧志吾知之矣無能爲也彼二人曰君何見之晚歟此猖蹶人耳夫
處乎深宮安享尊勝不能靜志遁迹山林棄轉輪王位爲鄙賤人行何可念哉言增慘切苦
薩浴尼連河坐菩提樹成正覺號天人師寂默宴然惟察應度思曰彼鬱頭藍子者證非
想定堪受我法空中諸天尋聲報曰鬱頭藍子命終已來經今七日如來歎惜斯何不遇垂
聞妙法遽從變化重更觀察有阿藍迦藍得無所有處定可授至理諸天又曰命終已經五
日如來再歎愍其薄祐又更諦觀誰應受教唯施鹿林有五人者可先誘導如來爾時起苦

提樹趣鹿野園威儀寂靜神光晃曜豪含玉彩身瑩金色安詳前進導彼五人斯之五人遙見如來互相謂曰一切義成彼來是歲月遽淹聖果不證心期已返故尋吾徒宜各默然勿起迎禮如來漸近威神動物五人忘制拜迎問訊侍從如儀如來漸誘示之妙理相傳解云言五人者一陳如二十力迦葉三頻輒有云即馬勝比丘四跋提五摩訶男拘利應勸婆沙何故唯五人有云迦葉佛時同學九人四人利根已前得道五人鈍根故今始悟願逢釋迦佛出成道故又經云釋迦過去作大魚身願先食我者先度五人先食故先度之又經云六人曾供養佛五人取稻華供養一人待熟五人初悟一人在後即須跋陀羅又即五夜叉食慈力王肉也五人中陳如得初果四人在四善根至夏初方得道西域記云夏安居畢方得道迹法寂滅相即是眞如不可言宣性離言故無名相法以名相說名方便趣波羅捺爲五人說

(221) [140] Skt. 56.11-12; Tib. 56.11-12; Chin. 10a6-7.

(222) 漢文は4人である。

(223) 730c24-733a16: 【159】經 是名轉法輪至法僧差別名 贊曰三寶遂興也此法輪義略以五門分別一出體二釋名三轉相四差別五三乘出體者俱舍論第二十四說所說沙門性亦名婆羅門亦名爲梵輪眞梵所轉故於中唯見道說名爲法輪由速等似輪或具輻等故即於此中依見道世尊有處說名法輪如世間輪有速等相見道似彼故名法輪謂見諦道速疾行故有取捨故降未伏故鎮已伏故上下轉故具此五相似世間輪故顯宗云如聖王輪取前捨後見道亦爾捨苦等境取集等故此意顯示見四諦理必不俱時如聖王輪降未伏故尊者妙音作如是說如世間輪有輻等故八聖道支似彼名輪謂正見正思惟正勤正念似世輪輻正語正業正命似轂正定似輞故名法輪寧知法輪唯是見道橋陳那等見道生時說名已轉正法輪故天親論主依經部宗破薩婆多言三轉行相非唯見道如何可說唯於見道立法輪名是故唯應即此三轉十二行相所有法門名爲法輪可應正理云何名轉由此法門往他相續令解義故或諸聖道皆名法輪於所化生身中轉故於他相續見道生時已至轉初故名已轉此有釋言初說見道名爲法輪非薩婆多正義雜心亦叙不正義云牟尼說見道速疾名法輪俱舍復言或諸聖道皆是法輪等此是薩婆多師本意故顯宗云毘婆沙師本意總說一切聖道皆名法輪以說三轉三道攝故於他相續見道生時已至轉初故名已轉非唯見道以八聖道支獨名法輪妙音所說非正義故成實論說初轉生聞慧第二轉生思慧第三轉生修慧亦無十二行相唯作一空行今者大乘總貫諸文法輪有五輪自性謂擇法覺支正見正智等瑜伽九十五云正見等法所成性故說名法輪自他三轉通見及脩無學道故諸聖慧眼能摧煩惱說名輪故俱舍亦言一切聖道名法輪故或體唯取八聖道支具轂輞輻圓滿義故正見正思惟說名爲轂是根本故正語業命說名爲輞因轂有故正念勤定說名爲輞攝錄餘故不同小乘此八聖道別脩行相雖在脩道體實通餘見無學道世尊應無八聖道故二法輪因謂能生後聖道諸教聞思脩等無量義經十七名中亦名法輪故諸經論中說佛教法名法輪故俱舍亦言此即三轉十二行相所有法門名法輪故瑜伽亦說三周十二行相名得所得之方便故前爲後因合爲果因故名爲

方便又云三周正轉見脩無學隨其次第智見現觀名為方便三輪眷屬謂諸聖道助伴五蘊**瑜伽**等說聖所愛戒及信等法助觀增明助道除惑非正斷故四法輪境謂四聖諦十二因緣三性等法**瑜伽**又說為得所得所緣境者謂四聖諦此經亦說大通智勝轉十二因緣解深密經說依顯了相說三無性皆依遍計所執已名法輪故五法輪果**瑜伽**又說為得所得者謂大菩提後文又說四沙門果所攝受聲聞菩提獨覺菩提若諸如來無上菩提是法輪果**瑜伽**又說三周十二行相名得所得之方便又云三周正轉見脩無學隨其次第智見現觀名得方便故菩提涅槃名所得果然此五體不過四種一教二理三行四果釋名者一名梵輪如來應供是梵增語彼所轉故亦名梵輪二名法輪法者可軌持義正見等法所成性故說名法輪輪有四義一圓滿義具轂輻輳或擇法覺等體用周備名之為輪二摧壞義此四種法若伏若斷若助若正未斷煩惱皆能摧故三鎮遏義已伏煩惱令勢遠故四不定義從自見至自脩從自脩至自無學從自無學智發言教他從言教解於諦理他從諦理起於正行他從正行起於果智如是展轉復為他說如轉輪王所有輪寶能降未伏諸煩惱故能鎮已伏諸煩惱故往復往故**瑜伽論**說當知世尊轉所解法置於阿若憍陳如身中此復隨轉置餘身中彼復隨轉置餘身中以是展轉隨轉義故說名為法輪即是輪持業釋也轉者動也顯也運也起也動宣言教顯揚妙理運聖道於聲前起真智於言後圓摧障惱名轉法輪所轉即法輪法輪之轉二釋皆得轉相者九十五說由五種相轉法輪者當知名為善轉法輪一者世尊為菩薩時為得所得所緣境界二者為得所得方便三者證得自所應得四者得已樹他相續令於自證深生信解五者令於他所證深生信解此意總說化身化相自證果時令聲聞等亦有所證不依菩薩報身成義或亦依實菩薩轉義總依始終究竟作論不依一會得成三轉所緣境者謂四聖諦依安立諦非安立諦依於三性皆此攝故得方便者謂即於此四聖諦中三周正轉十二相智此自三周轉法輪相為得無上菩提因故最初轉者謂昔菩薩入現觀時如實了知是苦聖諦廣說乃至是道聖諦於中所有現量聖智能斷見道所斷煩惱爾時說名真聖慧眼即此由依去來今世有差別故如其次第智明覺此說一智總名法眼有三行相名智明覺非於一諦別起四智由真見道唯一剎那不同小乘上下別觀依證滅說通三世非是滅諦通三世有第二轉者謂是有學以其妙慧如實通達我當於後猶有所作應當遍知未知苦諦應當永斷未斷集諦應當作證未證滅諦應當脩習未脩道諦如是亦有四種行相如前應知第三轉者謂是無學已得盡智無生智故言所應作我皆已作謂我已遍知未知苦諦乃至廣說我已脩習未脩道諦亦有四行類前應知此差別者謂前二轉四種行相是其有學真聖慧眼最後一種是其無學真聖慧眼觀此文意初轉之時見道以前加行智位雖知四諦但是轉因猶非正轉未摧壞故由此但名損利益能轉位所攝入見道中真無間道正名為轉正斷惑故其解脫道及相見道亦名初轉雖不斷惑斷癡重故鎮已伏故亦非別知四諦相故此後脩道未斷惑前所起行相應遍知等是正轉相正起真智乃至金剛心斷諸煩惱亦此轉攝起別行相但擬趣聖斷惑道故折伏正斷俱名轉故至其無學解脫道後起我已作所應作智後更不斷但鎮已伏無降未伏然見道前雖有伏道不與轉名非無漏故前無無漏故不同脩如是菩薩自為三轉初

轉在見道名印相轉次轉在脩道名應脩轉後轉在無學道名已作轉——轉時於——諦生四行相三轉堅論成十二相如是四諦合四十八不過十二以數等故總名三轉十二行相俱舍亦說眼智明覺別觀諦故彼以法忍法智類忍類智如次爲四若作此釋所作八諦觀於——諦便無四行相或忍智——皆具四行相照境分明者名眼對治無知名智對治無明名明對治邪覺名覺不同於此證得自所應得者謂得無上正等菩提謂即雙取菩提涅槃前爲後因前無間道爲解脫道因此說菩薩自三周轉法輪之果或說法身涅槃眞理名無上菩提起無學位菩提報身已作之智證法身故俱舍論等無佛自轉樹他相續令於自證生信解者謂如長老阿若憍陳如從世尊所聞正法已最初悟解四聖諦法又答問言我已解法從此已後如前所說究竟行相五皆證得阿羅漢果生解脫處此說世尊自得道故復爲於他三轉法輪同俱舍說三周循歷四聖諦故謂此是苦乃至此是道是名初轉謂此應遍知乃至此應脩習是第二轉此已遍知乃至此已脩習是第三轉如次顯示見道脩道無學道三此是佛爲他三轉者初名示相示四諦相故次名勸脩勸脩諦行故後名作證爲作證明知彼滿故由彼憍陳最初悟解入見道已佛問彼言汝已解耶彼答已解故得解名第二第三轉已遂得阿羅漢生解脫智處證得無爲果是名轉在他身於佛所證深生信解最後令他於他所證生信解者謂如長老阿若憍陳那起世間心我已解法如來知已起世間心阿若憍陳已證我法地神知已舉聲傳告經於刹那瞬息須臾其聲展轉乃至梵世世間心者緣事之心非要散心此前第四樹聖道於他五人身中令於佛自所證深生信解第五令他地神等知阿若憍陳所證深生信解差別者雖轉四諦法相不殊三乘之人各各證果聲聞姓人已於三生或六十劫先脩習已聞佛所說依蘊處界證四諦理名聲聞法輪獨覺姓人已於四生或於百劫先脩習已聞佛所說依十二緣起脩證四諦名獨覺法輪菩薩姓人已於一大阿僧祇劫先脩習已聞佛所說依三性等證四諦理名菩薩法輪不爾三乘俱觀四諦俱時證聖有何差別大般若云世尊初於波羅奈國轉四諦法輪時無量衆生發聲聞心證聲聞果無量衆生發獨覺心無量衆生發起無上正等覺心證於初地二地三地乃至一生當得菩提故知鹿野創轉三乘通行法輪若不爾者第二七日已說十地何故不名轉法輪也彼非三乘同所脩故不與初轉法輪之名然實他身三時智起亦有經生而證聖果名三轉者其解憍陳等佛於鹿苑一時之間令其次第得此三果名爲三轉無垢稱經云三轉法輪於大千其輪能寂本性寂希有法智天人證三寶於是現世間即此經言便有涅槃言音出現及阿羅漢法之與僧三寶現也佛爲佛寶涅槃及言果法教法名爲法寶阿若多等名之爲僧阿羅漢者即是陳如復言僧者餘之四人住有學故能證智所證諦即行理法寶四法已周並佛及僧能化所化既有體出合名三寶出現世間三乘者佛及菩薩並以聲聞說法令他得智斷惑可名轉法輪獨覺不爾涅槃經言緣覺說法不能令人得燭等法由聲聞等不識藥病不與聲聞轉法輪名理亦何爽

(224) [141] Skt. 56.13-14; Tib. 56.13-14; Chin. 10a8-9.

(225) 733a17-19: [160] 經 從久遠劫來至或常如是說 贊曰結會今古非但今日方讚涅槃永盡衆苦久來說故古今

- (226) [142] Skt. 57.1-4; Tib. 57.1-4; Chin. 10a10-13.
- (227) 733a20-26: 【161】經 舍利弗當知至方便所說法 贊曰下有七頌今說真實頌如是皆爲得一切種智中分四初二頌根熟來逢一頌念之應度三頌正說真實一頌結成法儀此初也我見先以權教度者曾於佛所已聞權教善根熟故今來逢我故上文云是會衆生曾見諸佛亦曾見釋迦今總言諸佛
- (228) [143] Skt. 57.5-6; Tib. 57.5-6; Chin. 10a14-15.
- (229) 733a27-29: 【162】經 我即作是念至今正是其時 贊曰念之應度爲說佛慧令生脩學今根已熟何得不教
- (230) [144] Skt. 57.7-8; Tib. 57.7-8; Chin. 10a16-17.
- (231) 733b1-11: 【163】經 舍利弗當知至不能信是法 贊曰下三頌正說真實分二初一頌明鈍不堪授後二頌明利則堪授此初也有五過失不堪受大一鈍根聞法不解或阿顛底迦二小智雖復聰明情見不廣或趣寂者三者著相謂起計執空有二相錯學亂行或不定種姓執有非空根未熟故四憍者恃已盛事諸富貴者醉逸縱任或根未熟有性凡夫稟性醉逸五慢者恃已陵他五千之輩或復具起七種慢等諸煩惱者不能信大不應授與
- (232) [145] Skt. 57.9-126; Tib. 57.9-12; Chin. 10a18-21.
- (233) 733b12-c3: 【164】經 今我喜無畏至悉亦當作佛 贊曰此明堪授初頌明捨權就實後頌除疑記得喜者喜無量不嫉衆生成佛事無畏者決定義作師子吼理決定故於菩薩中者對勝人前故二乘發心皆菩薩故依真實理說一乘道名爲正直不隨機權說有三故名捨方便但說無上一乘之道即顯今直唯說一道非於餘故地前頓悟菩薩疑自獨得菩提聲聞無分不定種姓菩薩疑於佛果自亦無分欲退向小故今聞法此疑皆除現前名高千二百聲聞疑不得作佛今正爲說悉當作佛涅槃由此說陀洹八萬劫乃至辟支十千劫到到於十信初發心也此等脩行極爲遲鈍不如初脩始業菩薩此據不定非諸二乘皆定作佛故涅槃第三十四云我於一時說一乘一道一行一緣能爲衆生作大寂靜永斷一切結縛愁苦苦及苦因令一切衆生到於一有我諸弟子不解我意於大衆中唱如是言如來說須陀洹乃至阿羅漢皆得佛道等故
- (234) [146] Skt. 57.13-14; Tib. 57.13-14; Chin. 10a22-23.
- (235) 733c4-6: 【165】經 如三世諸佛至說無分別法 贊曰結成法儀也大乘妙理體無分別三乘不異悉皆作佛故說之也
- (236) [147] Skt. 57.15-58.2; Tib. 57.15-58.2; Chin. 10a24-27.
- (237) 733c7-20: 【166】經 諸佛興出世至斯人亦復難 贊曰下第六段有七頌頌前第一未聞令聞分四二頌法說四希二頌半喻顯二希一頌半勸信一頌歎結此初也一佛出希二說法希三難聞希四能聽希佛出希者如賢劫千佛今第九住劫已四佛出後第十劫彌勒佛出至第十五劫有九百九十四佛出此劫壞已鵲盧支佛獨王一劫經十二劫後始有星宿劫千佛中初淨光稱王佛出後更三百劫空過無有佛故佛希也如迦葉佛住壽七日不說此法及今釋迦成佛四十年方說此經故是說希常處八難巨與佛相逢故難聞希難逢出

日更聞小乘不希大法故能聽希

(238) [148] Skt. 58.3-6; Tib. 58.3-6; Chin. 10a28-b3.

(239) 733c21-26: 【167】經 譬如優曇華至過於優曇華 贊曰喻顯二希也一頌頌法出希一頌半頌聞讚希聞法及讚歎過優曇華故行眞法行則爲供養三世佛故自聽聞教他聞合名聞法慶慰聞此云歡喜讚歎聞此云讚行此四種皆眞行故

(240) [149] Skt. 58.7-8; Tib. 58.7-8; Chin. 10b4-6.

(241) 733c27-28: 【168】經 汝等勿有疑至無聲聞弟子 贊曰勸信勿疑

(242) [150] Skt. 58.9-10; Tib. 58.9-10; Chin. 10b7-8.

(243) 733c29-734a1: 【169】經 汝等舍利弗至諸佛之祕要 贊曰歎結深妙此爲諸佛祕藏勝道

(244) [151] Skt. 58.11-12; Tib. 58.11-12; Chin. 10b9-10.

(245) 734a2-7: 【170】經 以五濁惡世至終不求佛道 贊曰下第二大段有三頌頌破四疑分三初一頌佛何時出化以三乘出五濁世次一頌云何知增上慢若我弟子自謂阿羅漢不信此法無有是處一頌云何堪說除佛滅後現前無佛此初也

(246) [152] Skt. 58.13-14; Tib. 58.13-14; Chin. 10b11-12.

(247) 734a8-12: 【171】經 當來世惡人至破法墮惡道 贊曰頌釋云何知增上慢當來惡人不信此法者多是增上慢不但增上慢所餘惡人亦不能信佛在慢者上已說相滅後難知故此獨舉

(248) [153] Skt. 59.1-2; Tib. 59.1-2; Chin. 10b13-14.

(249) 734a13-19: 【172】經 有慚愧清淨至廣讚一乘道 贊曰頌釋云何堪說有具四德一慚崇重賢善復顧自身羞恥過罪二愧輕拒暴惡復顧世間羞恥過罪三清淨內外無瑕棄世名利四志求佛道不顧二乘能信此經不愚法類乃可爲說說愚法者若遇餘佛便得決了一乘道也

(250) [154] Skt. 59.3-6; Tib. 59.3-6; Chin. 10b15-20.

(251) 『法華經』のサンスクリットとチベット語訳は、144と145の2偈である。

(252) 734a20-23: 【173】經 舍利弗當知至自知當作佛 贊曰此中三頌頌品第四大段勸發喜心令欣作佛初一頌半明佛法皆同不學不了後一頌半勸知生喜欣求作佛如文可解

（本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号16K02161)による成果の一部である）